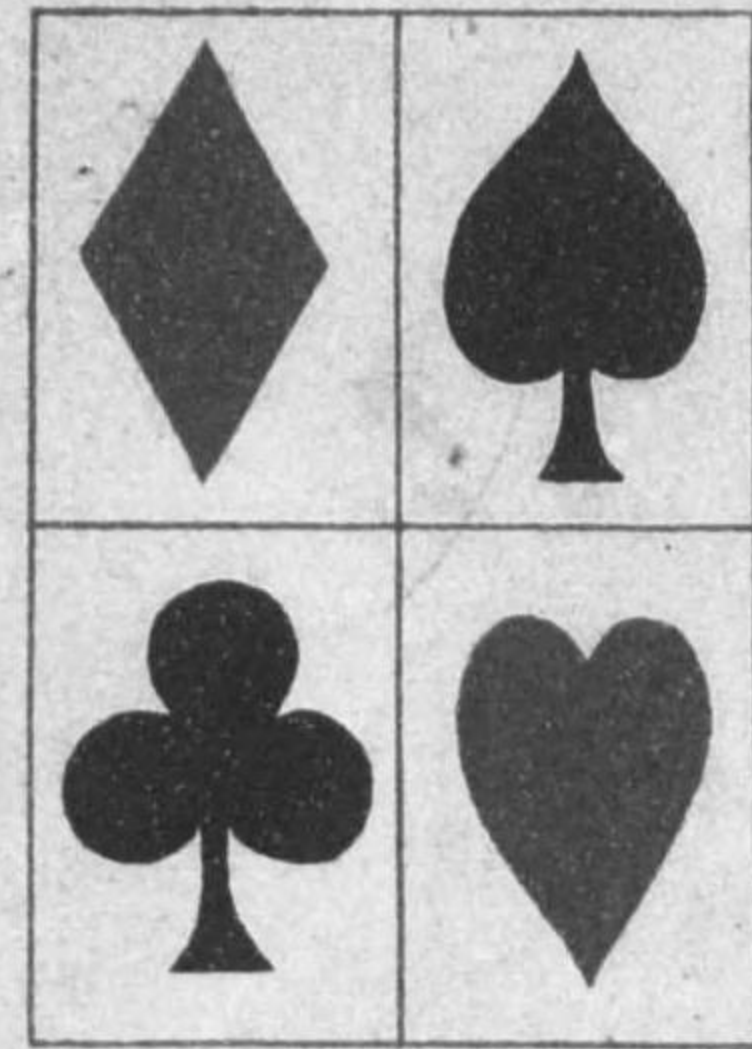
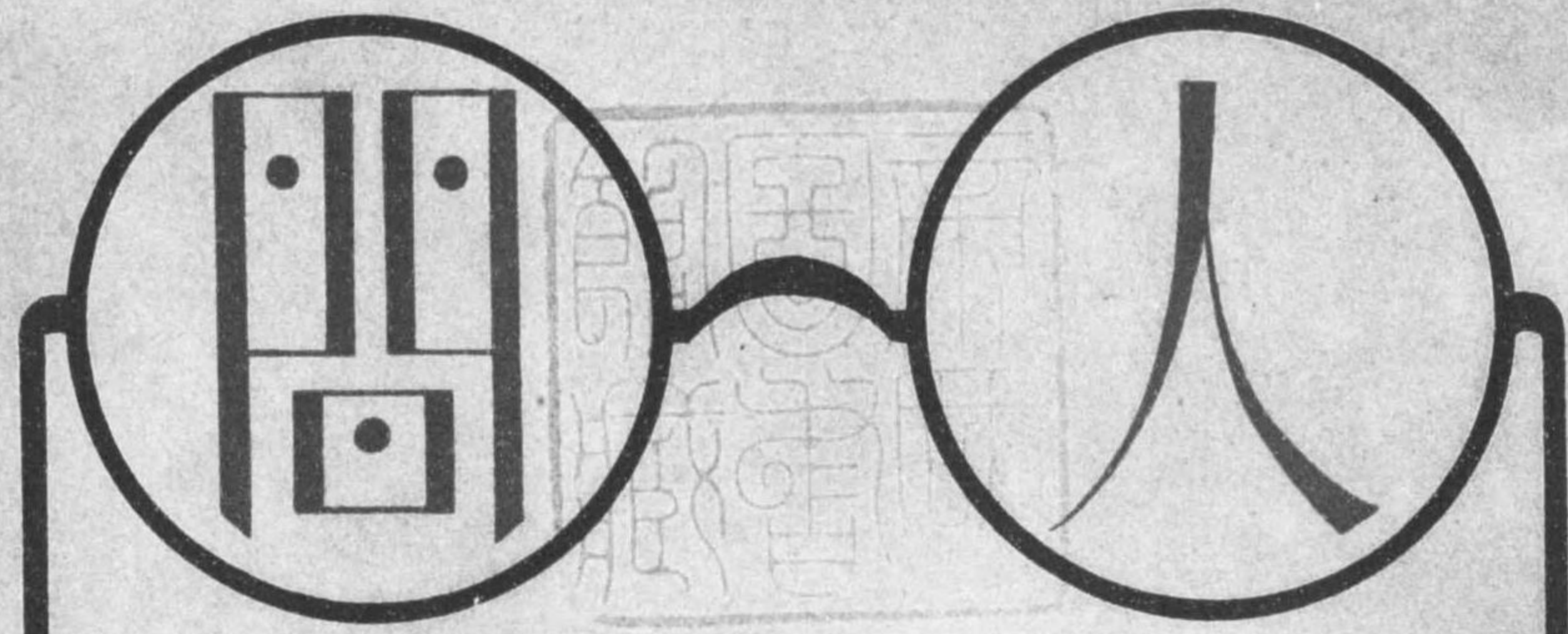


540  
89



始





鈴木善太郎作

大正

内交

はしがき

◇映話小説「人間」は、さきに大阪朝日新聞が一萬五千號記念として懸賞募集した中の最も傑出した作品の一つであります。最初から當選は一篇に限定されたために「大地は微笑む」を以て選に當てられましたが、その筋書きの複雑にして變轉極まりなき面白味は、この「人間」をして特別入選とし、本社は原作者鈴木善太郎氏に賞金一千圓を呈したによつても、内容價値を十分裏書きされるでせう。「人間」はいはば「大地は微笑む」の姉妹篇です。

◇原作者の最初の題名は「天と地」でありました。「人間」はその改題です。人間と運命との闘ひが如何に眞剣であつて、如何に又皮肉であるか、運命に引きずられ、運命を引きずりつゝ、流轉極まりなき人生を、作者は神々のもてあそぶ「すごろく」に假託して深刻な諷刺を提示し、鋭利なる

メスを揮つて縦横無碍に解剖してゐる。映畫小説「人間」は人生そのもの、フィルムにも見られます。

◇「人間」は日活社の手によつて（役割は本文記載の通り）撮影、各常設館に上映されて、さきに「大地は微笑む」が受けた大喝采ミミウやう多大の感激を全國に呼び起したのであります。

◇本篇のストーリーが大阪朝日新聞紙上に連載された際には、挿繪の代りに映畫のスクリーンを挿入して讀者に見えましたが、本書でも特に之を高級グラビュア印刷に附し巻頭に三十二頁を添へました。本文ミ兩々相まつて一段の光彩を放つだらうと思ひます。

大正十五年一月

目次

寫眞、フォトグラビュア印刷).....一三三

◆新 郎 は 黒 眼 鏡 を 見 る と ア ツ と 叫 ぶ ..... (新 郎 — 中 野 英 治、花 嫁 — 梅 村 蓉 子).....一

◆副 總 裁 が 歸 っ て 見 え た ..... 近 江 屋 の 弟 御 だ ..... (副 總 裁 — 星 野 弘 喜).....二

◆ま あ ..... 次 郎 ち ゃ ん ..... (お 千 代 — 岡 田 嘉 子).....三

◆て は さ よ う な ら ..... (お 千 代 — 岡 田 嘉 子、次 郎 — 中 野 英 治).....ミ ツ ル リ

と 足 を す べ ら せ て ..... (兼 屋 主 人 — 阪 東 巴 左 衛 門).....四

◆次 郎 は 何 も の か に 吸 ひ つ け ら れ る や う に ..... (次 郎 — 中 野 英 治、黒 眼 鏡 の 男 — 高 木 永 二).....五

◆次 郎 ち ゃ ん は ど う し て あ る て せ う ね ..... (お 千 代 — 岡 田 嘉 子).....五

お絹市川春衛

次郎は長崎に向つた……………(次郎、中野英治、小野田、高木永二)……………七

あの眼!あのロ!…(雪江、浦邊桑子)もつと好いところ?…八

(次郎、中野英治、小野田、高木永二)……………八

だまされたのかしら……………(次郎、中野英治、小野田、高木永二、雪江、浦邊桑子)……………九

たつたこれツ切りか……………(小野田、高木永二、雪江、浦邊桑子)……………九

ほんたうの心をいつておくれ!…(次郎、中野英治、雪江、浦邊桑子)……………一〇

……………(浦邊桑子)……………一〇

黒眼鏡の底に恐ろしい眼を…(次郎、中野英治、雪江、浦邊桑子、小野田、高木永二、お千代、岡田嘉子)……………一一

……………(お千代、岡田嘉子、黒眼鏡の男)……………一一

汽車は東海道をヒタ走りに……………(お千代、岡田嘉子、黒眼鏡の男、高木永二)……………一二

……………(高木永二)……………一二

なつかしい次郎ちゃんが……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

……………(お千代、岡田嘉子)……………一三

「人道に外れてゐる」 「ヤツつけろ」 「さあどうするのだ

青二才」 「運命とは？」 (牧師—獅子柴柱雄、エレナ—砂田駒子、

次郎—中野英治)……………二二

「華やかなダンスの真最中」 「今夜十二時に強盗が」

(次郎—中野英治、羽田—三橋豊、綾子—梅村蓉子)……………二五

「もしく」 (綾子—梅村蓉子)……………二四

「泥棒」 「君はわれくの恩人だ」 (次郎—中野英治、羽田—三橋豊、

綾子—梅村蓉子)……………二五

「あのハワイの楽しい思出を」 (次郎—中野英治、綾子—梅村蓉子)……………二六

「わたしとお千代を残して」 「まあ委せておきたまへ」

(次郎—中野英治、羽田—三橋豊、綾子—梅村蓉子)……………二七

「諸君わたしはさんげします」 「第六の黒眼鏡」 (羽田—三橋豊

綾子—梅村蓉子、次郎—中野英治、ホーイ頭—高木水二)……………二八

「運命を暗示する黒眼鏡の出現」 (黒眼鏡の男—高木水二、次郎—中野

英治)……………二九

「おれの安息所は」 「誰かおれを抱いてくれ」 (次郎—中野英治)……………三〇

「天と地の間に人間がゐます。天と地を分けるものが人間

です」 「そしてまた天と地に打たれるものも人間だ」

「なつかしい糸くり唄が聞えて来た」 (次野—中野英治)……………三一

「二人はいつまでも」 (次郎—中野英治、お千代—岡田嘉子)……………三二

本文……………一六二

ある出来事……………二

登場人物と俳優……………四

序詞……………五

お千代……………六

黒眼鏡……………三三

# 欠

目次

百圓札	二八
雪江	三六
母の死	四九
ジャック・ナイフ	五七
道頓堀	七二
光勇	八〇
パニック	九六
布哇へ	一〇三
強盗	一一三
歸朝	一二三
結婚	一三一
天と地	一四八



~~~~~

~~~~~

~~~~~

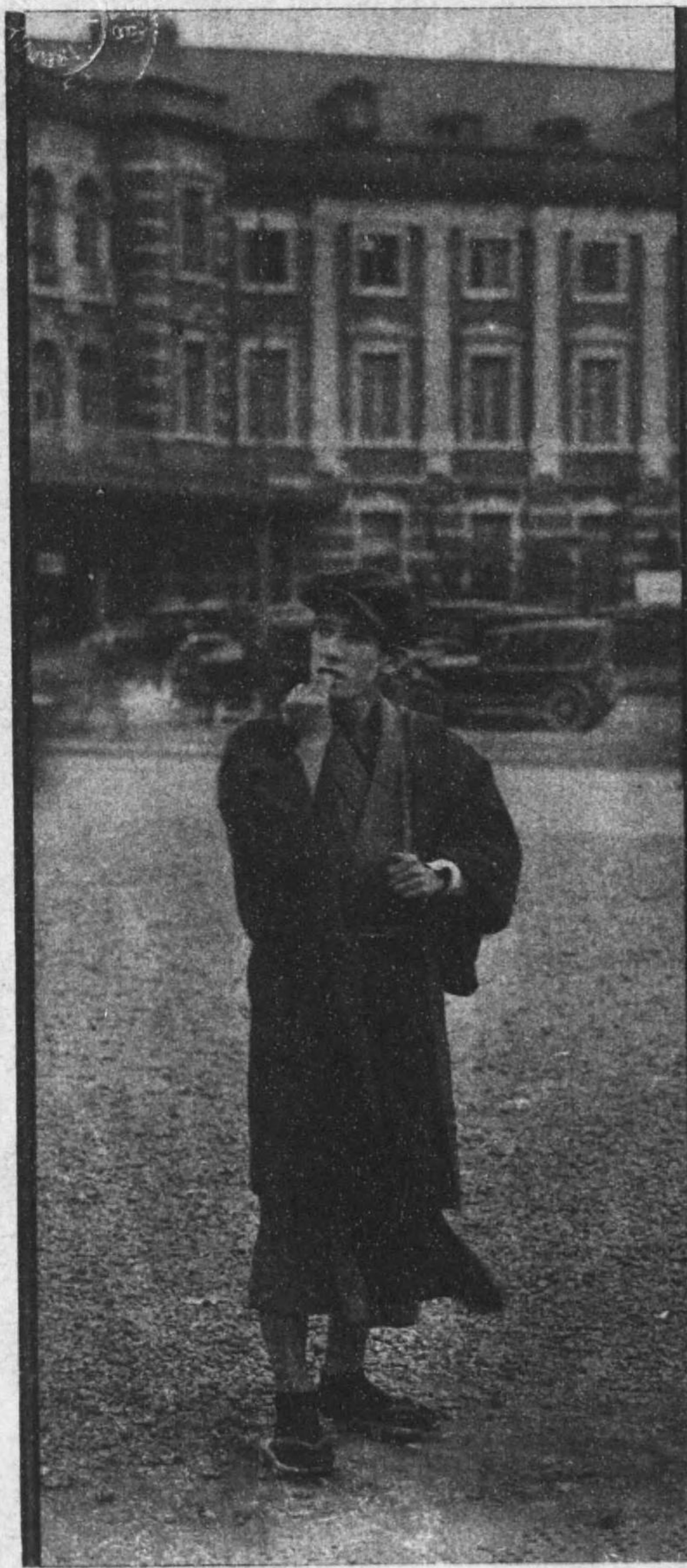
一代千お  
子嘉田岡

~~~~~

！んやち郎次……あま

# 欠





次郎は何ものかに吸ひ  
つけられるやうに……  
次 郎 中野英治  
黒眼鏡の男 高木永二



くはまきつなら……  
お千代 岡田静子  
次 郎 中野英治

ツルリと足をすべらせて……  
薬屋主人 阪東巴左衛門





次郎は長崎に向つた……  
 次 郎—中野英治  
 小野田—高木水二



次郎ちゃんはどうして  
 あるてせうね……  
 お千代—岡田厚子  
 お絹—市川春衛



「だまされたのかしら……」  
 次 郎—中野英治  
 小野田—高木永二  
 雪 江—浦邊琴子



「あの眼—あのロー」  
 雪 江—浦邊琴子



「ちよと好ごうよ……」  
 次 郎—中野英治  
 小野田—高木永二



「黒眼鏡の底に恐ろしい眼を……」  
 次 那—中野英治  
 雪 江—浦邊葵子  
 小野田—高木水二  
 お千代—岡田嘉子



「たったこれツ切りか……」  
 小野田—高木水二  
 雪 江—浦邊葵子  
 「ほんたうの心をいつておくれ」  
 次 那—中野英治  
 小野田—高木水二



「……が ん や ち 郎 次 い し か つ な」  
子 嘉 田 岡 一 代 千 お



お千代  
岡田嘉子  
黒眼鏡の男 高木永三



「汽車は東海道を  
ヒタ走りに！」

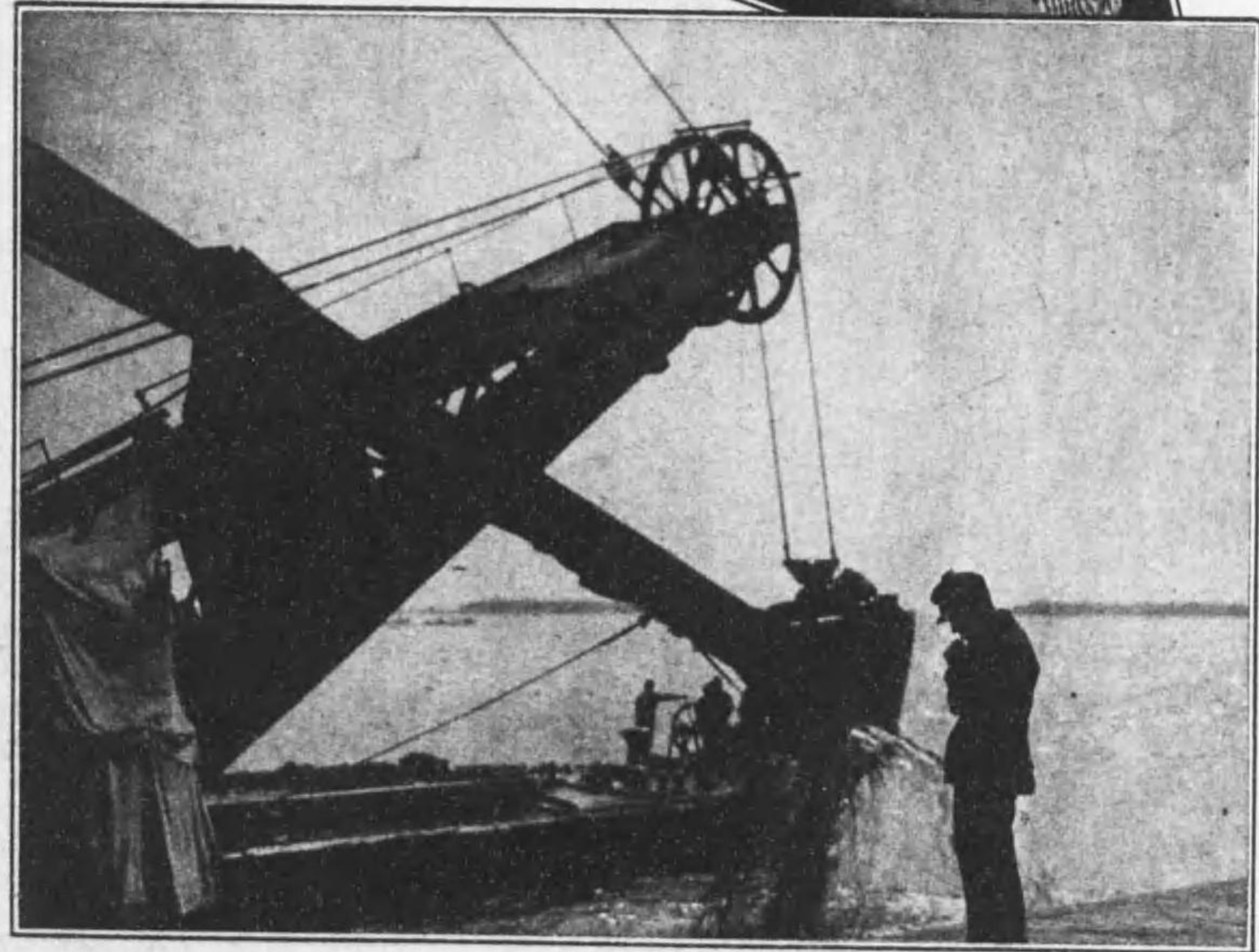
# 欠



新装ツル

目れ別のイサ

子桑透浦一江 雪  
治英野中一郎 次





「大崎はんが呼んでほる……」

次郎 中野 英治  
光勇 酒井 米子



「光勇を呼んで来い!!」  
次郎 中野 英治

# 欠



◆…せつまりはでん呼が人は那旦の漢北◆  
子米 井酒一勇光  
子良 川徳一春若



◆今日限りといふことに……◆  
大崎一高木 永二



◆大崎と次郎との仲に  
はさまれて光勇は  
好い日を送り迎へた……◆  
光勇一酒井 米子





◆たつ知を事るあて合隣はと獄地と圖天◆  
子駒 田砂—ナレエ



ミバニヲクミ

次郎—中野 英治

大崎—高木 永二  
次郎—中野 英治

◆もう駄目だツ!!◆

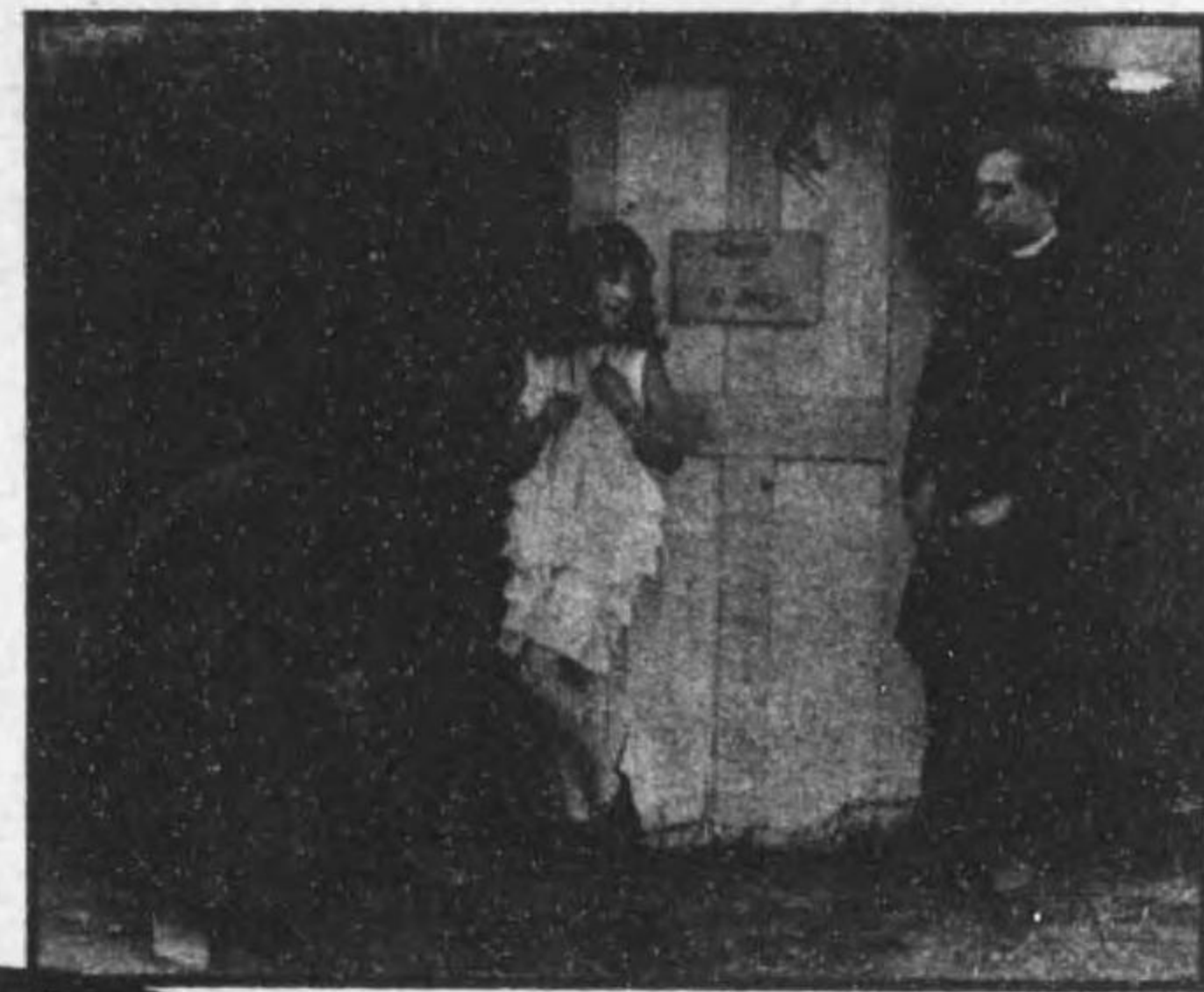




スナガなかや華々  
……中景の



今夜十二時に強盗が……  
次郎——中野 英治  
羽田——三所 豊  
綾子——梅村 蓉子



運命とは……  
牧師——御子栄杜雄  
エレナ——砂田駒子  
次郎——中野 英治



人道に外れてゐる！



ろけつつ々々



さあどつするのだ！青二才！



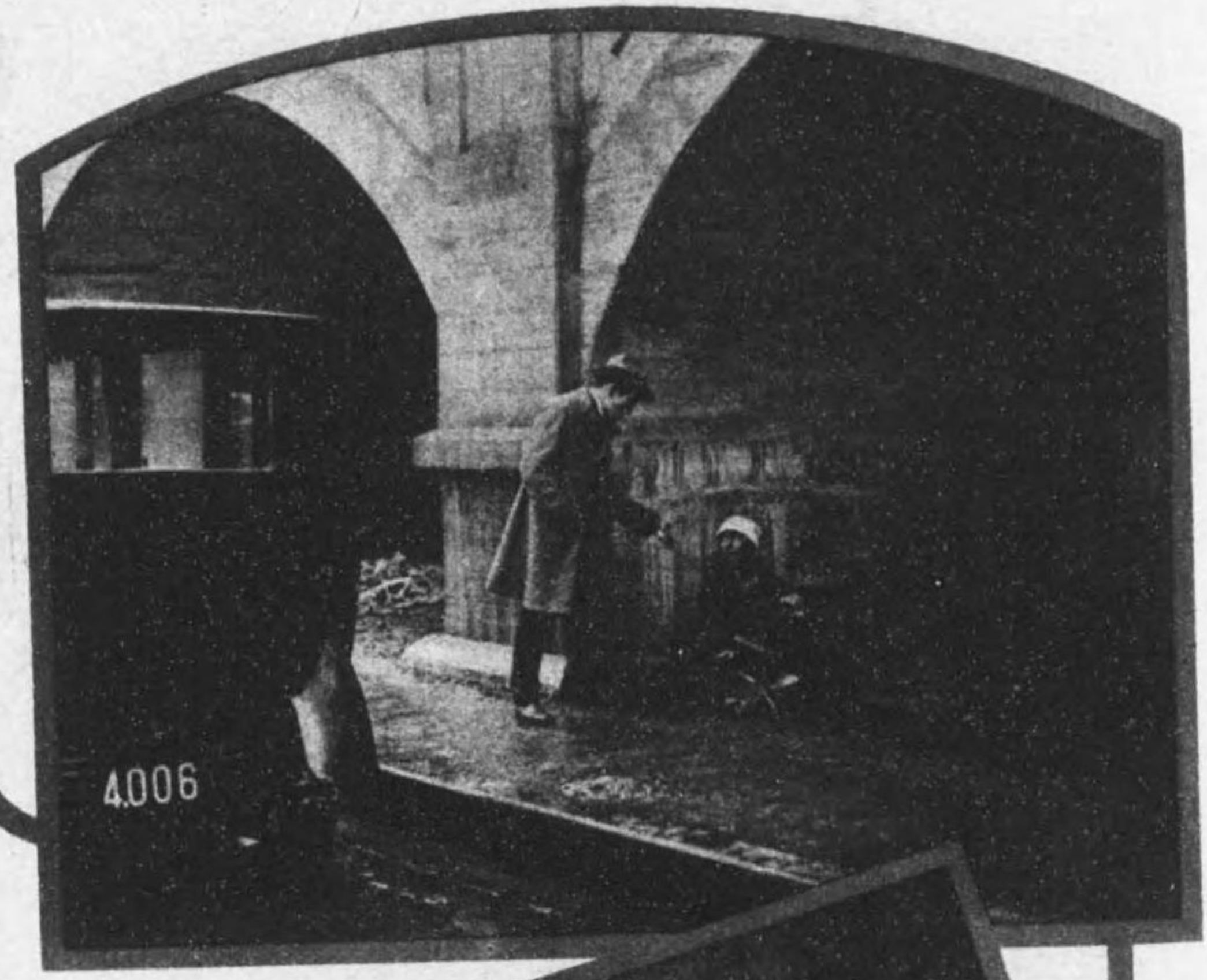
「泥棒！」

「君はわれくの悪人だ！」  
 次郎 中野 英治  
 羽田 三 豊  
 綾子 梅村 蓉子



「あしく……」  
 綾子 梅村 蓉子

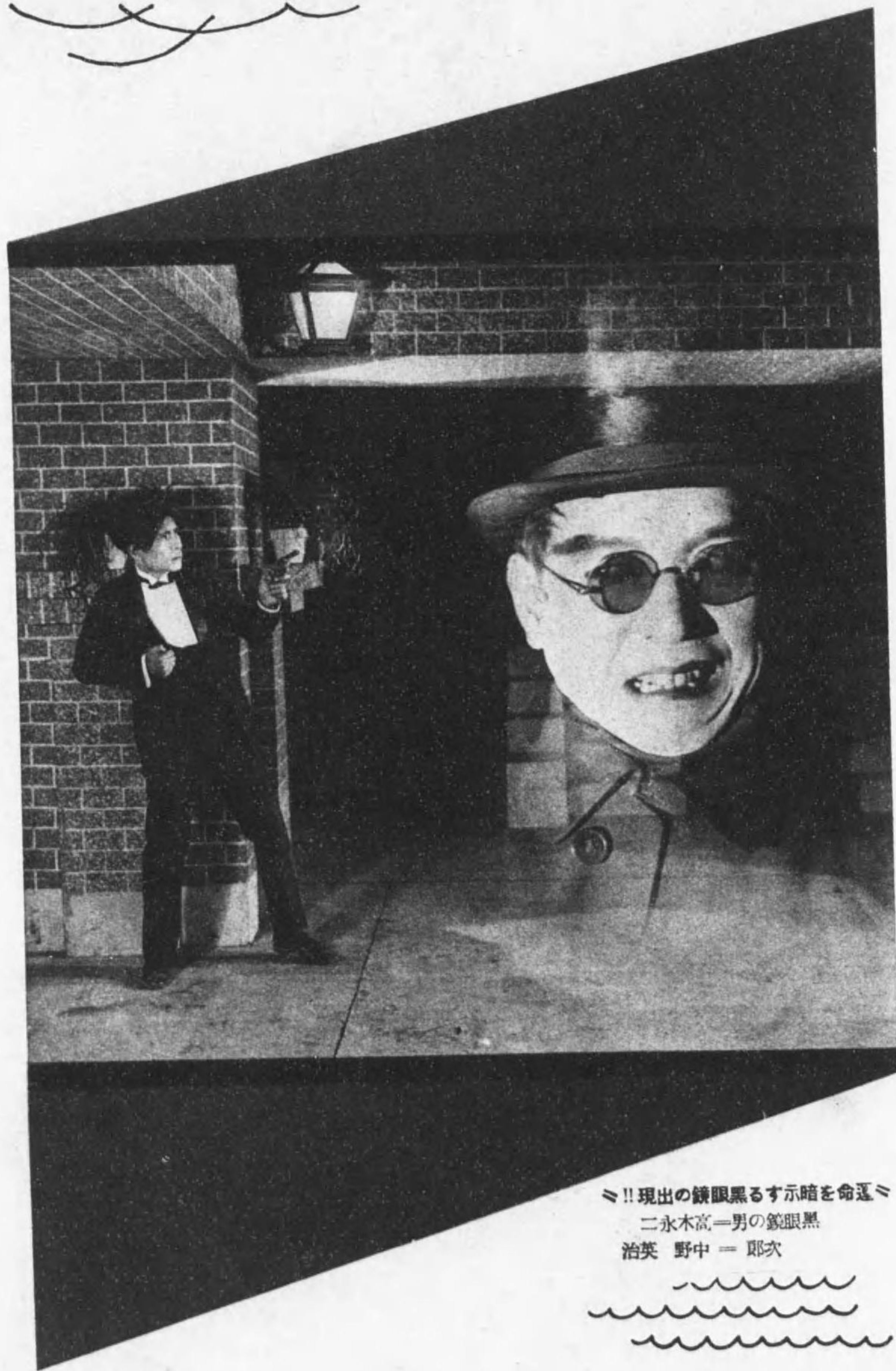
「わたしとお千代を離して……」



「まああわせて  
おきたまへ……」  
次郎 中野 英治  
羽田 三折 豊  
綾子 梅村 蓉子



「あのハワイの楽しい思い出を……」  
次郎 中野 英治  
綾子 梅村 蓉子



≪!! 現出の鏡眼黒るす示暗を命運 ≫  
 二永木高一男の鏡眼黒  
 治英 野中一 郎次



≪!! 鏡眼黒の六第 ≫  
 豊 樹三 = 田羽  
 子容 村梅 = 子綾  
 治英 野中 = 郎次  
 二永木高 = 頭イーボ

≪ 諸君わたくしはさんげします!! ≫



天と地の間には人間がいます。天と地を分けるものが人間です……そしてまた天と地に打たれるのも人間だ!!



なつかしい糸くり唄が聞えて来た

次郎 中野 英治



!!れくてい抱をれおか誰!!  
治英 野中=郎次



おれの安ん所は……

# 人間

鈴木善太郎 原作



二人はいつまでもく……  
次郎 中野 英治  
お千代 岡田 嘉子

ある出来事

東京帝國ホテル——玄關には澤山の自動車が集まつて居る。大廣間の方からは、人々の胸を浮き立たせるやうな「結婚式のマーチ」がひびいて来る。純白の服をつけた數多のボーイたちは列を作つて皿を運ぶ。

コック場は戦場のやうに忙しい。

ホテルの大食堂——素晴らしく大きなシャンデリアは、その夜のすべての光りを吸ひ集めたやうに、燦然として光り輝いて廣間の隅々までも隈なく照らした、そしてそのシャンデリアから幾百筋もなく八方へ引き廻された紅白紫黄の巾廣リボン、その夜のいきめきを物語るかのやうに、かの「結婚式のマーチ」のリズムに連れて揺れ動くのである。

E字型にしつらへられた食卓には雪のやうな白布が張られ、そのまごころには素的な盛花が大きな菊の花環を載せて据ゑられ、その盛花と盛花との間には、また美しい花片が春の野の落花のやうに散らされてある。

銀色にかゞやくナイフ、フォークのきらめき、琥珀色に匂ふ酒のコップ、——それらを取りかこんで百に餘る男女はみな美しく装ひをこらしてその席に列なり、今しもある結婚披露式は、世にも盛大にその幕を開いたのである。花嫁花婿は心持面伏せに卓の中央にならび、左右には媒酌人夫妻が、しかつめらしい顔をならべた。そしてその向ひには當夜隨一の來賓として、男爵である有名な實業家が白髯をしごいて坐り、それに隣つて花嫁の父親、某實

人易會社の社長が坐つてゐた。

やがて酒の力でいくらかい、氣持になつてゐる人々は、パチパチと破れかへるやうな拍手を送つた。そこで媒酌はおもむろに立上つて當夜の挨拶を述べた。

今度は以前にもまさる拍手が起つて、男爵が立つた。白髯はいく度かしごかれた。場に馴れた祝ひの言葉はかなり長く続いた。が新郎新婦には

「たゞお二人がともに幾千代かけて圓滿なる家庭を営まれんことを切に祈ります。」といふ言葉だけが耳に残つた。

「乾盃！乾盃！」誰かがいつた。

媒酌人は新郎新婦に眼くばせをした。二人はしみやかな黙禮をもつて人々の拍手に答ふべく立ち上つた。誰も乾盃の用意をした。

その時である。新郎は立つ時に椅子が引か、つて立ちにくかつた。それを逸早くも見てみつけた黒眼鏡のボーイ長が彼の方へ走り寄つた。新郎は何氣なくフトその顔を見た。そしてその黒眼鏡に氣がつくと突然

「アッ！」と叫んでその場にヨロ／＼と昏倒しかつた。手近にあつたコップが下におちて音を立て、破れた。シヤンパンは白布の上に流れナイフ、フォークは飛上つた。人々は吃驚して腰を浮かせた。

華やかだつた結婚披露會は忽ち大混亂に陥つたのである。

そは何故に？——この謎は次第に展開される次の物語りによつてやがて解けて行くであらう。



優 俳 と 物 人 場 登

室伏次郎	中野英治
その母	市川春衛
お千代	岡田嘉子
薬屋主人	阪東巴左衛門
その息子丑太郎	東坊城恭長
金千壽	森東清
雪枝	浦邊象子
社長羽田	三樹豊
その娘綾子	梅村蓉子
藝者光勇	酒井米子
妹藝者若春	徳川良子
牧師スベンサア	御子柴杜雄
その娘エレナ	砂田駒子
政黨副總裁	星野弘喜
黒眼鏡の男	高木永二

序 詞

神々はある日「すご六」をもて遊んだ。一つのコマは「名」のところへ進んだ。ある時はコマは「富」を占めた、桃色の「戀」を占めた。しかし轉變するサイコロはコマを「落魄」「貧乏」「失戀」などといふ場にも導いた。最後に「上り」を占めたコマはたゞ一つである。残りの無数のコマは神の手によつて「振り出し」に突きもどされた。神はコマのことを「人間」と呼んでゐた。

琵琶湖の畔。美しい水のひた／＼打寄せる美しい岸を持つ、入江に沿った小さな町——その町の真中を貫く一本の白い道は、町端づれから街道につゞいて遙かに松並木の間を縫うたり、波打ち涯を辿つたりして、幹の赤松が目立つて美しく見える小山の向ふに消えてゐる。

町の家並には國旗が翻つてゐる。その旗の下には、軒並みに澤山の町の人が群集して何かを心持ちに待つてゐる。中には紋付を着た人もゐる。制服制帽の青年團の一隊が國旗を恭しくかざして整列してゐる。その後から脊の低い子供が前へ出やう／＼して列を抜ける、ミ傍の青年團員が荒々しくその子供を捕へて後ろへ追ひやつてしまふ。子供はペソを掻いて傍の父親にすがる、父親は怒つたやうな顔をしながら子供を肩にのせる。子供は手で父親の頭をか、へる、時々眼をかくしてしまふので父親が叱つたりする。

群集が段々増えて来る。空にパツミ煙火が揚る。小山の蔭から四五台の人力車が現はれる、人々はぎよめく。

町の藥屋の小僧、次郎が自轉車に乗つて走つて来た。十九歳、丈夫さうな體格、惘瀟らしい眼付、色の白い美少年である。青年團の一人は突然次郎の前に立ちふさがつて嘖鳴る。

「馬鹿野郎！自轉車を下りろ。」

次郎は面喰らつて自轉車を下りる。

「道の真中にちやいかん、端へ寄れ！」

次郎は道端に捕つてゐる男や女の中に追ひ込められる。

「どうしたんです、これは……」ミ次郎は傍の男に聞く。

「黨の副總裁が歸つて見えたんだ。お前さんは知らんかのう、町の近江屋の弟御だ。」

「あ、あの造り酒屋の……」

人力車は今松並木を通つてゐる。肥つた男がノツソリ向ふから歩いて来る。帯に巻きつけた時計の太い金鎖がガチャガチャミ鳴る。界限切つての金持ちミいはれる「新田の旦那さま」だ。「新田の旦那さま」が来るミ團員は皆丁寧に頭を下げる。彼は一寸首を後ろの方に曲げてふんぞり返る。

またパツミ煙火が揚つた。群集は俄かに緊張する。人力車は町に入つた、威勢のい、車夫の引く一番先の俥に乗つてゐるのは警察署長、次ぎに二人引きの車で副總裁が乗つてゐる。副總裁は俥の上に容態ぶつて、その度の強い眼鏡の奥から道の兩側の群集をじろ／＼見てもはる。群集は恭しくおじぎをしてゐる。副總裁の視線が「新田の旦那様」の上に落ちる。「新田の旦那様」はまるで電氣で打たれたやうに縮み上つて、その上半身を地上ミ水平に曲げて最大級の敬禮をする。

「萬歳！」ミ群集は被りものを振つて叫ぶ。副總裁の一行はかうして通り過ぎた。

群集は俄かに一面に道の真中へ雪崩れ出る。塵埃がパツミ立つ。先の父子がヒョロ／＼ミ轉がりさうにしてのめつて出る。「新田の旦那様」は群集に揉まれて、その太い身體がまるで押し潰されさうになる。

「救けてくれ！」

「新田の旦那様」は悲鳴を揚げる。青年團の連中はその急を救ふために四五人馳せつける。「新田の旦那様」はやうやく助け起されて立上る。

次郎は自轉車を持つてゐるので、殊に群集の中で困つてゐる。さう／＼押出されて来て、今やうやく二三歩足を運び始

めた「新田の旦那様」に自転車をぶつつける。「新田の旦那様」はヒョロ／＼になつてまたこけさうになる。青年團の連中がそれを支へる。そして次郎に向つて嘖嘖りつける。

「馬鹿野郎！こんな人ごみの中に自転車を持つて来る奴があるか。」

×

透きこほつた、美しい水の中である——白い砂の上には小さな石が澤山沈んでゐる。そしてその中に一つ大きな石が沈んでゐる。その石に鳥のサ、身を思はせるやうな美しい女の足がキチンと揃つてのつてゐる。小さな魚が二三匹その足を、つきに來ては逃げ、またつきに來る。突然その足が泡を立て、バザ／＼と動く、魚は吃驚して逃げる。

湖のはより——洗濯ものを絞つて小さなたらいに入れ、傍らにおいたま、岸に腰かけて足を水の中に入れてながら、暮に近い湖の沖をうつ／＼と眺めてゐる少女がある。桃割れに結ひた髪はうるしのやうに黒く、クツキリと襟足の白い後姿はすでに美人を想像させる。たゞあらひ緋の木綿着物に帯をきつちり結び、襟をかけた、その着こなしに、何處もなく垢抜けのせぬ田舎じみたところがあるだけである。

沖の方には港にいそ／＼白帆が二張り三張り、近くのはスーツと夢のやうに動き、遠くのは、動くも見えず——。その湖畔のすぐ傍を走る街道の向ふから、副總裁の通行のために思はぬ暇をとりをした次郎が、自転車を乗つて走つて來る。次郎は鈴を鳴らす。その音にその少女はフツ／＼とこちらを向く。

「まあ、次郎ちゃん——」その少女は思はず片手を上げる。次郎はゆきすぎかけて、すぐその傍で自転車を止めて下りる。

「千代ちゃんぢやないか。」

「家へ歸るの？」

「あ、一しように歸らう。」

お千代はうなづいてたらいを抱へ、次郎と一しうにならんで歩き出した。

「大へんおそくからぢやないの。」

「お店はもつ／＼早く出ただけだし、一軒使ひに寄つたのし、えらい人が通る／＼いふんで止められたので、おそくなつたんだよ。」

「さう？えらい人が通る時には通行止めになんかなるの？」

「さうらしいよ、それに自転車で乗つてゐたらう、／＼とも通れない／＼から人出だから、仕方なく見物してゐたのさ。」

「えらい人つて誰れ？」

「何／＼か政黨の副總裁ださうだ。町の造酒屋の當主の弟だよ、出世したので故郷へ錦を飾りに來たんだね。澤山ならんでゐる人がみんなベコ／＼と頭を下げたよ。その人が若い時分には呼捨てにしてゐた／＼かいふ「新田の旦那」なんか、一番丁寧／＼に頭を下げてたつて。」

「まあえらいんだわね。」

「うん、僕も一寸頭を下げたよ。」

「誰れだつてきつ／＼獨り／＼に頭が下るに違ひないわ。」

「千代ちゃんだつて頭を下げる／＼思ふかい？」

「何故？當り前ぢやないの。」

「そりやさうだらうな。僕を叱り飛ばした青年團の奴、あいつもベコ／＼してたつてなあ。僕も人に頭を下げさしてやり

「たいな。」次郎は一寸亢奮する。

「えらい人になれば誰れだつて頭を下げるわよ。」

「そんなら僕もえらい人にならうか。」

「ならうかなんて。きつこおなりよ、次郎さんがえらい人になつて、人に尊敬されるのを見たら、私そんなに嬉しいだらう。」

「僕、東京へ行かうか知ら……」

「えつ、東京へ行く？」

「えらい人はみんな東京にゐる」

「東京へなんか行かなくなつて、えらい人になれるぢやないの。」お千代は暗い気持ちになる。

「イヤ駄目だ、えらい人はみんな東京にゐる、政治家だつて、大將だつて、みな東京にゐる、東京に行かなけりやえらい人になれないよ——えらい人になつたら——あの副總裁もさうだつた——こんな顔をして、手を胸に背中にかうやつて……」

……空想に耽つて自轉車の手をはなす、自轉車が轉げる。

「アツ痛ッ。」

お千代の足の上へハンドルが當る。次郎は吃驚して自轉車を起す。

「堪忍々々、痛かつたかい？」

「い、え、い、の。何ともないわ、痛かないわ。」

次郎は自轉車を傍の松の木に立てかけて、お千代の足の泥を落してやる。

「少しすりむいて血が出てるよ。」

お千代もたらひを置いて紙を出して血をふく。

「痛いかい？」

「い、え、ちつこも。」

二人は顔を見合はせてニコリする。そしてそのまゝ、その松の木の根方に腰を下ろしてならぶ。

「ねえ、次郎ちゃん。もうえらい人になんかなるのお止しよ。」

「え？何故？」

「だつてえらい人にならうと思へば東京へ行くつていふんでせう。次郎ちゃん、東京へなんか行かうと思つてるの？」

「うん、思はないこゝもないけれど——」

「でせう、だからもうえらい人になんかならなくつたつて好いから、東京へゆかうなんて思はないでおくれよ。ねえ。」

「だつて——」

「だつて、もしか次郎ちゃんが東京へゆくんだったら、妾、さびしいんですもの。」

「——」

「ねえ、次郎ちゃん。ねえ、ゆかないでねえ。ねえ。えらい人になんかならなくつても好いわ。」

お千代は思はず次郎の手をおさへる。そして二人ともハツミなつてその手を引く。

「もう家へ歸らうよ。」

「え。」

二人は立上つて歩き出す。すぐ次郎の家である小さいな田舎の家。門の傍に大きな柿の木が一本茂つてゐる。お千代

が先へ小走りに入る。

「おばさん。次郎ちゃんが歸つて来たのよ。」

「まあ大へんおそくからだねえ。」母親が迎へに出る。

「来るんならもつゝ早くから来ればよいのに。」

さいひながらうれしそうに次郎を上へ上げる。三人は縁のある座敷にすわる。母親は茶を入れたりする。

「途中で寄り道をしてゐたものだから。」

「まあさうかい、それでもよく歸つてお呉れだつたね。」

「さうせ、ゆつくりは出来ないから、ミ思つたけれど、またさういつては大變だと思ひ返して来たんです。途中千代ちゃん逢つて。」

「さう、それはよかつたねえ。ちやうど好き、少し早ければ晩御飯にして一しよに喰べやう。」

お千代は甲斐々々しく晚めしの膳ごしらへをする。そして三人は一しよに食卓を圍んでいろ／＼話をする。楽しさである。母親は、またいつも繰返す同じ話を始めた。

「兄さんが去年亡くなつてから、お母さん一人ちや中々暮しも樂ではないが、お前に少しでも餘計に資本を作つてやらうと思つて、一心に働いてゐるんだよ。お前もお店にはよく御奉公しなければいけないよ。今に徴兵検査の年になつたら、お店からお暇をいたゞいて、お父さんの遺言通りにお前にお千代を一しよにした上、何か小商賣店でもさせたいと思つてゐるのさ。」

母親は楽しい未來の空想を頭に描く時、良夫や長男に先立たれた淋しさを打忘れる。お千代はいつも聞かされる話では

あるけれど、今日は先刻の道々のこみを思ひ合せて、特別に楽しくその言葉が耳に入つて、赫くなつて俯向く。両親も兄弟もない只一人身のお千代には、伯母にあたるこの次郎の母親と次郎が、この世の中すべてであつた。次郎はまた始まつたと思つた。けれどもお千代と同じやうに、先刻道傍で始めて手を握り合つたあの何はなしに楽しい瞬間、それを思ふと、今夜の母親の言葉は滿更でもなかつた。

「お母さん、僕だつていつまでも藥屋の小僧はしてゐませんよ、今にえらくなつてお母さんに安心させて上げますよ。」

お千代は「えらくなつて」といふ言葉に不安を感じる、母親はうれしくて堪らないやうにニコ／＼する。次郎は「えらくなつて」といふ自分の言葉に、あの副總裁のこみを思ひ浮べる。高慢ちきな「新田の日那様」がペコ／＼頭を下げたこみを思ひ出す。——俺もきつゝあの副總裁のやうになつて見せる——と考へるが、母にはそれをいひ兼ねる。お千代を見るに、彼女は次郎の亢奮した言葉つきからその顔をデツミ見つめてゐる、その視線とぶつかる。

「えらい人になるのはやめて下さい。」と、さういつた彼女のいちらしさが頭をかすめる。しかしまだ十九歳の少年には女のいちらしさよりも、青雲の志を呼び起さしめた、あの副總裁の方が魅力に富んでゐた。彼は直ぐに俥の上にふんぞり返つてゐた副總裁の姿を頭に描く。そして茶碗をこり上げて腕を張つて悠然として飯を喰べる。

「をかしたな恰好をして喰べるんだね。お前は——」

お千代も思はずふき出してしまつた。

次郎の勤めてゐる富田藥局、小さな町の大きな古い藥屋、店の帳場には支配人がソロバンをはちき三四人の小僧が袋張り忙しい。薄暗い店の間には天井に届きさうな大きな置看板が据ゑつけられて「家傳せんそく根切樂」ミそれは眞黒になつて讀み兼ねるほき、時代にくすんだ太い字が刻みつけられてゐる。

客に應接してゐた次郎は、その客が歸つていつたので袋張りを手傳はうとしたが、フト今朝主人からいひつけられた用事を思ひ出して、このほご新築された別館に舊館をとなぐ廊下へ來た。そしておからを布れに包んで彼はごしごし廊下をみがき始めたのである。その時突然新座敷の方で

「あつはつは、あつはつは。」と大きな笑ひ聲が響いた。それは常人にはまるで違つた三段返しにひびく笑ひ聲である。そしてその後から、そのこだまのやうに、普通の笑ひ聲が聞えて來た。

次郎は吃驚して、そつと障子のすき間からのぞき込んだ。するゝ意外にも、昨日街道筋で見たあの副總裁が五六人の客に取まかれて、盃をあげてゐるのが見えた。異様な笑ひ聲はまさにこの副總裁の笑ひ聲である。副總裁はこゝでも床の間にすわり肩を怒らせて悠然とまへてゐる。そしてその前には、いつも小僧達の前ではタイラントのやうに一片の慈悲心もない主人が、見苦しいはきベコく頭を下げ御機嫌を取りむすんでゐるのが見える。

「何のために來たのだらう？」と考へるひまもなく、次郎はその副總裁の威風に壓せられた。そしてまたごしごし廊下をみがきながら一度は自分もあれくらゐになつて見たいと思つた。廊下はピカピカと光つて來た。次郎の顔が廊下に映つる彼はそつとまた副總裁の様子をのぞいて見て、今度は鹿詰らしい顔をして廊下にうつして見た。

「何をしてゐるんだい？」と突然頭の上で聲がした。吃驚して見上げるに、そこに悪戯好きな主人の息子丑太郎がつ、立つてゐた。

「支配人がお前を呼んでゐるぞ」

丑太郎は悪賢さうな眼を光らせながらいふ。そこで次郎は店の方へ出て行つた。後で丑太郎はペロリと舌を出したが、あたりを見まはし誰もゐないのを見きはめるに懐から蠟を取りに出して、ピカピカと光つた廊下に塗り始めた。座敷の方で

手が鳴つた。客が歸る氣配である、丑太郎はそのまゝ、姿をかくしてしまつた。

「誰も呼びやしないよ」支配人はソロボンをはちきながら見向きもせず答へた。

「また丑太郎さんのいたづらか。」さう思ひながら次郎が再び廊下へ引返さうとする時。

「さうぞこちからから」主人が先頭に立つて副總裁を送り出すのが見えた。副總裁のあみからは「新田の日那様」もつきほかに町會議員もつゝいた。主人はいまみがき立ての廊下へ來た。またん——彼はつるり足をすべらせて仰向けにぶつ倒れて、そのはづみに石のやうに固い頭を副總裁の胸へぶつつけた。

「痛いっ。」副總裁は思はず叫んだ。主人はあはて、起上り、五六度もつゞけさまに頭を下げて恐縮した。

「いや、あなたこそなんだこゝで——」副總裁はすぐに威嚴をこり直した。そしてまた一行は玄關へ向つた。「新田の日那様」も二三度足を取られさうになつた。

「これはなかくよくみがけてゐる。」

彼は及び腰になつて副總裁の後につゝいた。次郎は客の去つた新座敷で、丑太郎がころげまはつて喜んでゐるのを見た。そして自分も可笑しくなつて思はず吹出したが、何だかんだ災難が振りかゝつて來さうな不安におそはれたので、そそくさそこを引上げて店へ來た。

副總裁を送り出した主人は、腰ミ頭をさすりながら以前の廊下へ戻つて來た。そして足で廊下をさぐつて見たが、今度は袂からマッチを出して火をすりつけ、廊下にあて、見た、そこからはスーッと煙が立つて廊下に塗つた蠟が少しながれた。

「やつぱりさうだ。」主人の顔は急に閻魔のやうに恐ろしい形相にかはつた。

「次郎、次郎は居らぬか。」

主人の聲は殺氣立つてゐる。次郎はすぐやつて来る。ミ主人はいきなり次郎の首玉をつかまへた。

「貴様はなぜこんないたづらをするのだ。」主人の手には力が入つてグイグイミ次郎の首玉をしめつける。

「わたしは何にも知りません」

「何？知らぬ。廊下をみがいたのは貴様だらう。」

「それはさうです。」

「その時貴様は蠟を塗つたのだらう。」

「蠟？そんなこみはちつこみ知りません、何か間違ひ——」

「何が間違ひだ、貴様に違ひない。折も折、主人に恥をか、せた上、客人に無調法をさせるこは、何こいつてあの御方にお詫びができる、この業つくばり奴。」

主人は次郎が逃げやうこみあせればあせるほぎ、力をこめて首玉をグイグイやつてゐるが、ミうく拳をかためて次郎の頭上に加へた。

「いたづらも好い加減にしろ。」

次郎は廊下へ投げ出される。そして主人はそのまゝ座敷へ入つてしまつた。次郎は口惜しくて涙ぐむ。しかしミうするこみも出来ずそのまゝ店へ出て来るこ、今度はいきなり支配人がけんつくを食はせた。

「何をしてるんだい。忙しい最中に、油ばかり賣つて。」

「何が油です、御主人に呼ばれてゐるのちやありませんか。」次郎は腹立ちまぎれに珍らしくも口答へをした。

「何をッ。支配人はバツミ算盤を投げつける。算盤は次郎の足にあたつた。」

「痛ッ！」

「少しは痛い眼もしろ。支配人は次郎をねめつける。次郎はこゝでもいひかへすこみができず、そのまゝ仕かけた薬袋を張りにかゝる。」

「今に見ろ！」次郎はきつこみ唇をかむ。そしてフト眼をあげた。薬棚の上には先きの東京の寫眞がかゝつてゐる。

「こんな主人や番頭に使はれてゐるもんか、今に豪い人になつて、ベコく頭を下げさせてやるぞ。もう俺は東京へ行くんだ。」

次郎はかうしてミうく東京へ行く決心をしてしまつたのであつた。

その夜薬屋の裏口から次郎は小さな風呂敷包みを抱いて忍んで出た。空には圓い月が出てゐる。彼は地上に長い影を引きながら街外れの方へ歩いて行く。そのうちにいつの間にかわが家の前まで來てゐるのに氣がついた。

「母にいつたら止めるにきまつてる。千代ちゃんだつて止めるにきまつてる。次郎はそこで立止る。」

「えらい人になるのはおよろしよ。」ミいつたお千代のこみを思ひ出す。ミまたあの主人の顔が頭に浮ぶ。つゞいて副總裁の姿が浮ぶ。

「だまつて行つちまはう。次郎はそつこ裏へまはる。そして台所の窓から家の中をのぞき込む。うちらではランプの下で母親が縫ものをしてゐるのが見える。自分の着物を縫つてくれるらしい。針を運びながら母親は唄を口ずさんでゐる。

からころく、絲くり車

絲はおかいこ絹の絲

まゆがをされば心も躍る  
くるくからころくるくく  
来るさいふのは口先ばかり  
わたしの待つ人なぜおそい

子供の時から、よく母親が歌つてくれた絲くり唄、聞き馴れた懐しい唄である。次郎はそれを聞くに、今更のやうに涙がこみ上げて来て、折角の決心もにぶるのであつた。しかしきつと思ひ返して涙を拭つた。

「お母さん、さようなら、しばらく僕は他所へ行きます。きつと豪い人になつて歸つて来ますよ。」次郎は口の中で別れを告げる。

「千代ちゃんはどこにゐるのだらう？」次郎は家の中を見まはしたが、どこにもお千代の姿が見えない。

「どこかへ出ていつたのかしら、しかし夜になつてから——」

彼はこのまゝ、お千代に逢はずに行くのは何となく淋しい気持ちにする。表へまはつたら見えるかも知れないと足をかへすとき、フト台所の戸が開いてゐるのに気がついた。

「オヤ裏口が開いてゐるな」次郎はそこからそつと首をつ、込んでうちらを見たが、やつぱりお千代の姿は見えなかつた。暗い心持を抱きながらも、しかたなくあきらめて、すく／＼と表へまはらうとして柿の木の下まで来たとき

「まあ次郎ちゃんぢやないの。さいふ聲がして、その木陰から、千代子が現はれて来た。

次郎はその聲を聞いて安心した、しかしすぐに「しまった」と思つた。がもう駄目であつた。

「今時分何しに歸つたの？」お千代は次郎の様子がかしいので第一に不安を感じた。手には草花を持つてゐる。佛壇へ

そなへるために摘みに出てるものらしい。花には露が光つてゐた。」

「いよく僕は東京へゆく決心をしたんだよ。」

「えつ？」その言葉を聞くに、お千代は思はず立ちすくんだ。手に持つてゐる花の露がハラ／＼とこぼれた。その花は千代子の手を離れて地上に落ちた。

「東京へ——」

「あ、主人を噴嘩したんだ。僕は店を飛出して来たんだよ。それで東京へ行くんだ。」

「店を飛出して？」

お千代は思はず家へ駆け入らうとした。次郎はあはて、その袂を捕へた。

「千代ちゃん。お母さんにいつてはいけない。」

「——」

「僕は黙つて行くつもりだよ。お母さんに打明けたら止めるにきまつてる。」

「そんなら次郎ちゃんは本當に東京へ行くつもり？」

「本當だよ。」

「まあ——」

お千代は両手を顔にあて、すゝり泣きを始めた。次郎は途方に暮れてヂツミ傍に立つてゐた。嘔り泣きの聲は悲しみの曲のやうに次郎の耳にひびく、それを聞いてゐるうちに次郎は、ひそりにでに臉のあつくなるのを感じた。エンマコホロギが伴奏を始める。次郎は東京へ行つてえらい人になつて主人を見返してやるさいつた。お千代は首を振つて聞かなかつ



た。柿の木の前にもたれて彼女は飽くまでも泣いた。

「行つてはいやです。豪い人になんかならなくても好いわ。」

しかし次郎は再びあの主人の許へ歸る氣にはなれない。

「千代ちゃん。すまないけれど僕はどうあつてもこの決心は曲げられないよ。僕はさうしても東京へゆくんだ。」

次郎は再び今日の出来事を説いた。頭を撲られたこと、算盤を投げつけられたこと、晩めしを喰べさせてくれなかつたこと、それを話してゐるうちに、次郎はその憤りがまた新しく燃えて來るのである。

「それではさうあつても次郎ちゃんは東京へいくつていふのねえ」お千代もあきらめたらしく涙をふいてさういつた。

「あ、固く決心したんだよ。」

「ぢやいつていらつしやい。」お千代は投げ出すやうに云つた。

「千代ちゃん怒つたのかい？」

「い、え。」お千代はまたしくしく泣き出した。

「留めたつて駄目ですもの、妾あきらめるわ。いつていらつしやい、そして豪い人になるやうにしっかりと勉強して下さい。」

妾何年でも何十年でも次郎ちゃんの歸つて來るまで待つてゐるわ。」

二人は手をミり合つて泣いた。

X

家の中では母親がなほも絲くり唄をうたひつゞけてゐる

からころく絲くり車

絲はお蠶絹の絲

絲のもつれは大粹小粹

繰ればミけそろほミけそろ

胸のもつれは綾絲こいこ

誰がほぎいてくれるやら

おぬし白絲わしや紅の絲

わかれくにくるくるこ

わかれくになろこてまよ

末ははた絲をさの虫

をさなまなざしくるくくこ

來る日來る日を待つわいな

無心に歌ひつゞけてゐるが、フトお千代の歸りがあまりおそいので氣が着く。

「さうしたのだらう？」

お絹は針の手を止めて起ち上り裏口の方へ行つて見る。外は晝のやうに明るく月が照つてゐる。柿の木をめぐつて露しげく草が光り動いてゐるが、どこにもお千代の影は見えない。

「どこまで行つたんだらうね。あの子は？」

母親は柿の木の下まで来る。

X

琵琶湖の水一ぱいに月の光りは漂うてゐる。四圍の山々は薄嵐色に霞んで眠つてゐる。小波が金色に碎ける、こゝろ岸邊——一艘の小舟が繋がれて波に揉まれてゐる。そこに次郎とお千代は立つてゐる。

「それぢや東京へ着いたらすぐに手紙を下さいね。手紙だけはやり取りさせうね。」お千代は固く次郎の手を握つた。

「あ、千代ちゃんも手紙出してね。」

「エ、きつみ出すわ。一週間に一度つゝ出すわ。」

「それぢやあ。」思ひ切つて次郎は舟に乗りかける。

「ちよつと待つて——」お千代は帯の間から紙入れを出して中から大型のメダルを出す。妙な型をしたメダルである。

「このメダルね、これは妻のお父さんの形身なのよ。肌身離さず持つてゐたの。これを妻だと思つて。」

お千代は涙ぐみながら、それを紙入れに入れ、紙入れのまゝ、次郎の手に渡す。

「有難う、千代ちゃん、僕大切に持つてゐるよ。」

二人は固く手を握り合つた。

「身體を大事にしてね。」

お千代は笑つた。その眼からハラ／＼大涙がこぼれる。

「ぢやあ、さようなら。」

「さようなら。」

黒 眼 鏡

人々はたゞ生きんがためのみに、お互同士にはいかに醜い闘争をつゞけ、そしてまた自分自身では、いかにあへぎ盡いてゐるこゝか。彼はすべてのゆゑを失ひ、回顧し反省し、そしてわが出生を歡喜し祝福することを忘れてゐる。たゞわが生命のために前方のみを凝視して、あらゆるものを生きんがための糧として、わが懷中に取入れこれを貯へんとする。そして人々は宿命づけられた産みの土をも離れ、故里を立出で、都會に向ふのである。

都會！、そこには溶け合はぬ二つの異なつた金屬が垣端の中でたぎるやうに、一つの運命と他の一つの運命とが、何百萬もなく永劫に、静止し謙讓を忘れて、倒れるまで疲れ果つるまで争闘するのである。彼等は人に負けまいとして根限り走る、足疲るれば俵を使ふ、自轉車、自動車、電車、汽車、彼等はたゞ人よりも一歩先に歩かんとして額に汗を流しながら、次第にその歩みのピッチをあげる。

あの軌道にきしる不快なる電車の響、猛獸の吠えるやうな自動車の警笛、はてはまた夢を破る工場の汽笛、またはかのデパートメント・ストアの入口において可憐なる少年が、いとも叮嚀に頭を下げて「いらつしやい」ミ叫ぶ聲、大道で演説する清教徒、エトセトラ、エトセトラ——。それらは悉く人々が生きんがためにあげる悲鳴である。生命と生命との相た、かふ雜音である。

その雜音の最も多い、そしてまた最も大きくひびく日本第一の都會——東京。

銀座通りには電車が珠數つなぎになつて走つてゐる。自動車は電車の間を抜け自動車の傍をすり抜け、ついで走る。人々は道を横切る爲に、着物の裾をまくつて草駈天の如く驅け出す。時々大きな團體をした乗合自動車がノロ／＼

と動いて行く。両側の店では美しいショウキンドウの飾りものが人々の眼を惹いてゐる。しかし誰一人として立止つてゆつくり見入るものはない。横眼で睨みながらも足だけはサツサといそいでゐるのである。雑沓しながらもゆき交ふ人々は不思議に衝突もせず、右左にさけ合つて自由自在に機械のやうに歩く。

東京驛前。——こゝはまた銀座以上に自動車が氣違ひのやうに駆けまはつてゐる。そして丸ビルや海上ビルディングが魔もの、やうにそれを見おろしてつゝ、立つてゐる。人間は人間に追はれる蟻の群れのやうに憐れである。

驛の改札口——今汽車が着いたところを見え、プラットの方からなだれを打つて人々が押し寄せて来た。そして狭い改札口には、まれてまた一しきりぎよめくのである。

そのぎよめきの中に小さな風呂敷包を持つた次郎が、ぎぎまぎしながらもまれてゐるのが見える。彼もまたこの生命の坩堝の中へ入つて来た。神の手によつて投げられたサイの目は彼を「振り出し」から「都會」へ進ませたのである。

やつと改札口を出て次郎はホツとして風呂敷包を下に置き、一息入れたがキョロ／＼あたりを見まはすも、今しがたあれほご押し合ひへし合ひして出て来た何百人といふ人々が、いつの間にか大方何處かへ行つてしまつて、ガランとした天井の高い驛の建物の中に、次郎のほかにほんの僅かな人しかゐるのに氣がついた。そして急に心細くなつて泣きたいやうな氣持ちになつた。

フト氣がつくその様子を、左の出口のミところからヂツと見つめてゐる男がある。脊の高い洋服の上に眞黒なインパネスを着てシルクハットを被り、黒眼鏡をかけた奇怪な風態をした脊の高い男である。

次郎はそれに氣がつく。氣味わるくなつて、いそいで荷物を抱へ中央の出口の方へ出やうとした。するにその黒眼鏡の男はツト手をあげて横に振り「そつちへ行つてはいけない」いふ合圖をした。次郎がその出口の方を見るに、澤山の

俣夫がならんで次郎の出て来るのを待ち構へてゐるのが眼についた。當惑してまた黒眼鏡の方を見るに、今度は「おいでおいで」をするのである。

次郎は何ものかに吸ひつけられるやうに、その男の方へ歩いて行つた。

×

ミある宿屋の一室。次郎と黒眼鏡の男が差向ひになつて話してゐる。次郎はチャンと坐つて兩手を膝の上ののせてかしくまつてゐる。

「そう改まらなかつても好いよ。今に私がきつと好い口を世話してあげるからね。それまではこゝがお前さんの家だからもつとゆつくりと落つてゐなけりあ駄目だ。なあに東京は廣いからね。人間の一人や二人ちきに片附いちまはあね。心配するこゝはないぜ。」

黒眼鏡は茶をグツと飲む。次郎は、ハイといつて頭を下げた。

「さうだい、自動車の運轉手にならないかね。」

「自動車の？」

「ウムい、儲けになるんだ。まあ一番金儲けの早口だね。月に二百圓位にはなるぜ。」

「月に二百圓？」

「もつとになるききもある。まあこれが一番だが、しかし……」その男は次郎を見る。次郎もその男を見る。

「最初一寸金が要るがね。」

次郎は一寸腹中をおさへる。

「いくらくらゐ、もつて来たんだい？」

次郎は躊躇するが、その男が案外ニコ／＼してゐるので安心する。

「四五十圓はあります。」さういつてまた懐中をおさへた。

その翌日。次郎、黒眼鏡の男は××自動車学校いふ看板のか、つてゐるところから出て来た。次郎は規則書を読んだ。

「入學金は三圓ありますが。」

「馬鹿だな。満員で入れないこいふ奴を無理に頼んだのぢやないか、なにをするにも東京つてえところは金がものをいふんだよ。」

次郎は黙つてしまふ。

「いま三十や五十の金を惜しんぢやつまらねえぜ、直にもごつちまふぢやねえか。」

二人は丸ビルの前へ来た。

「さうだいで上つて見ねえか。」

次郎は丸ビルの仰いで見る。

「高いもんですね。」

「エレベーターつていふ奴に乗れば直ぐに上つちまはあ、エレベーター位乗つて見なくつちや。」

二人は中へ入る。

「コーヒーでも飲まうか。」

二人はコーヒーを飲む。次郎は一口飲んで吐き出してしまふ。あはて、ケーキを食ふ。黒眼鏡の男は笑つた。

「金入れを忘れたからお前さん拂つておいておくれ。」

「もう澤山ないから餘り使へませんねえ。」

「いくら残つてるんだい？」

「もう十四五圓です。自動車學校で三十圓出しましたから。」

「三十圓、三十圓、仰山なこをいふな。けち臭エ野郎だな。」

金を拂つた次郎は錢入を懐中に入れる。

「サア上らう。」

二人はエレベーターに乗る。エレベーターが上り出した。次郎は頭がフラフラするので眼をつぶつて黒眼鏡の男にすがりついてしまふ、エレベーターボーイが笑つた。

「さうだ、東京は廣いだらう。」

二人は町を見下ろす。次郎はまだ頭がフラフラするので眼をつぶつてしまふ。

「さうも頭がフラフラして氣持がわるいやうです。」次郎はそこに坐つてしまつた。

次郎はしばらくして眼を開けた。黒眼鏡の男はいつの間にか姿をかくして仕舞つてゐる。

「をぢさん！」

次郎はうろ／＼する。エレベーターのミ／＼ころへ来る。

「さつきの人を知りませんか。」

「あの人はさつき下りてしまったよ。」

「えつ！」次郎は吃驚する、そしていそいで懐中を見る。

「アツ金入れが……」次郎は泣きそうになった。

「やられたんだな。さうも怪しいと思つたよ。」エレベーターボーイはさういつて、エレベーターの中へかくれて下りてしまふ。

「あの中には金が、そして千代ちゃんから貰つたメダルが……」

次郎は思はず涙ぐむ。その涙は頬を傳つて足許へボトリミ落ちた。

「東京さいふところはおそろしいところだ。」

百 圓 札

かうして次郎は東京へ入つた第一歩からつまづいた。西も東も知らぬ彼は途方に暮れてしまった。そしてそのまゝ、以前の宿屋へ歸つて来て番頭に始終を告げた。

「さうも怪しいと思つたんだがね知り合ひださいふもんだから。番頭はさういつて顔をしかめた。

「しかし仕方がない。折角やらうさしたんだから自動車学校へ通ひなさい。宿の方はまあ出来た時さいふこゝにしておかう。」

そこで次郎はさゝやかな下宿へ引移つて学校へ通ふこゝになった。

×

三箇月後。東京で年を送つて次郎はあるタクシー會社の運転手になつてゐた。彼は毎日丸ビルの前に車を置いて客を待た。今日は月給日である。次郎は始めて八十圓さいふ大金を自分で稼いだ。「一箇月の間の汗だ」彼は月給袋を固く握りしめた。故郷にゐる母のこゝ、お千代のこゝ、それが次郎の頭に浮ぶ。

「何か贈つてやらう」

その夜。汚い彼の下宿へ次郎は大きな紙包みを抱へて歸つた。下宿の神さんは吃驚して眼をみはつた。神さんは次郎が今夜位ニコニコしてゐる。こゝは始めてだと思つた。次郎は洋服も脱がずに紙包を解きにかゝつた。電車の人込みにもまれて紙包みは破れてゐる。その中からニュツミ、洋傘の柄が突き出て見えた。彼はバラソルを開いて見た。薄汚い彼の部屋も華やかなバラソルの色に輝いて見えた。

「氣に入るか知ら。」彼はニコニコしながら包みを解きにかゝつた。下駄、足袋、セル地、香水の瓶、化粧袋、そうしたものが續々現はれて部屋中一ぱいになった。

「あんまり千代ちゃんのものが多すぎるな。」次郎はうつこゝり故郷にゐるお千代のこゝを考へる。

×

國許ではけふも母親は、佛壇に御灯をあげて珠數をつまぐつてゐた。そばではお千代が縫ひものをしてゐる。お千代は絲切り齒で糸をアツツミ切つた。そしてその糸を口にくわへながらヂツミうつむいた。

「少し糸を捲いておきませう。」母親とお千代は向き合つて糸を捲き始めた。二人も次郎のこゝを考へてゐる。

「達者でゐてくれますやうに——。」母親の頬には涙が流れた。

X

「いらつー。運転手。次郎は吃驚して眼をあげた。連日のつかれ知らぬ間にうつくましていたらしい。

「はつ、さうも。彼はあはて、ドアを開けた。客はよろけながら中に入った。

「おちろまでー」

「新橋までやれ。」

まだくれたばかりであつた。今が一番人ごりの多い時である。次郎は懸命にハンドルを握つた。客はした、かに酔つてゐた。中でグウグウ斬をかいてゐる。歌舞伎座の前で次郎は車をこめた。それから先がわからなかつた。

「どちらへ？」

「もうよい、降りる。」

彼は帽子を脱いで頭を下げた。

「二圓二十銭いたゞきます。」

「これで釣りを寄こせ。」客は百圓札を次郎の眼前に突き出した。

「おつりがございませんで、こまかいもので——」

「一文もない。替へて来い。自動車は俺が番をしてやる。」

不安だと思つたが仕方がなかつたので、次郎は百圓札を持つてそこいらを尋ねまはつた。

「すみませんが百圓替りませんでせうか。」

きの店も忙しい時であつた。「ないよ」誰も相手にして呉れない。

カフェーライオンまで行つてしまつた。「いらつしやい。美しい女給が聲をかけた。彼は吃驚し表へ飛び出した。額には汗がにじみ出てゐた。彼は引返して橋を渡りかけた。彼はうっかり百圓札をひろげて手に持つてゐるのに気がついた、ハツミ思つた刹那、そのまき行き違ふ人の袂に挑ねられて札がこんだ。

百圓札は風にふかれて橋の上をヒラヒラミ舞ふた。次郎はあはて、札の後を追ふた。その手がミ、きそうになるに意地わるく、百圓札はまたヒラヒラミ飛んだ、次郎は橋の上を這ひまはつた。そして危く通行人にぶつつからうとしてハツミ身體を引いた瞬間、札は橋を離れて川に落ちてしまつた。

次郎はまつさをになつて立ちすくんだ。しかしさうするこども出来なかつた。百圓札は暗の川中へ沈んでしまつたのである。

「百圓——」その金はいつ再び世に出るこまか、それよりも——。次郎は泣き出しそうになつて客のミころへ歸つて来た。

「札が川の中へ飛んちまつたのです。」

「エッ？」客の酔は一べんに覺めてしまつた。

「川の中へ落した？。馬鹿野郎——」その聲はふるえてゐた。

「辨償しろ。百圓辨償しろ。いや自動車賃を引いた残りを辨償しろ、九十七圓八十錢だ。酔つても客は勘定を知つてゐる。

「しかしそんな大金は……」

「ないさいふのか。それでも貴様の過失ぢやないか。」

「しかしこまかいもので下すつたら、こんなこまかくなかつたのです。」次郎も一生懸命であつた。

「貴様ぢや解らん。會社へ行く。」

次郎は暗い心持ちでまたハンドルを握った。あの恐ろしい顔をした支配人のこみを思ふと、このまゝ、會社へ歸るのがたまらなかつた。「もつこ早く走れ。」中から客が怒鳴つた。

X

「九十七圓八十錢でございます。」

支配人は金を渡した。客はそれを受取るに、さつさみ出て行つてしまつた。次郎はうなだれてそこに立つてゐた。

「氣の毒だが會社は君をこのまゝ、雇つておく譯には行かん。けふ限り退社して呉れ給へ。」

案外にやさしく支配人はいつた。やさしいはれただけに次郎はよけいに悲しかつた。

「私の不注意からです、いたし方ございません。」

次郎は涙ぐみつゝ、會社を出た。故郷へ送つたバラソル。下駄。あの喜びは、あのさきの幸福は、それはほんの束の間であつた。次郎はまたしても母やお千代のこみを思つた。

あの時丸ビルの前にゐなかつたら。もつこ居眠つてゐたらあの酔漢は外のタクシーに乗つたらうに、近くさかの店が兩替してくれたら。もしもあの時風が吹かなかつたら、幸福はこんなに惨めに飛び去るこみはなかつたらうに。運命さいふものはサツミ吹く一陣の風の中にすらこもつてゐる。次郎はいろくこ考へながらさぼさぼさ下宿へ歸つた。

その翌朝。次郎はこある河岸へ來た。河岸には小さな棧橋がかつてゐる。次郎は何氣なしに立つた。彼はまだ昨日のこみをぼんやり考へてゐた。ポケットを探ると五十錢銀貨が出て來た。

「もつここれつ切りだ。」

彼はそれを掌の上にのせた。それを弄んでゐるうちに、するりこその銀貨は掌を抜けてポトリミ川の中に陥つてしまつ

た。

「しまつた。」彼は目覺めたやうに吃驚して川の中をのぞき込んだ。

「馬鹿だな、あいつは。」棧橋の涯で四五人の仲仕が次郎の方を見て笑つてゐた。次郎はむしやくしやくしてゐた。

「何が馬鹿だ。次郎はつかくこその方へ歩いて行つた。」

「さうむきになるなよ小僧ッ子。」仲仕は次郎の顔に手をかけて笑つた。次郎はその手を振り放した。

「馬鹿にするなッ。」さう叫んでその仲仕に組付いた。

次郎は充奮してゐるので強かつた。外の仲仕も加勢してきた。一人の仲仕は川へ陥り込んだ。

「この野郎ッ。」

争闘はしばらく續いたが、結局次郎は組み伏せられてしまつた。

「田舎者さ見えて馬鹿に力のある奴だ。」

仲仕の一人は汗を拭きながらさう叫んだ。川に陥つた一人も上つてきた。

「放り込んでしまへ。」

次郎はもがく力もなかつた。

「おい待て待て。」そこへ一人の船員が通りかゝつて、いま手取り足取り川へ投げ込まうこしてゐる連中に聲をかけた。

「小野田ぢやねえか。」

「まあ手荒なこみはするなよ。」

仲仕は次郎を投げ出した。

「つぶさしい野郎だ。俺らに喧嘩を賣りやがつたんだ。」  
「まあ好いやね、まだ子供ぢやねエか。」

小野田と呼ばれた船員はさういつて制した。顔がうれてゐるを見て、仲仕達もそれ以上さうしやうこはいはなかつた。  
「おい大將。さうしたい？」

次郎はやうやく起き上つた。そして小野田の顔を見た。

「黒眼鏡？一次郎は クツミした。小野田は黒眼鏡をかけてゐる。驛前であつた黒眼鏡、そして金を盗んだ男！、次郎は  
一目見てさうぢやないかと思つた。しかしそれは別人であつた。」

「馬鹿に威勢が好いちやねエか。さうだい、船に乗らねエかい。今ボーイを一人探してゐるさうだ。」

次郎はこの男が氣味悪く思はれた。しかし明日からはもう食べる目あてがなかつた。彼れは小野田に連れられて棧橋を

×

いま横濱を出帆せんミする千噸近い内地航路の商船である。煙突からは眞黒な煙が團々ミして町の方へ流れた。次郎は  
その船に乗り込んでゐた。白い上衣、黒のズボン。彼はボーイの服装がよく似合つた。船は動き出した。

「さらば横濱よ。そして東京よ。流石に彼は感懐無量だつた。頬には涙さへ傳はつた。」

「何をボンヤリしてゐるんだい。」小野田が次郎の肩をついた。

「船室の灰皿を集めて來い。そしてお客さんの靴をみがくんだ。」

×

船はいま金華山沖を航行する。船に馴れない次郎はひきく酔つてボーイ室に寝ころんだまゝ、苦しみをほしてゐた。

「いまからそんなこゝでさうするんだ。起きろ起きろ」小野田がやつて來て引つり起した。

「客の靴がすんだら俺の靴もみがけ、怠けるから船に酔ふんだ」

次郎はしかたなく小野田がつき出した片足を膝の上のせて、その靴をみがき出した。

「みがけ。」小野田はまた一方の足を出した。

「俺のもみがけ。」二番ボーイがまた足を出した。

次郎は泣き出しそうになりながらまたブラシを取り上げた。そのうちに胸の悪いのが治つてしまつたのに氣がついた。

×

船は函館から引返して長崎に向つた。やがて次郎も一人前のボーイになつた。彼はもう船に酔はなかつた。煙草をふか  
すこゝも覺えた。

「よい景色ですね。」

「はれ〜あそこに見えるのが那智の瀧だ。」

「まあ。那智の瀧が見えるの。」

新婚の若夫婦が、サルーンデッキで望遠鏡をやり取りしながら岸を眺めてゐる。船はいま紀州沖だ。次郎はその夫婦を  
羨ましそうに眺めた。

「俺達はいつになつたらあゝして旅行が出来るのだらう。」

彼はお千代をいしよに歩いたこゝを思ひ出した。それはいまのその夫婦のやうに、次郎はしやれた洋服を、お千代は絹



の着物に薄いヴェールを、そして楽しそうに打連れて旅行する幻想ミかはるのである。

「俺は早くえらくならなければならぬ。」彼はあはて、ボーイ室に歸つた。彼の机の上に英語字典やリーダーが乗つてゐる。彼は一心になつて英語を勉強する。

「それは一人の人ミ一匹の犬である。その犬は走る。走れ犬よ。走れ。しかし猿はさようにはよく走れない。」机の上の方にはワシントンの畫像がかけてある。彼は眼をあげてチツミそれを見つめた。

雪 江

次郎の乗つた船はやがて南國の港、長崎へ入港して錨を卸した。次郎は久しぶりに土の香に親しみたいと思つた。

「小野田さん、出帆時間まで町を歩いて來ても好いでせうか。」

小野田は洋服を着かへてゐるミころだつた。

「長崎見物かい？。俺が案内してやらう。」

そこで二人は上陸した。次郎は力強く土を踏みつけて歩いた。けふぐらるしみじみ土がなつかしめたミこはなかつた。

「やつぱり陸は好いですな。」

小野田はニヤニヤ笑つた。

「もつこ好いミころへ連れていつてやるよ。」

町の家並には灯がミもつてゐた。少し歩くミ屋台店のズラリミならんでゐる通りへ出た。澤山の人がゾロゾロミ通つた支那人も西洋人も通つた。脊の六尺もある一人の西洋人は、大きなマドロスパイプをくわへてゐた。そして脊の低い狐の

やうな顔をした日本の女を小脇にかゝへるやうにしてつれて歩いた。アセチリンガスの光りも何ミなく異國の趣きを濃はせた。

「こゝへ入るんだ。ミある支那料理屋の表で小野田は立ち止まつた。

「中華民國上海御料理泰昌樓」ミ眞赤な看板に黒い字で書いたのが屋根に上つてゐた。軒にはラツキョのやうな形をした大きな紅提燈が吊られ、立看板には「上海名物チャンボン料理」ミ書いてある。

「いらつしやあい」よく肥つた支那人がベコベコミ頭を下げて二人を迎へた。

「おや小野田さんぢやないの。」

テーブルで客の相手をしてゐた十八九の美しい支那服の女が聲をかけた。次郎は思はず「オヤ」ミ思つた。ピカピカ光る支那服を着て耳の上に眞黒な髪をたばねて、そして耳に眞珠の耳飾りをつけたこの女は、お千代にそっくりである。次郎は獨りでに頬の染まるのを覺えた。

「久しぶりだな。」

小野田は隅のテーブルに座つた。顎でしやくつて次郎にもかけさせた。女はすぐに傍へやつて來た。

「見限るにも程があるわよ。」

女は小野田の頬を指ではぢいた。小野田はニヤ／＼笑ひながら

「おい、久しぶりで一杯飲ませろ。いつもの奴で。」

ミいつて女の手を撫でた。女はふりむいて何だか雅高い聲で叫んだ。太つた支那人も譯の解らぬミこを答へた。

「この方は？」

「俺の兄弟だ。なあおい。可愛がつてやつてくれ。」  
「さうぞよろしく。」女はチョツミしなを作つて次郎に挨拶した。次郎は赫くなつた。  
間もなく小野田はした、かに酔つてテールの上に面を伏せてしまつた。次郎もだん／＼心持がよくなつて来るのを覺えた。支那人だと思つてゐた女が日本の女に解つてから、ますますその女がお千代によく似て来るやうに思はれて、何もなく惹きつけられた。

X

「雪江。」と眠つてゐた小野田が呼んだ。「もう何時だ。」

次郎はハツミ思つた。もう出帆の時間だつた。

「小野田さん。早くしない乗れおくれるよ。」次郎は急にあわて出した。

「俺はこゝで泊るんだよ。」

「だつて——。」

その時港の方でボーツミ汽笛の鳴るのが聞えた。小野田はまた艇をかき始めた。次郎はやきもきして小野田を起したが、起きなかつた。

「あなたも泊つていらつしやい。」

「しかし——。」

次郎は思ひ切つて一人でそこを飛び出した。そして息を切つて海岸へ走つて來た。しかし棧橋にはもう船の姿はなかつた。次郎はガツカリした。がまた外には何だか樂しみが残つてゐるやうな氣もした。

「ミにかく引返さう。」彼はさう思つてまた支那料理屋へ歸つて來た。

「俺が好いやうにしてやるよ。あんなケチな船なんかさうでも好いや。」小野田はまた飲み始めてゐた。

「しばらく長崎にゐらつしやいよ。可愛がつて上るわ。」雪江も酔つてゐた。

その夜から次郎と小野田は、その支那料理屋の二階に居候をするこゝになつた。船が出ていつた後では、さうするより仕方がなかつた。

「しかしこんなミころでうろつてゐては駄目だ。」次郎はまだ國を出た時の意氣込を失はなかつた。

「そんならいつそアメリカへ渡らうぢやないか。」小野田はさういつて次郎の胸を跳らせた。

そしてそれからいろいろの口實を設けて、小野田は次郎から金を掻きあげたが、いつまでたつてもアメリカへ渡る手筈はミ、のはなかつた。また、く間に一箇月ばかりの月日はながれた。

「さう忙くなよ、機會が来るまで待たなけりや。」次郎が攻める度に小野田はさういつて逃げた。

「それではもう一錢も出さないから。」

次郎は財布の口を固くしめて、それからは小野田が何ミいつても金を渡さなくなつた。小野田は舌打ちしていつも苦々しい顔をしてゐた。

そのうちに雪江の次郎に對する好意が急に露骨になり始めた。一目見た時からお千代に似た雪江の面影は、次郎には忘れられなかつた。あせつてゐながらも小野田のいひ放題になつて長崎にゐるのも、實は傍に雪江がゐるからに違ひなかつた。その雪江が思ひもかけず次郎に好意を寄せるミいふこゝは、次郎にミつて天來の福音であつた。次郎は何ミなく心かんのんびりするのを覺えた。

ある日雪江ミその母親ミ、次郎ミ小野田ミは乗合自動車で、長崎から二里ばかり離れた茂木へ行つた。

石垣ばかりの長崎の海岸ミちがつて、そこは白い砂がつづいてゐる美しい濱邊であつた。小野田ミ母親ミが持つて來た酒を飲んでゐるひまに、次郎ミ雪江ミは魚を釣つた。波打ち涯に二人は並んで腰を卸した。

「次郎ちゃん。雪江が小聲で呼んだ。そしてギユツミ次郎の手を握つた。」

「今度は二人だけでどこかへ行かない？」次郎の心は跳つた。

それから五六度も二人は活動寫眞を見にいたり、オランダ屋敷のあたりまで散歩したりした。小野田は見ても見ぬふりをしてゐた。次郎はしみじみ幸福だと思つた。

「もうアメリカなごはやめだ。そんなごみをいふやうになつた。」

「それもさうだな。」小野田は直ぐに賛成して、二人は長崎で職業を探し歩いた。

その間も次郎ミ雪江ミは度々つしよに遊びに行つた。

「妾、小遣ひがなくなつたの。そんなごみをいつて雪江は次郎から金を絞つた。次郎はそんなごまでいつてくれる心安さを寧ろ喜んで、快よく金を出した。」

しかし僅か一箇月餘りのボーイ生活で貯めた金が、さういつ迄もつゞく筈がなかつた。やがて次郎は無一文になつた。するミ雪江の態度は急に冷たくなつた。金のいらぬ散歩に誘つても行かうミはいはなかつた。

「騙されたのかしら？」次郎はフト考へたが、身ぶるひして首を振つた。

「そんなごみはない。」

「金さへあれば——」次郎は一生懸命に仕事を探し歩いた。そしてやつミ浚漕船の火夫の口を見つけた。小野田もしよ

に雇はれた。二人は朝早くから泥ミ石炭にまみれながら働いた。夕方になるミ二人は泰昌樓へ歸つた。僅かな金でも持つて歸るミ雪江の機嫌が好かつた。雪江の機嫌の好い時は小野田の機嫌も好かつた。次郎も吊り込まれて上機嫌になつた。そして三人は一しよに酒を飲んだりした。

こんな生活がしばらく続いた。

次郎の國を出る時の固い決心は次第に怠り始めた。

「あせつても仕方がない。そんな逃げ口上を彼は考へた。」

そして次郎は相變らず泥ミ石炭の中で働いては泰昌樓の雪江の許へ歸つた。

しかしこんな生活はさう長くつゞかなかつた。やがて次郎はまたもやサイの目によつて「幸福」から動かされた。

そのころ泰昌樓へしげく出入する金千壽ミいふ朝鮮人があつた。金は盛んに札ビラを切つた。捕鯨船から下りたてミかで、何百圓かの金を懐中に持つてゐた。

「こんなものよろしいか。なご、いつて來るたびに、指環や帶止めや時には西洋菓子なごを持つて來ては、雪江の甘心を買つた。雪江ミ金ミの仲は目立つて接近していつた。それミ同時に小野田の金廻りは次第に順調になり始めた。」

次郎はそのころになつて始めて、雪江ミ小野田ミそして金ミの關係がハッキリミわかつた。それがわかつて來るミ同時に、次郎に寄せた雪江の好意の裏が見え透くやうに思はれた。

「騙されたのかしら？」今度は前よりも深刻にそれが案じられた。しかし次郎はまだ「そんなごみはない。こいふ氣が退かなかつた。」

毎夜次郎が浚漕船から歸つて來るミ雪江は機嫌よく迎へた。朝になるミチャンミ辨當をこしらへては送り出してくれた。

「本當の親切からでなければ、こんなこゝが續く譯はない。」  
 次郎はその考へが自惚れであることは思はなかつた。しかし何もなく自分の幸福に、ひびが入るのを感じないわけにはゆかなかつた。

結局、それがハッキリする時が来た。ある夜次郎は頭痛がしたので早くから寝てゐた。その時隣の部屋で雪江と小野田の話し聲が聞えた。

「たつたこれッ切りか。」

「だつて、さう度々は出さないんだもの。」

「朝鮮人が出さなければ、次郎から取つたら好いちやないか。」

「次郎ちゃんから取るのは、もうかあいさうだよ。」

次郎は思はず耳をそばだてた。

「だつて好い加減前に絞つたぢやないの。」

「チエツ、嫌に近頃は次郎を親切にするぜ、あんな山出しを。」

「さう悪くいふもんぢやないよ、お前さんの甘い酒も、以前はその山出しの財布から出てたんぢやないか。」

次郎はかつこなつた「やつぱり騙されてゐたのか！」その時始めて長い間の疑ひが解けた。その夜一夜、次郎はまんじりこもせず悶え通した。そしてその翌朝、黙つてすみ馴れた泰昌樓を飛出してしまつた。

それから後幾晩か彼は公園のベンチに寝た。巡査が来て彼を追拂つた。巡査の姿が消えるに彼はまた来てベンチに寝た。朝になるにベンチに眼を覺まして仕事を探して歩いた。浚漉船へいつて小野田の顔を見る氣になれなかつた。

しかし仕事はなかく見當らなかつた。勿論第一に自動車の運転手を志願したが、缺員がないといふので結局ハンドルは握れなかつた。俵を引張つたが、坂道の多い長崎の町を走ることは、次郎にはできなかつた。ドックに雇はれたけれども、馴れないハンマーはいつまでも次郎の手には握られてゐなかつた。幾日も幾日も彼は食はなかつた。

「いつそ死んでしまはう。」

次郎は結局死を思つた。そしてある日の夕方海岸へやつて来た。太陽は静かに海の底に沈んで行つた。沖の方から夕靄が押し寄せて来た。次第に濃くなつて行く夕暗の中で、岩壁に腰かけて次郎はつくねんミものを考へてゐた。

「何のために國を出たのだ。」何のために長崎あたりをうろつてゐるのだ。彼は頭をか、へて物思ひに沈んだ。

「長い間騙されてゐたのだ。」

しかしそれでも、泰昌樓で暮した愉快的生活を思ふに、次郎はまだ雪江のこゝが忘れられなかつた。まだ心のきこかに「そんなこゝはない。」といふ氣が残つてゐた。

「女一人のために俺の世界はこんなに眞暗になるのか。」

次郎はさめくみ泣いてゐた。そのとき再び見まいと誓つた雪江がひよつくり次郎の後に現はれた。

X

「死ぬなんて、あなたは馬鹿ね。」雪江はそれほき悶え苦しんでゐる次郎の煩悶を、一笑に蹴まばしてしまつた。

「歸りませう。ずるぶん探して歩かせたぢやないの。」

その雪江の言葉を聞くに、不思議にもすぐに心のかかるのを感じた。次郎は黙つて歩き出した。歩いてゐるうちにいつか二人は公園に來た。

まん丸い月が上つて、あたりは眞晝のやうに明るかつた。諏訪神社の公園の樹々は爽かな風になぶられて葉摺れの音を立て、ゐた。眞白な大浦の天主堂の塔が、眞向ふに月にてらし出されて美しく眺められた。屋根ミ屋根ミの間には、白く海面のキラつくのをのぞむこゝが出来た。二人はいひ交したやうにンベチに腰を卸した。月の光りは樹の葉越しに、二人がならんで足を投げ出しているこゝろでゆれ動いた。次郎は怒つたやうな顔をして黙つてゐた。

「あなたは馬鹿ね。雪江はまたさういつて笑つた。」

「何故？それは雪江さんに覚えがあるでせう。」

「小野田ミの話聞いたんでせう。」

次郎はうなづいた。

「あなたは妾の心を知らないんだねエ。雪江はちつこつむいた。」

「妾が小野田にいつたこゝろ——しかしあんなこゝろを聞いてや、妾のほんごうの心持ちは判らないのは無理もないわねエ。」

「本當の心持ち？」次郎の眼は光つた。

「雪江さん。あなたの本當の心持ちつて——。」

雪江は次郎に寄り添つて、ヂツミその顔を見上げた。次郎は胸をワク／＼させながら雪江の顔を見卸した。眞白に塗つた白粉、わざ／＼細くした眉、紅バラのやうな口紅のついた唇、耳にはキラ／＼ミルビーマがひの耳飾りが揺れ動いて光る。

濃艶な雪江の顔、それを一層生かすために興へられた美しい眼、それらのものは、今次郎のまッ前にあつた。次郎は思はず雪江の手を握つた。

「雪江さん。本當のこゝろをいつて下さい。あなたが小野田にいつたこゝろ。あれは、あれはみんな嘘でせう。私はあなたを愛してゐる。心からあなたを愛してゐる。だからあなたも本當のこゝろをいつて下さい。あなたもきつ／＼僕を愛してゐてくれるんでせう。ねエ、ねエ、ねエ、それが本當の心持ちでせう。」

「次郎ちゃん。」雪江の手にも力が入つた。

「次郎ちゃん本當に妾を愛してくれるわねエ。」

雪江の眼には涙が宿つた。次郎は思はず雪江を抱き寄せた。二人は固く抱きあつた。

「雪江さん。」

燃ゆるやうな瞳ミ瞳ミは、互に喰ひ入るやうにお互の眞實を語り合つた。次郎はきつ／＼雪江を抱き上げて、毒持つ花のやうに紅い唇に、わな／＼ミ打ち振ふ自分の唇を持つて行つた。雪江はヂツミ眼を閉ちてそれを受けた。

息もつまるやうな抱擁ミ接吻——。長い間二人の耳にも眼にも何にも入らなかつた。二人は抱き合つたま、感激のなかに浸つてゐた。

「妾うれしい。」少時して雪江がいつた。

「僕は幸福だ。僕はもうお前さんを誰にも渡さない。」次郎の幸福は一べんに蘇つた。

「妾、もう誰のこゝろへも行かない。もうスツカリ次郎さんのものよ。」

さういつて雪江はニッコリ笑つた。その時の雪江はあの支那料理屋の卓子で、来る客毎に甘い言葉を切り賣りしてゐるチャンボン娘ミは、まるで別人のやうにうぶであつた。いつも小野田ミいひ争つては、煙草の煙を輪に吹いて、せ、ら笑ひを投げ出すあはずれ女ミは、餘りにかけ離れた女であつた。

「妾ねエ、はじめ小野田のために騙されたのよ。そして小野田から、あなたが小金を貯めてゐるから色仕掛けで巻き上げてしまへつて、脅かされたのよ。」

長い抱擁に接吻に亢奮しながら雪江はボツ／＼と語り出した。はじめのうちは良心が麻痺してゐたのか、それが何でもなかつたこと、餘り安々に次郎が金を出すのでをかしくて堪らなかつたこと、そのうちに餘り次郎が初手で、真底から自分に親切にして呉れるので、偽つてゐる自分を顧みてすまないこと考へ始めたこと、反對に小野田の賤しい心が急に嫌になり出したこと、そしてこの頃では次郎に語るのが楽しみになつて来たこと――。

――雪江はいろ／＼と話した。それはまるで戀人同士が、お互ひに始めて逢つてからその日になるまでの楽しい思出話をしてゐるやうであつた。それを話しながら雪江自身もその話を楽しんでゐるかのやうであつた。次郎は獨りでに耳の熱して來るのを覺えた。

「ねエ次郎ちゃん。今日まで妾のしたこと、今ざんげしたまほり、だからもう許してねエ。」

「よくいつて呉れたね。」次郎は心から雪江が可愛いやうに感じた。

「僕は雪江さんの心持ちを知つてゐたんだ。けれどもあの時の話を聞いたときには、世界が一べんに眞暗になつたやうだつた。」

「本當にすまなかつたわねエ。」

二人は顔を見合せてニッコリ笑つた。そして再び感情の亢奮するまゝに唇を寄せやうとした。そのとき急に雪江は「アツ」ミ叫んで思はず次郎の胸にすがりついた。

ここから來たのか、二人の後からヌツミ小野田が妾を現はした。甘い夢の世界は一べんに消え去つた。小野田は物凄

笑ひを浮かべながら、次郎の頸に手をかけて、グツと顔を持ち上げた。次郎は黒眼鏡の底に恐ろしい眼つきを見た。

「おい。色男、あまり増長するなよ。小野田様の恩を忘れるな。」

次郎は當然争闘を覺悟した。彼は握り拳を固めて小野田の方へ詰め寄せた。

「馬鹿野郎。手前達ミ喧嘩をするやうな大人氣ないんちやねえぞ、へん、高が女一匹だ。欲しけりやいつでも呉れてやる。」さういつて小野田は次郎の方には案外に手を下さなかつた。しかしその眼は憎み嫉妬に燃えてゐた。太い青筋が額にビク／＼と動いてゐるのさへ見えた。次郎の方はかまはずに小野田は今度は雪江の方を向いた。雪江はもう怖れてはゐなかつた。平氣を裝うてそこに立つた。

「手前この男に惚れたんだな。」

小野田は雪江の腕をつかんでギユツミ力瘤を入れたらしかつた。雪江はちよつと顔をしかめた。

「惚れたらさうかするのかい。」

雪江は恐ろしい眼をして小野田を睨んだ。汗ばんだ額に髪の毛がバラ／＼とこぼれてゐた。蒼白になつた頬には紅がのぼつてた。固く結んだ唇は眞赤であつた。胸の動悸が高く打つた。乳のあたりがビク／＼大きく動くのが感じられた。

「かうしてやるのだ。」

小野田はいきなり雪江の首ツ玉をつかまへた。そしてきつ／＼そのまゝ、その顔を、眞／＼も自分の顔の方へ持つて來た。

彼の眼に彼女の眼は一寸の間に睨み合った。

「待てッ！」

次郎は思はずさう叫んで、手を伸ばしてそれを止めようとした時、小野田は狂ふたやうに雪江の唇につゞけさまに噛み

ついた。そして一番しまひにはその唇を噛んだま、ちつと眼をつむつて雪江の身體を抱きすくめた。  
「お、！」

次郎は思はず、吾れミわが胸を抱いてそこに立ちすくんだ。雪江は観念したもの、やうに身動きもしなかつた。

「おい次郎、手前の惚れてゐる女を俺はこの通り手ごめにしてゐるんだ、口惜しかつたら何んミかしねエな。」

小野田は憎々しげに次郎を見た。しかし次郎は何にもいはずそこに立つたま、であつた。

「意氣地なし奴、そんなこゝでこの女が手前のものに出來ると思ふか。おい室伏。欲しけりやいつでも呉れてやる、腕つか、金づくか、二つに一つ、さちらでも來い。それまではやつぱしこの女は俺のもんだよ。へへ……。」

小野田は唇を曲げて嘲笑つた。それでも次郎は黙つてゐた。不思議に今の先亢奮してゐた血潮が、かへつて冷えて行くのを覺えた。

「奴さん。しよげてしまつたぢやねエか。へん、そんなこつて女が出來ると思ふか。面でも洗つて出直すが好い。」

さういつて小野田はまた雪江を抱きしめた。

「オイ可愛いお嬢さん。浮氣は好い加減におしよ。」

そして頬を指ではぢいた。その時いきなり雪江は、平手で小野田の頬つべたをピシヤリミ手ひきく撲つた。次郎は吃驚して眼を見張つた。小野田も面喰つたらしかつた。

「おやッ。しやれた眞似を。」

小野田は両手を擴げてまた雪江の身體を抱きすくめた。またピシヤリミ雪江が撲つた。

「さつちがしやれた眞似を！みんなちき！馬鹿！」雪江の眼は怒りに燃えた。

「なにがみんなちき——」

「さうぢやないか。人が仕事にかゝつてゐるこゝろを、お前さんが出しやばつたばつかしに、折角の芝居も滅茶々々にしてしまつたんぢやないか。」

「芝居？」

小野田も次郎も同時に叫んだ。次郎は化石のやうにそこへ立ちすくんでしまつた。

「お人好しだね。お前さんは。」

雪江はホ、ミ嘲笑つた。そして次郎の顔を睨みつけた。その眼は今の先、戀に陶醉してゐたあの夢見るやうな眼ではなかつた。

「意氣地なし——」。その眼はさう叫んでゐた。憎惡に燃えてゐた。

次郎は頭を鐵棒でグワンミ撲られたやうに感じた。高い斷崖から突き落されたやうな氣がした。彼はヒヨロ／＼ミミこへ打ち倒れてしまつた。雪江は黙つてそこを立ち去つた。小野田もその後からつゞいて姿を消した。

「嘘だ。嘘だ。絶望だ。やつぱり騙されてゐたのだ。」彼は狂人のやうに悶え盡いた。

## 母の死

その頃故郷では母のお絹が病氣で癡てゐた。お千代は甲斐々々しく看病してゐたが、お絹には何よりも我子のゐないこゝろが淋しかつた。東京で失敗したから、もつと他所へいつて成功する。さういふ意味の端書が二年も前に舞ひ込んだ。それが次郎から來た最後の消息であつた。

母親の枕元には薬瓶なごみしよに、いつか次郎が贈った下駄が新しいま、に置いてある。佛壇のわきにはお千代に贈ったバラソルもある。お絹もお千代も二人もいつでも次郎のこみを考へてゐた。

×

——ひよつくり次郎が歸つて来た。見れば見るほき彼は瘦せおもしろへて若い顔をしてゐる。そして着てゐる洋服はボロボロである。彼は寝入つてゐる母親の枕元へ、すわつてしきりに揺り起す。しかしお絹は眼を醒まさない。次郎は思ひ切つたらしく立上つてすこゝと歸つて行つた。

「お、次郎！」お絹の夢はそこで醒めた。

「お母さん。また次郎ちゃんの夢を見たの？」

お千代は亢奮してゐるお絹に夜具をかぶせながら、そつと涙をぬぐつた。

「もう歸らないのかしら。」お絹は心細さうにいつた。

「お母さん、そんな筈はありません。きつと歸つて来ますよ。」

「わたしは何んだか、もう逢へないやうな気がしてならない。」お絹はさういつてはげしくせき入つた。

四五日の後お絹は危篤に陥つた。もう時間の問題であつた。村の醫者も歸つてしまつた。

「次郎。次郎！」それでもお絹は次郎の名を呼びつづけた。その聲はだん／＼かすかになつていつた。

お千代は何度も門口まで出て見たけれど、外は晝のやうに明るく月夜、その夜も更けてもう人つ子一人通らなかつた。

×

長崎ではその時。あの夜の公園のベンチに腰をおろして、次郎が物思ひに沈んでゐた。

「イヤ雪江はそんな女ではない。あの女の眼には眞實がこもつてゐた。確かに雪江は自分を愛してゐたに違ひない。それに俺は餘りに卑怯であつた。小野田のために手ごめにされるのを黙つて見てゐた。あの時の俺の態度、それが雪江を怒らせたのだ。失望させたのだ。さうだ、俺はあまりに卑怯であつた。」

月はこゝにも皎々輝りわたつてゐた。公園の樹々はその夜の時と同じやうに美しい影を投げた。次郎もまたその月影にてらされてゐた。しかしその影法師は化物のやうに醜かつた。

「俺はもう一度雪江に逢つて、よく頼んで見やう。雪江はキツミ俺を許して呉れるに違ひない。」

次郎はひたすらに雪江のこみばかり考へてゐた。いま故里では生みの母親が死の床に横はつてゐるこみも、勿論知る由もなかつた。

×

お絹は、次郎の名を呼び続けながら死んでいつた。その死顔は淋しかつた。蒼ざめた蠟の様な頬には涙の跡が残つた。「ミラ、ミラ、間にあはなかつたか。」

広い世界にたゞ一人残り残されたお千代は、お絹の冷い身體にすがりついて泣き伏した。淋しい夜更け、もの・哀れを取り集めたやうな沈黙の中に、お千代の泣きじやくる聲ばかりが、細く長くいつまでも續いた。

淋しく死んでいつたお絹の葬式がすんだ。村の墓場には新しい卒塔婆が一本殖えた。そこは小高い丘の上である、高い一本松が目じるしのやうに風の中に控えてゐた。

お千代は今日も草花を持って墓へ来た。花を手向け水を替へて彼女は長い間ふし拜んだ。

「お母さん次郎ちゃんに逢へないで、さぞ淋しかつたでせうね。」



彼女の涙は毎日新しかった。立上つてお千代は目をあげた。廣々とした湖の末は雲か山か霞んでそれを見えなかつた。

あの向ふに行けば次郎ちゃんがある——彼女は目を伏せた。「筋白い街道すぢ、そして向ふに見える松並木、そこは次郎と二人で甘い少年の日を送つたところである——彼女はしみじみ次郎が戀しかつた。

「いつそ次郎ちゃんを探しに行かう——」

お千代はさう思つた。ミ急に胸が開けるやうに感じて來た。さうでもさうしなければならぬやうな氣がし始めた。

×

「女の身でそれは危ないミ止めるミころだけれぎ、天にも地にも頼りに思ふは只一人、昔からもあるミことだ。いつて來なされ、そしてあんた達が首尾よく歸つて來なさるまで、わしはこの家の番をしてあげませう。」

葬式の時も何くれミ世話して呉れた近所の老人が、お千代の決心を聞いてさういつてくれた。お千代は後に氣にかゝるものは何もなかつた。

「どうぞお墓を頼みます。」

「え、ミも、え、ミも、決して荒れるやうなミことはしやせん。」

老人は涙を浮べてお千代の首途を見送つた。

「お母さん。妾はきつミ次郎さんを連れて歸つて來ます。それまでは、淋しくミも一人で待つてゐて下さいねエ。」

お千代は小さい風呂敷包み一つの旅姿で墓詣りをした。これではしの別れかと思ふミ、雲をつかむやうな旅へ出るだつに、今更のやうに悲しかつた。

×

汽車は東海道をひた走つた。外にはしじくミ絲のやうに細い五月雨が降りしきつてゐた。汽車のガラス窓に頬を寄せ、お千代は心細い旅路の末を想つた。この廣い世界に、誰も自分等にかまつてくれるものがない、さう思ふミ獨りでに涙がこぼれた。

汽車が東京へ着いた。次郎の辿つてきたミ同じ道を、彼女も辿つてきたのだ。プラットから人に押されながらお千代はフラフラミ夢のやうに改札口を出た。長い間汽車に揺られて、頭は鉛のやうに重かつた。

「ようもこんな遠いミころへ來たものだ。」

お千代はホツミ一息ついてから、俣を雇つて次郎のゐた下宿へ急がせた。

勿論次郎の姿は下宿に見えなかつた。

「なんでも自動車會社に勤めなさるやうでしたよ。」

下宿のお神さんはたゞそれだけしか知らなかつた。それはお千代も知つてゐるミことだつた。それでその翌日からお千代は自動車會社を軒別に尋ねるミことにした。自動車會社なき、いふものは、ホンの二つか三つしかあるまい、ミ國を出るミきお千代は考へてゐた。

ある日彼女は歩み疲れて、日比谷公園のベンチに腰を卸してゐた。もう東京へ來てから一週間、毎日々々徒勞な訪問をつゞけてゐたのであつた。二つや三つミ思つた會社は何十こいふほきあつた。彼女は一日々々心細さを深めた。

「もうあきらめて歸らうかしら。」彼女は涙ぐみつ、そんな事を考へてゐた。

その時向ふのベンチに腰を卸してヂツミお千代の様子を見つめてゐる、黒の洋服の上にインパネスを着てシルクハットを被つた西洋人のやうに脊の高い、奇怪な風態の男があつた。その男は黒眼鏡の底から氣味のわるい眼を光らしてお千代

を見てゐた。お千代はつゞみ頭を上げた時その男の様子に気がついたが、何もなく氣味悪く感じたのもう立上らう身仕度をした。男はチョッキのポケットから葉巻を出して、火をつけやうこしてゐた。その時、お千代はフミ男のチョッキに光る妙な格好をしたメダルに氣が附いた。

「お、あのメダル！」

お千代はツカ／＼とその黒眼鏡の男の傍へ歩み寄つた。その男は却つて面喰つたらしく思はずヒヨツミ起上つた。

「あなた、このメダルを持つてゐた人を御存じですか。」

「メダル？」

男はメダルを見た。帯にまきつけた鎖についてゐる妙な格好をしたメダル、それは次郎の財布から盗みこつたものである。

お千代はヂツミメダルを見た。懐かしいメダル、亡父の形見、そして戀人への贈りもの、彼女にこつては何ものにも替へ難い、忘れ難いメダル、それが今いまはしい泥棒の手にあるとは考へ及ぶどころでなかつた。

「ねエ、さうぞこの人のところへ連れて行つて下さいませんか。」

お千代は一生懸命に哀願した。その男は突嗟の間にすべてを知つた。

「それぢやあなたは、次郎さんのお知り合ひなんですか。」

「エ、さうです、さうです。わざ／＼國から尋ねて來たのです。」

お千代はその男の腕にさへすがりついた。

「さうぞ逢はせて下さい。」

「あ、さうですか。よろしい、連れて行つてあげませう。」

X

お千代はその夜、早くも黒眼鏡の男が怪しいこみに感づいた。そして次郎もきつみこの男のために、災難に逢つたに違ひないに悟つた。しかしその男は、お千代の傍からちつとも離れなかつた。始めの程は、やがて次郎が歸つて來るやうにいつてゐたけれど、その安宿には、次郎の持ちものらしいものは何一つなかつた。

根問ひ葉問ひお千代が次郎のこみを聞き出すので、さう／＼仕舞ひにはうるさがつて返事をしなくなつた。

「今にみんな解るやうになるよ。」

さういつてその男は夕食の時に酒をのみ始めた。それからこれ二時間あまり、もう五六本も徳利はならんだが、まだやめさうにない。そして薄氣味のわるいこみをいひ出しては、お千代に擲擲ひ始めた。始めのうちはお千代もい、加減にあしらつて、その内に逃げ出さうと考へてゐたが、男の様子がだん／＼露骨になつて來るので、もう堪へられなかつた。

「泥棒ッ。」

長い手をのばしてその男がお千代の腕を捕へた時、彼女は思ひ切つて大聲に叫んだ。

「畜生ッ。」

その男は手を離して聞耳を立てたが、階下から人が上つて來る様子なので、周章で、膳を蹴飛ばして起上つた。

「覺えてろッ。」

男は恐ろしい顔をして部屋を出て行つた。それに入れ違ひに宿の女將さん、階下に下宿してゐる若い男が上つて來たけれど、その時怪しい男はもう見えなかつた。

「さうしたのです。」

女将さん「その男はいろ／＼に聞いた。お千代は怪しい男を知り合になつたことを一通り話した。

「日比谷で逢つたときそんな風をしてゐました。」

若い男が尋ねた。お千代は奇怪な男の風態を話した。

「そんなら彼奴は誘惑の常習犯人ですよ。僕の知つてる男もそいつに引か、つて、えらい目に逢はされたんです。」

お千代は直覺的にその男が、もしや次郎ではないかと思つた。

「その人の名前は伺ひます。」

「僕の知つてる男ですか。室伏つていふんですよ。」

「え、ッ。室伏ッ。」

お千代はその男にすがりついた。やつぱし自分の直覺が當つた涙さへ浮んで出た。

「妾はその人を尋ねてわざ／＼江州から出て來たのです。」

「室伏君を？」

その男は田中といふ次郎と同じ仲間の運轉手であつた。

「しかし折角だけ室伏君は、もう東京にはゐないんです。」

田中は次郎が會社をやめたこと、それからしばらくブラ／＼してゐるが、さう／＼船乗りになつたこと、その船は長崎へ向つたこと、船は横濱へ歸つて來たが次郎は脱走して長崎に残つたこと、なき彼の知つてゐる限りを話した。

お千代は一時はがっかりした。しかし國を出るときは、たゞへ唐天竺の果までも探し出さうと決心してゐた。

「妾、長崎へいつてきますわ。」

お千代は二人の止めるのも聞き入れず、その夜直ぐに汽車に乗り込んだ。淋しい頼りない旅がまたもや續けられた。

### ジャツク・ナイフ

諏訪公園の出來事があつてから、次郎は再び泰昌樓を出て渡瀬船の船底に身を置くことになつた。

小野田と雪江との仲もその夜以來險惡になつた。そして小野田もやがて泰昌樓から船底へ引き移つて來た。二人は六の

やうに枕を並べて寝た。

絶望を感じながらもまだ次郎は、さうしても雪江のことがあきらめられなかつた。

「ほん／＼の心持を突止めてから——。」といふ未練がつきまゝふた。

「お前さんはお人好しだね。」公園で嘲笑つた雪江の最後の言葉、それを雪江の本心に決めるには、その言葉のすぐ前の、

あの抱擁のエクスタシーにあつたときの雪江の眼が、餘りに純真すぎた。

「あの眼とあの言葉とは餘りに大きな矛盾だ。たゞ俺の卑怯な態度が、雪江の口からあの言葉を引き出したのだ。」

再度思ひ返しても、次郎はいつもかうした結論に達した。

「この前のときだつて俺は早合點をし過ぎた。だから今度はもう一度みつくり、雪江の本心をつきこめなければならぬ。」

終日空骸のやうな身體を泥と石炭の中で動かしながら、次郎はかうして雪江のことをばかり考へてゐた。そして仕事から、毎晩のやうに上陸しては泰昌樓の前をうろついた。けれども思ひ切つて中へはいる勇氣は出なかつた。

でソツミガラス越しにのぞいて見るミ、大い毎晩金千壽が来てゐた。いつも雪江がその相手をして支那酒をあふつてゐた。ある晩は金の膝に乗つて、首に手をまはして頬ミ頬ミをすりつけてゐる雪江の姿さへ見た。焼けつくやうな嫉妬が次郎の胸に湧いた。しかしそれミ反對に愛着の焰が一そう燃えさかつた。

「俺の意氣地がないのに愛想をつかして、あの金の方に氣を移したのか——。しかし次郎は、さうしてもまだ思ひ切るこゝミが出来なかつた。」

「イヤ金千壽には金だけのこゝミだ。俺に示したやうな熱情はない。」

「逢つてもう一度話しさへしたら、再び雪江の心を取り戻すこゝミはなんでもないのだ。」

次郎は激しい力で頭を擡げて来る嫉妬を押へつけるやうに、一人で辯解してゐた。さうしてその機會を狙ふために、相變らず毎夜のこゝミ、泰昌樓の前をさまよふた。

しかし二階で居候してゐる時ですら、店の勘定は全然別であつた。だからそこを出てしまつたこの頃では、金を持たずに店へ入るこゝミふこゝミは、なほさら次郎には出来なかつた。次郎はいつもさうさう船へ歸つて來た。

「金がほしい。」こゝミ思ふやうになつた。

X

「また振られて歸つたんかい。」いつも小野田が嘲笑つた。

「好い加減にあんな女のこゝミなんかあきらめてしまへ。あんな奴にかゝつてゐたら仕舞ひには骨までしやぶられるぞ。俺ですらいは、騙されたやうなもんぢやねえか。お前もあの女のこゝミでいがみ合つたこゝミもあるが、もう俺はすっかり思

ひきつてしまつたよ。」

さういつて眼鏡の底でせゝら笑つた。しかし次郎は小野田が本當に雪江をあきらめてゐるこゝミは考へられなかつた。小野田は嫉妬に燃えてゐるのだ。そして恐ろしい本性を現はして復讐を考へてゐるに違ひないと思つてゐた。

最初逢つたこゝミから小野田のするこゝミは、餘りに謀み過ぎて次郎には判断がつかなかつた。だから今度もそんなこゝミをいひながら、みんなこゝミを謀んでゐるのかも判らないと思つたのだつた。しかしそれをさう聞いて見る氣にもなれなかつた。小野田が復讐のために雪江にみんな危害を加へやうこゝミも、それを未然に防ぐ、なまゝ、いふ悠長な考へは少しも次郎の頭へ浮ばなかつた。

たゞ自分自身が雪江に戀情を捧げるのが急であつた。もし小野田の存在を考へるならば、それは金千壽と同じやうに競争者としての存在ミしか考へられなかつた。それで船へ來て以來、前ミ打つて替つていろくミ親切にしてくれる小野田ではあつたけれど、次郎はやっぱり公園で睨み合つたこゝミと同じやうな氣持らでゐた。

「君が思ひきらうミ切るまいミ、俺らの知つたこゝミぢやないさ。」投げ出すやうにいつて、次郎は船底へ入つてゆくのであつた。

X

「いよく今夜こゝミ雪江の本心を聞いた上で長崎を引上げやう。」

ある夜次郎は最後の決心をきめ、思ひ切つて泰昌樓の勝手口から入つて行つた。毎日のやうに出入したこゝミころではあつたが、一旦そこを出てからは、その懐かしい入口さへも氣兼ねせずには足踏みするこゝミが出来なかつた。次郎はソツミ台所へ入つた。母親の姿は見えず、太つた支那人が丁度夕めしを食べてゐるこゝミ

あつた。次郎はその支那人に雪江を呼んで貰つた。支那人は店へ出ていつたが、しばらくして歸つて来た。「いま忙しいから後で来てくれさいふこみです。」

次郎は仕方なくしばらく街を歩いてから、もう十一時を廻つたところを見はからつて再び来た。

「けふは忙しいから明日にしてくれ、さいふこみです。」

次郎はだん／＼亢奮して来た。

「しかしさうしても今夜逢ひたいんだから。」

支那人はまた店へ出た。

儲ソツミ店の方をのぞくミ、雪江は店の片隅のソファに寝ころんでランプを見てゐた。その前の椅子には金千壽が好い加減酔つぱらつて、何かくきくミ話してゐるのが見えた。支那人が次郎の傳言を傳へに行くミ、雪江はうるささうに手を振つた。支那人は歸つて来た。

「店へ廻つて下さいお客さんなら大切に上げてあげます、さいふこみです。」

「お客？」

次郎はカツミなつた。そして思はず憤りのためにわな、いてゐる手をポケットへ突込んで見たが、そこには数片の銅貨が鳴るばかりであつた。

「勝手にしろ。」

次郎は銅貨をた、きつた。そしてそのまゝ、そこを飛び出した。涙がほろ／＼こぼれた。

「あ、金だ。金だ。金がほしい。」

X

船底の汚い寢床には、よごれた煎餅蒲團にくるまつて小野田が寝てゐた。

「またいつたのかい。」小野田はまだ寢ずにゐた。

「辛棒がよいな。」

次郎はそれには答へず、別のこみを考へてゐた。

「あ、金が欲しい。」彼は大きな吐息をついた。

「金が欲しい？」小野田は吃驚したやうに眼をみはつた。

「金さへあればあんな男なきに見返られるこみはないんだ。次郎はひき／＼亢奮してゐた。

「世の中は金だからな。金さへあれば何でも自由だ。今頃はあの朝鮮人もうまくやつてるだらうよ。」

次郎は頭からスツボリ蒲團を被つた。小野田はそれを追つかけるやうにまたいつた。

「何をしてるか判つたもんぢやないぜ。あの女のこみだから。」

走馬燈のやうに雪江の顔が、次郎の眼の前をまほりすぎた。それを追つかけるやうに金千壽の美しい顔がまほつた。ぐるぐるまはつてゐるうちに二人の顔がだん／＼接近していつて、しまひに頬ミ頬ミがひつついてしまつた。雪江がうれしそうに笑つた。

「いまごろは二人の奴は抱き合つたり、接吻したり——」

小野田はわざ／＼次郎の心をかき亂さうこしてゐるやうにいつた。次郎はぶる／＼身震ひした。

あの紅い唇、豊満な肉體、一度は自分のものであつたのが、今はもう人に許されてゐるのか。さう思ふミ胸がやきつく

やうであつた。

「あの朝鮮人は金を持つてゐるからな。雪江はあいつの女房のやうになつてやがる。」

次郎はたまらなくなつて頭の髪を掻きむしつた。そしてむつくと蒲團の上に起き直つた。その眼は血走つてゐた。

「どうするんだ。」

「こゝても眠られない。」彼の胸には高い動悸が打つてゐた。

「今頃から起きたつて仕様がねえちやねえか。」

「これからもう一度泰昌樓へ行つて来る。」

「馬鹿！もう夜中だ。船があると思つてゐるのか。」

次郎はちつこつなだれた。

「俺は口惜しい。」

小野田は凄しい顔をして蒲團の上に取り上つた。

「手前でも口惜しいと思ふこゝがあるか。」

「口惜しい。口惜しい。あの金の野郎に見返られたと思ふこゝ口惜しい。」

次郎は頭を抱へてそこにそのまゝ、ごろりこ寝ころんだ。そしてまたもやボロボロ涙をこぼした。この頃は直ぐに涙が出るやうになつた。

「そうか。」

小野田はちつこつ腕ぐみして次郎の様子を見てゐるが、急に思ひついたやうに、蒲團の下から大形のチャックナイフをさ

ぐり出して、次郎の枕元へガチャリと投げ出した。

「あの朝鮮人をやつつけてしまへ。」

X

お千代はやがて長崎についた。彼女は第一にいかめしい警察の門をくぐつた。しかし名前だけでは次郎の所在が判りなうな筈がなかつた。第二に彼女は市役所の職業紹介係に行つた。

「もしや職を求めるために来てはゐるまいか。」

こいふ好い思ひつきであつた。若い係員は親切に申込書をつくってくれたが、遂に次郎の名前は見當らなかつた。

彼女は大きな薬屋を三四軒聞いて廻つた。國にゐる時、あの薬屋の店先で働いてゐた次郎の姿が、お千代の眼には残つてゐたのだ。しかしそれも徒勞に終つた。三四日はかうして過ぎた。彼女はまたもや尋ねあぐんで

「もうあきらめて歸らうかしら。」

こ考へるやうになつた。フト彼女は驛前に並んでゐたタクシーのこゝを思ひ出した。

「あ、さうだつた。」

彼女はもつこ早くそれに気がつかなかつたのが不思議だつた。そしていそいで驛前のタクシー會社へ訪ねていつた。

「宰伏次郎？」その事務員は首を傾げた。

「うちの運轉手にはそんな人はゐないが——しかし聞いたやうな名前だな。」事務員はしきりに考へてゐた。

「あ、さう〜。」

やつこその男は思ひ出した。お千代はうれしそうに飛び上つた。

「判りましたか。」

「判りました。だいぶ以前、志願者の中にそんな人がありました。餘り變な名前なので耳に残つてゐたのだ。」

「事務員は親切に志願者の履歴書綴りをくつて呉れた。」

「これだ、これだ。」

それに懐かしい次郎の筆蹟が現れた。彼女はむさぼるやうにそれを讀んだ。

「現住所長崎市西濱の町泰昌樓方室伏次郎」を讀まれた。

泰昌樓といふのは支那料理屋ですよ。美しいチャンボン娘がゐるころだ。」

事務員は雪江を見知つてゐるらしかつた。しかしお千代の耳にはそんなことは人らなかつた。

そこを聞いて彼女は何度も禮を述べて、いそ／＼出て行つた。そして賑やかな思案橋の通りを通つて西濱の町へ出て來た。そしてすぐに泰昌樓の赤い看板を發見した。

探しに探した懐しい次郎がこゝにゐるのか、と思ふと、お千代の眼にはもう涙がうるんだ、それが支那料理屋であることが別に不思議にさへも思へなかつた。お千代は胸の動悸を高めながらその門口まで來た。

「長崎名物チャンボン料理。」

さいふ立看板の蔭からソツミ中をのぞいた。ガラス越しに見える店の中にはまだ晝過ぎのこゝで客は一人もゐなかつた。勿論次郎の姿も見えなかつた。お千代は思ひ切つてそのドアに手をかけた。

「いらつしやい。」

さういふやうな聲を出して、太つた支那人がお千代の前に立つた。お千代はおどろ／＼しながら丁寧に頭をさげた。この支

那人はこんなに丁寧に頭を下げられるのは始めてであつた。彼はキョト／＼しながらあたりを見まはしたが、誰もゐなかつたので、あはて、丁寧に頭を下げた。

「何あげますか。」彼は注文を聞いた。

「い、え。ちよつとお尋ねしたいんですが。」

「あ、さうですか。」

そこで始めて彼はその客が頭を下げたこゝが判つた。彼は額を手で撫であげた。

「こゝのうちに室伏次郎といふ人が、御厄介になつてはゐないでせうか。」

「あ、次郎さんですか。」

お千代はうれ／＼と思つた。もう逢へると思つた。しかしまだ逢へなかつた。

「次郎さん、この間この家を出ました。船に乗りました。」

「えつ船に。そしてもう長崎にはゐないのですか。」

このとき突然二階で人の争ふ氣配がした。ガチャン／＼何か床に落ちてこはれたやうな響がした。

その響を聞く支那人は、またかといふやうにちよつと顔をしかめて天井を見つめた。

X

二階の雪江の居間では、恐ろしい形相をして、雪江次郎が睨み合つて立ちすくんでゐた。

二人の間には、支那ランプが粉微塵になつて碎けて落ちてゐた。いま身を退かうとした雪江をつかまへやうと、次郎が手を延した刹那、卓子の上からこぼれ落ちたものらしい。雪江の目は憎しみに燃え、次郎の眼は狂人のやうであつた。

「今日ごまかさうたつてごまかされないぞ。」

次郎は肩で息を切りながら叫んだ。次郎の亢奮してゐる割に雪江は平氣を装つてゐた。いつも相手方が亢奮すればするほど、冷靜になるのがこの女の持前らしかった。

「誰がごまかさうつていふのだい。」

「お前さんだ。何故逃げ出すのだ。」

「誰も逃げ出しやしないぢやないか。そんな話しは聞く必要がないさういふだけさ。」

「お前さんに必要はなくとも、僕にまつては生死にか、はる大事なんだ。必要か不必要かいふやうな生やさしいことぢやない。」

「妾がお前さんを思つてゐるか、ゐないかと、お前さんにまつてはそんなに重大な問題なのかい。」

雪江はこの時袂から煙草を出して火をつけた。

×

「さうもお邪魔いたしました。それでは、その渡瀬船を訪ねて見ませうか……」

さういひながらもお千代は、この家に思ひが残つて去りがたかつた。もつと詳しいことが聞きたかつたけれど、何だか二階が取り込んでゐるらしいので遠慮された。

「さうなさい。今日はまだ早い。きつゝゐるでせう。」

支那人は二階を氣にしながらいつた。

×

「それぢやお前さんは妾の口から、ハッキリそれをいつて貰ひたいつていふんだね。」

雪江は煙草の灰を指ではちき落しながらいつた。

「よろしいそんなことは何でもないわ。」

次郎は絶望を感じながらも、なほ一脈の希望をつないでゐた。そしてまた、きもせずちつと雪江の顔を見つめて、その返事を待つた。

「妾やあなたが好きだつたのサ」雪江はニヤリと笑つた。

「つまりお前さんに惚れてゐたのサ。」わざと平氣を装つてはゐるが、流石にその聲は曇つた。

「そして今は？」

次郎は思はず雪江の手にすがらうとした。パツと雪江はそれを振り放つた。彼女は再び勇氣を取り直した。

「いまは嫌ひさ。大嫌ひさ！」

いひすて、グツと次郎を睨みつけた。

「何ッ。」

次郎は思はずつめ寄つた。そして二人は憎しみの眼と眼を、かみつくやうに睨み合せた。

「自分の女が手ごめに會はうとしてみてるのを、見殺しにするやうな卑怯な男？。それで妾や嫌氣がさしたのさ。」

雪江は吐き出すやうにいつた。

「お、それは——」

次郎はその言葉を聞いて一度に勇氣をくぢかれた。そして何か辯解しようとして口を動かした。しかし辯解するには何



の言葉も持ち合はさなかつた。

「僕が悪かつた。」

次郎は突然雪江の前に跪いてすがりついた。

「許しておくれ。許しておくれ。」

彼は哀願した。しかし雪江は石のやうに冷たかつた。

「もうおそい。一日消えた炭は灰だからね。もう火がつかないんだよ。」

さういつて彼女は次郎の手を解いた。次郎はそれでも更にすがりつかうとした。雪江は邪慳にそれを振り切つて身を退いた。次郎はよろ／＼と前へこけさうになつた。ミたん。——ガチャリといふ音がして次郎の懐中から大形のナイフがころげ出た。ハツミあはて、それをかくさうとしたけれど、眼さく雪江はそれを見つけた。

「おや！」雪江は素早くそれを拾ひ上げた。

「ジャックナイフ？」

彼女は冷笑を浮べて次郎を見た。次郎は黙つてうなだれてゐた。

「おい先生。お前さんこれで妾を殺さうといふのかい？」

海岸から四五町離れたところに、異様な形の渡瀬船が大きな響きを立て、ゐた。

お千代はやつと傳馬船を見つけて、渡瀬船までやつて貰ふことにした。船頭は船舷に水をかけ、櫂をあてがつて漕ぎ始めた。渡瀬船は次第に近づいて來た。

「この船にこそ、いよ／＼次郎ちゃんはある！」

お千代の頬は火のやうにほてつた。

夢遊病者のやうになつて、次郎はフラ／＼と街中をよろほひ歩いた。ある時は破れたポケットへ両手を突込み、またある時は両手で頭を抱へながらフラ／＼、フラ／＼とよろめき歩いた。道行く人が振り返つて見るほき、その姿は憐れであつた。

「お前さんなんぞに人が殺せるかい。卑怯者の癖に生意氣だよ。」雪江の聲が頭にひびいた。

「おごかしなら、それはお間違ひだよ。ちつちは修業を積んでるんだからね。」毒々しげに雪江はいつた。

「それこそ本當に殺す勇氣があるのなら、グサツとこの乳房のころをやつて御覽、お前さんにそれが出來たら、もう一度惚れ直して上げてほしい。」

物凄くも美しい笑ひ顔であつた。あれが雪江の本性かしらん。次郎はそんなことを考へることもなく頭に浮べながら歩いた。

「あ、絶望だ。すべては終りだ。」

いつの間にか海岸に來てゐた。ドブ／＼と波が岸壁を打つた。向ふに渡瀬船が浮んで見えた。

「人を殺す勇氣もなし、意氣地もなし、それで女が出来ると思つたら、それでは少しお前さん自惚がすぎるこいふものだよ。仇やおろか、酔狂で男極道をしてる譯ぢやないからね。いまちや金ちやんが一等頼もしい色男さ。」

悪魔の囁きのやうに、さつき雪江が残した捨科白が次郎の耳をおそつた。次郎は両手で耳を被ふた。

「金だ、金だ、金さへありあ。」

次郎は身を震るはして口惜しがつた。

お千代の乗つた渡し船は渡瀬船に着いた。

「室伏ちう人はをらんかね。」

船頭が大きな聲を出して怒鳴つた。ヌツミ黒眼鏡の小野田が船底から姿を現した。黒眼鏡を見てお千代はぎよつとした。

「次郎はをらん。」小野田が答へた。

「ここへ行つたんでせう。」

おきくしながらお千代が聞いた。小野田はデロリミ見た。

「ここから訪ねて来なすつた？」

「國もこから、江州からです。」

小野田はうなづいた。

「お千代さんだね。」

お千代は意外だつた。ちつミ小野田の顔を見た。

「次郎君がいつもあんたのこみをいつてゐたよ。」

お千代は次郎が——ミ思ふミ嬉しかつた。それにしてもまた次郎がゐるのが心細かつた。

「まだ歸つて来ないのでせうか。」

「今日は歸るまい。」

「歸らない？」お千代は悲し氣に眼を伏せた。

×

「何、私が連れて行つてあはせて上げませう。」

「まあ、あなたが。さう願つたらそんなに嬉しいでせう。」お千代はほつとした。

小野田はやがて洋服の上衣を着て出て來た。乗つて來た船にお千代は、小野田を乗せてまた岸へ向つた。

×

「ここにかく船に歸らう。」

次郎は傳馬船に乗つた。船は渡瀬船に向つた。

「もう長崎なんかには用はない。金だ金だ。金儲けをするんだ。」

船の舷に坐つて次郎は、ちつミ腕組みして考へ込んだ。

×

渡瀬船ミ岸ミの丁度中ごろで、この二艘の傳馬船は行違つた。お千代は船の舷に腰かけて、ちつミ遠ざかり行く渡瀬船を見つめてゐた。次郎は船の前方を向いてゐるが、その眼はちつミ海を見つめてゐた。

船ミ船ミは行きちがつた。しかしお千代は全行き違つたその船に、ボロ／＼の洋服を着て踞つてゐる男が乗つてゐるの氣がつかなくつた。よしまた氣づいたミころで、それが戀しい次郎の姿ミは考へつかぬこみであつたらう。

「早く逢ひたい。」涙ぐみつ、彼女は胸をふるはせてゐた。

勿論次郎はお千代の姿を見なかつた。よしまた見つけたミころで、何しにはる／＼お千代が訪ねて來たミは考へやう。

「金だ。金だ。」彼は涙を流してゐた。

たゞ一人何こも氣づいてゐた小野田は、黒眼鏡の底で氣味のわるい笑ひをもらしながら、離れ行く次郎の船を眺め、

また思物ひに沈んでゐるお千代の顔を眺めながら、棒のやうに船の中につゝ立つてゐた。神様のいたづらか運命の皮肉か、サイコロの目の出どころが一つちがつたばかりに、かくして二人は遂にそれとも知らずして行きすぎてしまった。二艘の船はやがて遙かに隔たつた。

道 頓 堀

大阪道頓堀——空を被うて美しい彩りの小旗が、通り一パイにはためいて景氣をあふつてゐる。

大きな櫓下がその間にゆらゆらゆらゆらミ風に動く。その下を目まぐるしいばかりに澤山の人々がざろくくミ通る。立止つて繪看板に見入つてゐる人もある。綺麗な着物を着た美しい若い女が、立派な洋服を着た美しい若者ミ肩をならべて歩いて行く。その後から橋を渡つて五六人の舞妓が、人形が浮き出たやうな姿で歩いて來た。彼等はコッボリの音を響かせながらカラコロミ歩く、そして何事か話し合つては時々一しよに聲をあげて笑ふ。眞黒になつて群集しながら雑沓してゐる人達はみんな、この一群の舞妓の方を振り向く。女達も振りむく。

「まあ、きれいやこい。」こさ、やく女もゐる。誰も彼も皆屈託のなささうな顔をしてゐる。

X

そのなかに只一人、眉根に深い皺を寄せながら、汚い洋服のポケットに両手をつゝ込んで、ふらくくミ喪心したやうに歩いてゐる男がある。

「氣をつけんかい。」こ人ごみにもまれて、突き當つた男から剣突をくらはせられたりする。

長崎の渡し舟で、サイコロの目の出どころが一つ違つたばかりに、はるくくミたづねて來たお千代も逢はず、それ

つきり長崎を飛出して諸所をうろついてゐた次郎である。

あれから早くも二年いふ月日が矢のやうに流れた。その間次郎は常に不幸であつた。二十五や六の若者にしては、餘りに老けて見える無性釋の生えた彼の顔が、それをよく物語つてゐた。

辿り辿つて彼は遂に大阪へ來た。日本第一の商業都市——。

しかしその立關に立つたときの彼は、曾て東京の驛頭に立つた時の彼ではなかつた。その時には青雲の志が東京いふ名に武者ぶるひを感じた。大阪驛頭で眼まぐるしい電氣廣告の明滅を見た彼は、生活苦の豫感におびえた。

次郎は早速職業紹介所へ行つて見た。そこには次郎と同じやうな運命を辿つて行くらしい人々が、一片のパンを奪ひ合ふ獸のやうに、お互ひに一つの職業を争奪した。職業は少く、求めるものは多かつた。與へられるものは、紹介所の前の石段に腰を卸して、次のパンの投ぜられるのを待つた。次郎は限りなく淋しさを味はひながらそこを去つた。

X

「さうしてこんなに澤山の人々が遊んでゐるのだらう？」

道頓堀の人込みにもまれながら、そんなこゝを次郎は考へてゐた。紹介所ではあんなに澤山の人々が一片のパンを漁るために集まつてゐた。それにこゝではこんなに澤山の人々が、遊ぶために眞黒になつて群集してゐる。——

「それはサイの目の出どころ一つであります。」

突然大きな聲が聞えた。次郎はハツミしてその聲の方を振り返る。そこには路傍で子供のために双六を賣る一人の男が、美しい色刷りの双六を両手に擴げて、呼び賣りをしてゐる姿があつた。

「新案五十三次ぎ競争双六一飛行機で飛んでも故障が起れば駕にでも負ける、そこがこの双六の面白いところ。さあお子

達の土産に是非お買ひなさい。」その男は更に聲を振り立てた。

「サイの目の出どころ——」次郎は撫然としてそこに佇ずんだ。

「さうするとおれは、よつほき運の悪い男に見える。」次郎は人込みの中にあるのを忘れて考へ込んだ。

三人も四人も何べんも人が行き當つた。

「ぼんやりするな。」一人の男が叫んだ。

「さつさき歩きんか。」もう一人の男が叫んだ。

しかし次郎はそんな聲は耳に入らなかつた。そしてちつちつと双六賣りの方を見てゐた。その時一人の紳士が次郎の肩をポンとたたいた。

「ハツミ吾れに歸つた次郎が振りむくミ、その若い紳士はニコニコ笑つた。

「お、丑太郎さん。」

「久しぶりだな。」

その紳士は故郷の藥屋の倅丑太郎であつた。二人は思ひがけないこの奇遇に手を取り合つて喜んだ。そして人込みを避けて戎橋の橋の上で話し合つた。

「その後さうして暮してゐる？」

しかし次郎はその間に答へるこゝが出来なかつた。破れた帽子、破れた靴、ボロ／＼の洋服、それらがその間に十分に答へて呉れた。

「僕は電報が来て急に國へ歸らねばならない。しかしこゝにかく僕の宿まで來給へ。」

悪戯ずきの坊ちやんだつた丑太郎も、今は立派な青年紳士になつてゐた。次郎は今更に吾が身が顧みられた。

X

丑太郎の宿へ歸つてから次郎は、母親の亡くなつたこゝを始めて知つた。しかしお千代がわざ／＼長崎まで訪ねて行つたこゝは、丑太郎も知らなかつた。

次郎は長崎を出て諸所をうろつく間、何度もなく歸郷を思つた。しかし次郎は自分の身が顧みられて、さうしても歸るこゝが出来なかつた。

母！彼はしみ／＼懐しきを感じるこゝもあつた。

「もう老いさらばうて腰も曲つてゐるこゝだらうナ。」次郎はつく／＼こゝをさう思つた。

お千代！彼女のこゝを思ふ時、疲れ果てた彼の心にもさすがに一脈の愛執が通り過ぎた。

「さぞ美しくなつてゐるだらうナ。」

しかし、食ふこゝに追はれてゐた次郎は、いつまでもさうした感情に浸つてゐるこゝが出来なかつた。それよりも雪江さいふ女性に裏切られた新しい惱みの方が、もつミ力強く彼の心を探へてゐた。そして忘れるこゝもなく、故郷のこゝを思ふこゝが少かつた。

いま母親の死を知つた時、さすがに次郎は「人生の悲哀」を痛感した。けれども弾力を失つた彼には、今更それを知つたさうして、急にその境遇に大した變化が起りさうなはずがなかつた。

「故郷の話は聞きたくない。」

さういつて次郎は涙ぐみながら、うなだれてしまつた。

次郎も掻いつまんでその後の話をした。惨めな経験ばかりである。

「それぢや丁度好都合だ。僕の仕事を手傳つてくれ給へ。」

次郎の話しを聞きをはつた丑太郎がいつた。

「別に難かしいことぢやない。君も知つてゐるうちの石灰石の出る山ね。あの山から停車場まで運搬用のケーブルカーをつけたいんだが、先もいつた通り僕は今夜中に國へ歸らなければならぬんだ。そこで君に頼みこいふのは、つまりその見積りを至急にここから取つて來て貰ひたいのだ。」

次郎は大きくうなづいた。

「それぢやあ明日中にでもそれを取つて國へ送つてくれ給へ。折り返してすぐ返事をするから。」

丑太郎は紙入から十圓札を二枚出した。

「これは運動費に。」

その翌日次郎は「日本索道商會」を訪れた。一時間ばかり待つ間に見積書が出来上つた。見積書には四萬二千八百六十圓といふ數字が現れた。

「契約書を取り交します時に、手金として二割を頂戴いたします。」

支配人はさういつて見積書を渡した。次郎がそれを懐中にしまひ込んで立上るまで、支配人はちつこその様子を見てゐた。

「それでは二三日中に、ミかくの返事をします。」次郎は歸りかけた。

「失禮ですがあなたの御商賣は？」

「僕？……なあに、貧弱なプロカーですよ。」次郎は一寸ぎまぎしながら答へた。

數日後。次郎は再び日本索道商會を訪れて來て手金を渡した。假契約が成立した。

更に數日後。次郎は朝から落つかない様子で下宿に寝ころんでゐる。次郎は昨日のこみを考へてゐた。

彼は丑太郎から送つて來た小切手を持つて索道商會に行つた。支配人は可憐に頭を下げて

「いろ／＼御盡力を蒙りまして有難うございます。つきましては、コムは如何程差上げませうか。御遠慮なく仰しやつて頂きたいのですが。」ミ切口上でいつた。

「コムに申しまするに。」

「おれは愚かにもそんなへまな間を發した。支配人は變な顔をしてゐたッけ。——」

「コミッションでございませう。」

「コミッション！そんなものは戴かうとは思つてゐません。」

おれはキツパリ答へた。それが本當の心持ちだつたのだ。

「しかしあなたはプロカーをなさつてゐるんぢやありませんか。」

「おれは最初そんなこみをいつたのを忘れてゐたのだ。プロカーの方がコミッションをお取りにならぬミなるミ、私共はかへつて困りますので——」支配人がさういつて頭

を掻いた。

「それぢや一割頂戴ませう。」おれは思ひ切つていつた。

「それでは明日、社長と相談しました上で——」

さうして昨日は歸つたのだつた。

「一割では少し高かつたかな？」仰向けに寝ころんで次郎は天井を見つめてゐた。

「五分さういへばよかつた。」

×

その時女中が索道商會の支配人を案内して來た。

「この間からいろく、御厄介をかけまして、何とも御禮の申上げやうもございません。」

支配人はしかつめ、らしい顔をして菓子箱をまづ先へ出した。

「これはほんの手土産で——。失禮かも知れませんが。」

次郎はお茶を入れた。

「イエもつ、さうぞ——」

支配人はグツミ一杯お茶をのみほしてから、今度は洋服のポケットから一枚の小切手を取り出した。

「きのふお話のコムでございます。社長も喜んで承諾いたしましたから、丁度一割で四千二百八十六圓の小切手を書いてまゐりました。」

×

支配人を歸してから次郎は、夢心地でその小切手を長い間見つめてゐた。

「四千二百八十六圓！」

何度見ても小切手の數字はさう讀めた。次郎はぼつこして天井を見つめた。この二年間の生活が頭に浮ぶ。

——彼は仲仕になつて船着場に働いてゐた。

——彼は新聞配達になつて街の中を走り廻つてゐた。

——彼は辻待ちの仲夫になつて橋端の柳の下にゐた。

——無料宿泊所から彼は出た。

——浮浪罪として彼は交番に引致された。

「この二年間、おれはあんなに苦しんだ。しかも金はおれの手にはミ、かなかつた。それに——」

次郎はまた小切手を眺めた。

「四千二百八十六圓！これはみんなおれの金だ。」

次郎は突然立上つて雀躍した。

×

「この金をさうせう？」次郎はいろく、さ考へた。

きのふまで無一文であつた彼は、一ぺんに四千圓さういふ大金を手にした。ほんのさほりすがりの商賣に過ぎなかつたが、こんな大金にならうとは？何度考へても彼は夢さしか思へなかつた。

フト次郎は丑太郎と出逢つた時のこみを考へる。あの双六賣のりこみを考へる。

「それはサイの目の出どころ一つであります。双六賣りの叫んだ言葉！  
「さうだ。さうだ。サイの目の出どころがよかつたのだ。」次郎はまたもや小切手を取り出して眺めた。  
「よし。一かバチか株を買つてやらう。」いそいで身仕度をしてそ、くさき下宿を飛び出した。

光 勇

「サイ」の目はトン／＼拍子に良くなり始めた。  
次郎はサツカリンの株を買つた。  
サツカリンの株が暴騰した。  
次郎は大阪染料株にも手を出した。サツカリン株で儲けたので、こんどは少しやま／＼を出した。  
大阪染料株が暴騰した。  
「現株だけでは面白くない。」彼は定期に手を出した。買つたら昇り賣つたら下つた。  
また、く間に次郎は成金になつてしまつた。

×

やがて次郎は北濱に「室伏次郎商店」といふ店舗を構へた。彼は毎日ホテルから店へ通つた。毎朝次郎は自動車の中から、勤人が街の中をテク／＼歩いてゐるのを見てゐた。  
「さうしてあの連中はあ、馬鹿なんだらう。……一日コツ／＼働いて幾ら貰へるんだ。矢張り働かないんだな。」  
そんなことを考へるやうになつた。

ある朝次郎が出勤するに、店員が皆ベコ／＼頭を下げて次郎を迎へた。次郎は一番奥まつた机の前にすはつた。その側に相場表の掲示板がある。支配人の大山が来た。

×

「お早うございます。」  
いひながら大阪染料株の欄に「三〇、五〇」のあるのを消して「三二、〇〇」を書いた。  
「こりや天井知らずだ。今の中に三千株だけ約束し給へ。」  
次郎は上機嫌である。数名の客が店に出入する。店員はそれに一々應接する。電話が絶え間なくかゝつて来る。  
「今朝からお出でを待つてゐる人がゐるんですが——」  
應接間には「××株式雑誌」の記者が寫真班をつれて待つてゐる。  
「やお待たせしました。」  
「何？私の成功談？そいつは私の死ぬる時にして貰ひ度いね。尤もその時には不成功談に終るか知れないが。」  
「それではあなたの日常のモットーは？」  
「人間は自分自身のために働け！たゞそれだけですよ。」  
「ちよつと寫真を。」  
次郎はふんぞり返つて寫真を撮らす。  
「まあ話していき給へ、こいひたいが、忙しいから晩にでもゆつくりホテルの方へ遊びに来て下さい。」  
「さうもお邪魔をしました。」

雑誌社のものは出ていく。次郎は自分で自分の豪さに心酔する。

「御主人、さても天井知らずですよ。」

その時大山がニコ／＼しながら飛び込んで来た。彼は得意の絶頂にゐた。

「さうか。それぢやもう五千株約束し給へ。」

一人の店員が来る。

「銀行倶楽部からお電話です。」

また別の電話のベルが鳴る。

「平井さんからお電話です。」

「多賀さんが来られました。」

次郎の身體は頗る多忙をきはめる。

X

次郎はホテルに歸つて晚めしを食べる。ハムエッグスの皿が来る。卵が金貨のやうに見える。食事を終つて新聞を読む。「金」さういふ活字だけが特別に大きく抜け出して見える。

ボーイが電報を持つて来る。それを讀んでゐる。またつぎのボーイが名刺を持つて来る。「關東貿易株式會社専務取締役高須重四郎」さある。そこへまた別のボーイが名刺を持つて来る。「大阪株會會長丸瀬互」さある。またもう一人のボーイが名刺を持つて来る。「××雑誌記者中越憲一」

「横山さんからお電話です。」また先きのボーイが来る。

「今朝御留守中にごの方々が見えまして、お歸りになつたらお電話をこいはれました。」ボーイは名刺をかためて渡す。

「お店の大山さんがすぐお伺ひするに、電話して来られました。」

「それから株主協會から、是非今夜の宴會には御出席願ふやうにさういふお電話でした、それから——」

「待つて呉れ、もう好い、みんなるないさいつて斷つて呉れ。」

次郎はぐつたりと身體をソファに横たへて煙草をくゆらす。

「あ、俺は休息が欲しい。」

X

落人も見るかや野邊に若草の、芒尾花はなれども、世を忍び路の旅衣、着つ、馴れにし振袖も、さうやら知れる人目をば、かくせさ色香梅ヶ花、散りても跡の花の中、いつか故郷へ歸る雁

藝者光勇の屋形。夕方である。妹藝者若春は爪弾きで清元の稽古をしてゐるが、辛氣臭くなつてやめてしまふ。

「あ、辛氣臭さ！」

光勇はそばの鏡臺に向つて化粧をしてゐる。

「あんたはちきにいやになるのやな。そんなこゝではあけへんし。」

「何でだつしやろな。やつぱり好きな人でもなけりや張合がないのだんな。」

「好きな人がほしかつたら、勝手にこしらへたらえ、やないか。」

そこへ店の男衆が入つて来た。

「へい今晚は。光勇はんおこしらへ。」



「どこから？」

「駒の家はんだす。」

「そうら来た。大崎の旦那はんか、室伏さんや。両手にお金の成る木を持つて姐さんらえ、な。」

「この妓はほんまに阿呆やな。」

男衆は光勇に着物を着せた。

※並木駒形花川戸、山谷堀からちよみ上り、長い堤をば通はんせ、おいらんがお待ちかね※

若春はまた三味線を掻き鳴らす。

駒の家の二階離れ座敷——。次郎は大編の重ね着、五六人の藝妓にざりまかれて、い、加減に酔ひがまはつてゐる。

「光勇はまだ来ないか。」

次郎は株盛會の宴會で光勇を知つてから通ひつめた。

駒の家の二階表座敷。船場の金持ち大崎菊造は、仲居のおてるを相手に酒を飲んでゐる。彼は株を賣買してはその資産を巧に増やしてゐる。

「今晚は、お、きに。」

そこへ光勇が入つて来た。

「待たせたな。さあ一杯やれ。」

仲居は座を外した。

「光勇が来なければ歸るぞ。」

次郎は頗る不機嫌である。若春が来る。次郎の傍へ坐る。

「そない光勇姐さんばかりのこゝいはんこ、ちつこはわたいにも惚れなはれ。」

皆が聲を合せて笑つた。次郎はそれでも機嫌を直さない。

「光勇を呼べ。」

「光勇はん。ちよいん。」

「何？」

「ちよつこだけ顔を出したげこくなはれ。こても治まれへん。」

「あの成金だつか。」

光勇は嫌々次郎の座敷へ来る。

「まあ室伏さん。ようこそ。」こゝいひながら、その傍にすわり込んで酌をする。

「よう／＼。」

こ皆が噓し立てる。次郎の機嫌は直ぐ治る。二人は盃を取り交した。

「もう何處へも行くなよ。」

「誰が行きまつかいな。」

×

「光勇はさうした。」

大崎の機嫌が今度はわるくなる。仲居は光勇を呼ぶ。光勇は大崎の座敷へ来る。次郎はまた機嫌をわるくする。

「光勇は何處へ行つた。」

そして次郎は起上つて廊下へ出る。縁越しに表二階の座敷に、光勇と大崎の話し合ふ姿が障子にうつる。その影は、ある時は顔と顔が引つき合ふやうにさへうつる。

「こらッ、光勇。」

次郎が呼ぶと、中から大崎はガラリと障子を明けた。二人は顔を見合せて吃驚する。

「よう室伏さんちやないか。」

「お、大崎さん——」

大崎は次郎の店の得意先である。

×

その時から次郎はますます、光勇のもこへ通ひ始めた。

「あんな奴に取られるものか。」

若い次郎は戀の戦場に敗將となるこみを嫌つた。

「俄成金の手に渡すものか。」

大崎も意地になつてゐた。そして通つた。光勇の身上はだん／＼増えて行つた。駒の家の座敷ではしば／＼次郎と大崎が鉢合せをした。

こんな事が晝は晝で忙しい次郎の、夜の仕事であつた。そしてこんな生活がかなり長くつゞいた。

次郎はこの頃は毎夜のごこく、駒の家の方關を上らずには、ホテルへ歸るこが出来なかつた。

「光勇は來ないか。」次郎は同じこみを毎晩何度も繰り返した。

×

「そないにせかんかて、もう直き來やはりまんがな。」

若春がいつも次郎の脊中をたいて慰めた。

「さあそれまでは飲みなはれ。」

次郎は盃を重ねたが、光勇はなかく／＼來なかつた。

×

ある夜——その夜も光勇は姿を見せなかつた。

「ようし、光勇が來なければ、皆によいものをおこつてやる。」

次郎はむしやくしやししながら急に立上つた。

「どこへ行きなはる？」

「皆」しよに來い。自動車を呼んでくれ。」

次郎は若春の外に三人の藝者をのせて、自動車を走らせた。

次郎の一行は心齋橋で自動車を乗りすて、賑やかな心齋橋筋をぞろぞろ歩いた。

「さあ何でも好きなものを買つてやるぞ。」次郎は自暴くそになつて叫んだ。

「うれしいッ。」次郎の心も知らず皆がはしやいで歩いた。

「え、ぞく。」

酔つた人も通つた。若い夫婦者はいまはしいものを見るやうに、この一行を避けて通した。

「妾半襟がほしいわ。」

「妾はシヨールや。」

「妾には名古屋帯を買ふまくなはれ。」皆夫々注文した。

「みんなおれを見くびつてゐるな。もつと高いものを注文しろ。」

かうしてこの一行は道頓堀へ出て来た。道頓堀は景氣そのものが躍動してゐるやうに、萬物皆ひみしくかゝやかに動き出した。次郎は兩側に女達をならべながら歩いた。道行く人達は皆次郎の顔をのぞき込んだ。

「景氣がえ、な。」ミ叫ぶ人もゐた。

フト次郎はいつか流浪の旅をつゞけて、こゝに辿りついて来た。こゝを思ひ出した。丑太郎に逢つたこゝを思ひ出した。双六賣りの言葉を思ひ出した。その時の惨めなわが姿を思ひ出した。

「それにいまは？」

次郎は却つて暗い気持ちになつて行くのを覺えた。

「おい、もう歸らう。」

次郎は急に歸りたくなつた。

「まだ早いわ。」

「活動を見まへう。」

女達はそれを不足らしくいつたが、次郎はこんな姿を街頭にさらしてゐるのが、急に羞しくなつた。

「い、やもう歸る。」

そしてこの一行は、澤山な買物をして駒の家へ歸つた。それでも次郎は自動車の中から「光勇は？」と聞くのを忘れなかつた。しかし光勇はまだ来てゐなかつた。次郎は自動車を降りずにそのまゝホテルへ歸つた。華やかな聲を残して送つて来た藝者達は、ホテルから歸つて行つた。次郎はホテルの部屋へたゞ一人取り残された。

「これは何の態だ。」次郎は頭を抱へて考へ込んだ。

「これがおれの休息か。これが最上の慰安か。」次郎はまた考へた。

「おれは金を求めた。そして金を得た。その金は何を齎してくれたのだ。」

「俺は金さへあれば——と考へた。その考へは間違つてゐたのか知ら。——」

そして次郎は悶えるやうになつた。

X

ある日、いつものやうにひる前に次郎が店へ出勤するに、朝から次郎の來るのを待つてゐる男女の客があつた。午前の状況を支配人の大山から聞き終つた次郎が、應接間へその姿を現はすに、その三人の客は一齊に立上つて敬意を表した。「私が室伏です。そして貴下方の御用ごいふのは？」

「私がかういふもので——」男の客が先へ名刺を出さうとする。

「ちよつとお待ち下さい。私の方が先から待つてゐるんですから」ミ東嬢の女客が名刺を出した。

「女性擁護實行會幹事畑山峰子」

「そして御用は？」

「そも／＼現代の我國の女性は、餘りに自分自身を輕んじ過ぎるミ考へます。苟くも女性の持つ本來の使命を考へまする時は、女性はむしろ男性以上で、かの蜜蜂の女王の如くわれら人間の女性も——」

次郎は氣がいら／＼して來た。

「忙しいんですから簡單に願ひたいですな。」

「それでは趣意書をおきませう。——でつまりこの主義を實現する上に、貴下の力を借りたいと思つてお邪魔したのです。」

「あなた方は？」

残つた男女は同時に名刺を出す。

「職業婦人聯盟幹事渡瀬あき子」

「扶桑慈善協會理事井上精造」

「そして御用は？」

三人は同時に寄附帳をつき出す。

「つまり寄附を頼みに來られたんですね。」次郎は苦笑しながら

「しかし折角ながら、近頃は一切寄附せないことにしてゐるから」さいひすて、立去らうとした。

「しかし——」三人は次郎が部屋から出やうとするのをさへぎつた。

「今は忙しいから——」

しかし三人は退かない。

「君達は強請するのか。君達は僕が遊んで金を儲けてゐるやうに思つてゐるのか。」次郎は思はず威猛高になつた。

「勿論。」するミ扶桑慈善協會の男も威猛高になつた。

「遊んでゐればこそ金が儲かるのぢやありませんか。土工、仲夫、車掌、仲仕、書記、職工、彼等は人一倍良く働きます。それに皆が貧乏です。あなたは少なくとも彼等よりは餘計に遊んでゐる。だから餘計に儲けてゐるのだ。」

「遊んでゐる。僕はこれでも遊んでゐるのか。」

次郎はこの頃の生活を思つた。店へ來れば一秒の絶え間なしに金の響が耳を被ふ。夜が來れば女の争奪に氣をいら／＼させる——

「おれは決して遊んではゐない。おれは人一倍苦しんでゐるのだ。」

いひすて、次郎は三人を押しつけて部屋を出た。

「今日は心地がわるいから、もう歸る。」

次郎は不快に堪へず自動車に乗つて店を出た。

×  
自動車は駒の家の門に着いた。晝をまはつたばかり、明るいうちのお茶屋さいふものは何もなく淋しくてわびしい。襪

がけで掃除をしてゐた仲居達が、吃驚して次郎を迎へた。

「まあこんなに早うから。」

「ひるのうちなら光勇にあへるだらうと思つてな。」

次郎は、まだ前夜のまゝ、取り散らされてゐる座敷へ通つた。

×

間もなく光勇が襟かけの常着のまゝ、やつて來た。盛裝した時とはまた別の趣があつた。

「まだお風呂へも入つてしまへんの。おきに歸らして貰ひまつせ、こんな汚いなりをして——。」

「好いぢやないかそのまゝで。」

「阿呆らしい、人が笑ひまんが、ちゃんまきれいにしちぎに來まつさ。」

「そんなら待つてるぜ。」

ひるめしだけつき合つて、光勇は着物を着かへに歸つた。

次郎は今朝からの不快つきに氣をくさらしながら、酒をグビグビ飲んで待つた。

光勇はなかく來なかつた。

「光勇はまだ來ないか。」

また始まつた。仲居のおてるは、當惑しながら徳利を取上げた。

「もう來やはりまつしやろ。あの人はほんまに長風呂やな。」

しかし三時間たつても四時間たつても、光勇は來なかつた。

「今晚は。」そこへ若春が襖をあけて入つて來た。

「こんなに振られても、まだ思ひ切れんのは何ごい因果だらう。」

次郎は若春を顧みて淋しく笑つた。若春は眼を伏せた。

「私、姐はんを呼んで來まつさ。」

「呼んで來る？さうか、お前はえらい。頼む。」

次郎は若春の手を握つた。しかし若春はその座敷を出るまゝ、後からついて出た仲居に手ひきく叱りつけられた。

「あんたは藝者になつてから何年になりまんね。光勇さんが今ごろ屋形にゐると思つてなはんのか。阿呆らしい。そんなボンヤリやさかい、いつまでたつても旦那はんが出來へんのや。」

×

光勇は同じ駒の家の別の座敷で、大崎と差向ひになつてゐた。

「光勇を呼べ。」次郎の怒鳴る聲がそこまで聞えた。

「おい、また呼んでゐるぜ。」

「放つていごくなはれ。あんな野暮臭さいお客つたらあらへんわ。」

「ご申すもの、何だか譯がありそうやな。」

「阿呆らしい。」

若春が入つて來て光勇に耳打ちしたけれも、光勇は動かなかつた。大崎は上機嫌である。

「なあ旦那はん。あんな野暮天と交際するのは止しにしたらさうだす。」

大崎の膝にもたれて、光勇はちつこその顔をのぞき込んだ。  
「交際をやめる？」

その時バチンと火鉢の火がはねた。火の粉が大崎の眼に入った。  
「あつ痛ッ。」

× 「そんならいつそ引かしはつたらさうだす？」

仲居のおてるは他の藝者を遠ざけて、次郎を差向ひになつた。

「引かす？」

次郎は酔眼を見張つておてるの顔を見た。

「引かす、こいふ話しやつたら、満更光勇はんもいやこはいひはりまへんこ、私は睨んでます。」

「引かす？」

しかし次郎は、自分がこれほごまでに光勇に惚れてゐるこは思つてゐなかつた。戀よりも意地が手傳つてゐるんだ、こ自分では解釋してゐた。

「引かしてまでもこは思はん。」

「そんならそないに野暮なここいふたげなはん。あんたも昨日今日遊び始めたお方やなし、光勇はんかて、やつぱりさしさはりのある人もありませんがな。」

「それは誰だ。大崎か。」

「まあそこらだんな。」

おてるはづるさうに笑つた。次郎はいつか障子越しに見た二人の姿を思ひ出した。

「一體これほご出せば承知するんだい、光勇は。」

「さあ、それは聞いて見ねば解りまへんけき、しかし光勇はんはもう姐はんは株だつしよつてな。」

「だからいくらぐらゐつて聞いているんだ。まさか二萬圓も三萬圓もいるんぢやあるまい。」

「そないにはいりまへんけき。」

× おてるはちよつこ首を傾けた。次郎は知らぬ間に、こんな話に引ずりこまれた自分をさうするこもできず、苦い顔をしながら盃を嚙んでゐた。

× 大崎の眼はみる／＼眼れ上つた。光勇は驚いて女將さんと呼んだ。女將は驚いて早速自動車に大崎を乗せて、眼醫者の

ところへ驅けつけた。

×

「まあ五六千だつしやろな。」

「五六千。たつたそれ切りか。」

次郎は一口にいつてのけた。おてるはあはて、後を追うていつた。

「そのほかに引祝や何か何こかで、もう千圓もいりますかな。」

「安いもんだ。そんな金はちよつこ株が動けば一日で出来るて。」

——遊んでゐるから儲かる——今朝慈善協會の理事のいつた言葉を、次郎はフト思ひ出していやな氣がした。次郎はまた盃を重ねた。

「引かす。引かす。明日ッ切り、俺は光勇を引かすぞッ。」

バ ニ ツ ク

その翌日——次郎は銀行から七千圓の金を引出して懐中した。

「金の威力をためしてやらう。」そんなこゝも次郎の頭をかすめた一つであつた。

店は相かはらず忙しかつた。次郎は晝食のため外出することすらも出来ず。いらく／＼してゐた。何となくその日の相場は殺氣立つて見えた。

「自分の氣があせつてゐるからだらうか。」

こ思ひ返して見たが、汗をふきながら電話を聞いてゐる支配人の様子も、客こ應接してゐる店員の様子にも、皆が皆何となく亢奮してゐる風が見えた。

「さうも可笑しな空氣ですな。支配人の大山はそんなこゝをいつたりした。」

「しかし何んにも材料がないぢやないか。」

「別がないやうですがね。ちよつと、ニューヨークの相場が動きすぎたせいかも知れませんが。」

「それ位の影響なら直ぐに元へ戻つてしまふぢやないか。」

「私もさう思ひますが——何、たいしたこゝはありますまい。」

店の前も何となくザワつてゐるらしかつた。

「けふは少し早く歸らうと思つてゐるんだが——」

「お歸りになつてもよいでせう。」

「別に心配するほどのこゝはないんですからね。」

「それぢや歸らうか。」

その時、店のドアを開けて大崎がヌット入つて來た。

「やあ室伏さん。」

「お、ッ！」

その顔を見るに次郎は、思はずそこへ釘附けのやうに立ちすくんでしまつた。黒のマントを着て、金持らしい風采をした大崎は下駄をぬいで、次郎の前へ上つて來た。

「一體さうしたんです。」

大崎は怪訝な顔をした。次郎はちつと大崎の顔を見つめた。するに急に頭がグラ／＼して來た。ボウツと大崎の顔が幻のやうに薄れて行くのを覺えた。大崎の顔は消えて、それは破れたシャツを着た小野田のおそろしい顔にかはつた。ミ、すぐその顔は消えて、いつか次郎が東京驛前で逢つたシルクハットを被つた、異様な黒眼鏡の男にかはつた。そしてその幻が消えるに、そこに大崎が大きな黒眼鏡をかけてつ、立つてゐる姿を見た。

「黒眼鏡！」次郎は思はず聲高く叫んだ。

「あ、この眼鏡ですか。」大崎は冷やかにニヤリと笑つた。

「眼の中へ火が飛び込んでな。えらい目にあひましたよ。」

しかし次郎はそれには答へず

「今日は少し気分がわるいから、失禮します。」こいひすて、逃げるやうに店を飛び出した。

店先には大崎の自動車が乗りすて、あつた。その中にシヨールに顔を埋めて乗つてゐる光勇の姿が、電光のやうに次郎の眼に映つた。

「光勇！」

光勇は嘲笑つてよそを振り向いた。

「畜生！畜生、畜生ッ」

次郎はポケットの中で札をしわくちやに握り占めた。そしてそのまゝ、自分の自動車に乗つて駒の家へ急がせた、車の中で止度もなく彼は冷水を浴せられたやうに、小さな戦きを感じた。黒眼鏡をかけた大崎の顔ミ、光勇の顔ミが交る／＼目の前にちらつた。それが消えるミ、小野田ミ大崎ミの顔がぐる／＼まはつた。その次には惨たらしい自分の姿がまざまざと現はれた。

「黒眼鏡の出現！」

次郎はぶる／＼と身をふるはして、眼をつむつた。

×

店では大山ミ大崎ミが話し合つてゐた。

「折角これまで御愛顧を願つたんですから。」

大山は一心に止めたけれども、大崎は聴かなかつた。

「ミにかく今日限り私の持ち分を全部賣つて下さい。そしてこれつきりいふ／＼にして貰ひたい。別に理由ミいつて何にもない。たゞ御主人は少し若過ぎるでな。」

×

次郎が駒の家へ驅けつけた。

「まあ室伏さん。お氣の毒。昨夜大崎の旦那はんの方で、話がきまつてしもたんです。」

×

その夜次郎はホテルへかへらなかつた。

その翌日、二日酔いの、重たい頭をか、へて次郎が店へ顔を出した時分、取引所では蜂の集をつ、いたやうに、その立合は大混亂に陥つてゐた。店先を群集は足を宙に浮かせて飛んで走つた。誰も彼も眞蒼になつて狂人のやうに亢奮してゐた。財界空前のパニックが起つたのである。

「御主人ッ。」

次郎がボカンミして店先へ顔を出すミ、支配人の大山が飛び出してその胸にすがりついた。

「大變です。ミう／＼やつて來ました。駄目です。みんな底知れずに下つて行きます。ミても持ちこたへる／＼ミが出来ません。」

大山は顔をビリ／＼けいれんさせながら、悲壯な面持でいつた。

取引所では主要株がぎん／＼下つた。殊にサツカリン株や、染料株が最も大きい打撃を受けた。



次郎の店は、よその店より更に以上の混乱を來した。次郎は眞蒼な顔をして机の前に自失してゐた。支配人や店員がひつきりなしに報告に來るのを、ほんの上の空で聞いてゐた。

「駄目だ。駄目だ。」

大山は一刻一刻、悲壯な面持ちを深めて行つた。

「この調子では店がつぶれてしまふかも知れません。」

大山はそつと次郎の耳にさ、やいたが、次郎はボンヤリしてしまつて、何にもいはなかつた。

×

そこへ大崎菊造がヒョッコリ入つて來た。大崎は人々が神経を失らして、むしろ物凄いやうな顔付きでゐるに引かへてニコニコしてゐた。

「大山さん。おかげで私は助かりましたな。」

大崎は皮肉な苦笑をもらした。

「運のいゝ人はちがひます。」

「昨日手放してけ、この暴落は、まるで神業ですなハツハツハ。」

大崎は人を馬鹿にしたやうに笑つた。

「室伏さん、あんたはだいぶやられたらうな。」

大崎の黒眼鏡は次郎の顔をまともに嘲笑した。次郎は恐ろしいものを見るやうに顔をそむけた。

「ミにかく私の分を勘定して頂戴して歸らう。」

その翌日は更に悲慘であつた。各主要株は底なしの池へ落ちた石のやうに、きん／＼と下つた。あせればあせるほど次郎の店は危機に近づいた。次郎は勇氣を取りかへさうと、自分で電話も聞き客の應待もした。しまひには取引所まで出かけていつたが、餘りのおそろしさに立合を見てゐるこゝが出来なかつた。彼はヨロ／＼と倒れか、つて危く大山にさ、へられ、す／＼と店へ引上げた。

×

「室伏次郎商店」は、もう破産するより外に仕方がなかつた。店員は全部解雇して、大山と次郎の二人だけが店に残つた。

しばらくして「室伏次郎商店」の看板がおろされた。そして支配人の大山の名義で、商賣を立て直さうとしたが、それも甘くないかなかつた。

「たやすく得た金は、またたやすく出てしまふものだ。金はたゞそれが自分の額に汗して得たこゝのみ價值がある。」

次郎はこれまで店員の寝てゐた店の二階に、眠られぬ身體を横たへながら考へた。

「おれはもう一べんやり直さう。おれは新しく生活を始めなければならぬ。」

その時次郎の頭には光勇のこゝもなかつた。大崎のこゝも金のこゝもなかつた。次郎は後事を一切大山にまかせて、悄然として大阪を去つた。

ハワイ島ワイキキの海岸に近いある砂糖會社の耕地。

そこにはたくさんの方働者が働いてゐる。その大半は生れ落ちた故國では幸福を見つけないで来たか、または幸福を失つた人々ばかりである。中には支那人もゐた。白人もゐた。また日本人もゐた。そしてこの「不幸なる人々」は故國を遠く離れたこの島に、彈力のない仕事をしながら朝夕を送つてゐる。

×

牧師スペンサアのさ、やかな教會は、耕地の一隅にあつた。

スペンサア嬢のエレナ嬢のわびしい生活は、これらの「不幸なる人々」のために幾年か前から、この島に始められてゐたのである。朝夕の祈りに耕地の人々の幸福を祈るこゝのみを、日課としてゐたこの牧師親子の一家は、ある人達からは尊敬せられたが、またある人々からは侮蔑せられた。

「天國」も「地獄」もほんの隣り同志であるこゝを、いつも親子は體驗してゐた。それが親子の信仰を更に深めて行くのである。そしてその「天國」を訪れんとする人達のなかに、最も牧師親子を親しんでゐる一人の青年労働者があつた。それが飄然として大阪を立去つた次郎のなれの果てである。

×

次郎はけふも労働の晝休みの一時間を、この牧師親子と語らうとして教會を訪れて来た。大阪を落ちのびて次郎がこゝへ來てから、早くも三年もいふ年月が流れた。

「ほんたうの金は額に汗をしてから——」

さうした信念を得たこゝはいふもの、次郎はうちづく不幸も、わびしい生活に、こゝもすれば捨て鉢氣味になり勝ちであつた。それをいろいろ慰めてくれるのは、すさまじつた人達の多い中で、たゞこのスペンサア親子だけであつた。次郎はスペンサアは熱心に話をうけた。

「しかし私はさうしても人間といふ者は、この運命のきづなから、抜け出すこゝはできない、考へられてなりません。」  
 「それは全く一つの信念です。しかしそれが全部ではありません。運命といふものは實際否定するこゝはできません。」  
 「足らぬが」いふ言葉、それが運命の全部です。運命といふよりはむしろ宿命といふ方が當つてゐるかも知れません。たゞある人が旅行をしようと思つて停車場へ急ぐみちすがら、ブツリと下駄の鼻緒が切れる、そして一つの電車に乗りおくれ次電に乗る、と思ひがけないこゝでその電車が脱線して死ぬ。こんなこゝはいくらでもある。この場合この人はさうしても「鼻緒が切れる」といふこゝによつて死ぬる宿命を持つてゐるんですね。偶然といへば偶然、考へ方によつては、生れるこゝから定つてゐる運命もいへます。」

次郎は大きくうなづいていつた。

「さうです。さうです。そして私は黒眼鏡の出現によつて、不幸といふこゝを豫言せられて來たのです。」  
 「しかし——」スペンサアはまた言葉をうけるのである。

「しかし運命が人間の全部を支配する、こゝ考へるこゝは危険です。これは勿論私が牧師といふ立場を離れての話ですが、運命といふものはさうすることもできない絶對的の偉大なる力である、ミすべての人が考へたなら、人間はみな自暴自棄に陥つてしまふでせう。幸ひに運命といふ大きな力に勝つものがある。それは只一つ「意志」である。こゝいふこゝをもう

「一度考へ直さねばなりません。」

「意志！」

次郎はそんな事は何度も考へたことであつたが、スペインサチの言葉は不思議に力強くその胸をついて行くのを覺えた。

「だから運命を支配するとか、運命を戦ふとかいふ言葉の存在も同時に否定することが出来ません。例へば——」

「あッ、お父さん、大變ですッ」

この時傍で二人の話を聞いてゐたエレナが、突然大きな聲で叫んだ。耕地の方では急に人々が立ち騒ぎ始めた。

×

何に驚いたのか、一頭の牛が暴れ始めた。それを取押へんとした一人の勞働者は、無慘にもその角の先にかゝつて打ち倒れた。

「ワーツ。」こいふ騒ぎはそのためであつた。牛は牛小屋の柵のところで取り押へられた。人々は倒れた勞働者をその小屋へ擔ぎ込んだ。

その勞働者の妻は氣の遠くなるほど驚いてうろくした。それを人々は慰めながら、怪我人を寢臺に寝かして傷口を布で巻いたり、ブドウ酒を飲ませたりした。會社の醫者が間もなく來た。醫者は手ぎはよく傷口を洗つた。

「心配せんでもよい。少し重いには重い、生命は大丈夫つなぎこめる。」

人々はホツとしたが、妻はたゞ泣き沈むばかりであつた。

「心配することはない。わしらが會社に頼んで、この人が寝てゐる間は會社の方で別な方法を考へて貰つて、食ふにこまかくやうなことはせんから。」年長の一人がいつた。

「さうだ。さうだ。それが會社にしてあたり前のことだ。」

みすばらしい小屋の前には、騒ぎを聞きつけてたぐさんの仲間が驅けつけ、ワイ／＼いつてゐた。

「何だ。何を喧ましく騒いでゐるのだ。」

その後ろから太い聲が聞えた。人々はその聲を聞くに、急に話をやめて道を開いた。

黒眼鏡をかけたカナカ人の職工頭が、その間をのそ／＼通つて小屋の中へ入つた。怪我人をめぐつてゐた人達も、職工頭の姿を見るに、サツ／＼その道を開いた。ペコ／＼とお叩頭をするものもゐた。職工頭は怪我人の枕元につゝ、立つた。

「さうした？何、牛にやられたつて？」

彼は一片の憐愍も持ち合はさないその心を表はす、さげ／＼しい眼をギロリと光らせた。

「耕地で働いてゐながら、牛に突かれるなんて、何てヘマな野郎だらう。」

人々はその言葉を聞いて、憎しみの眼を向けたが、何ともいひ出すものはなかつた。

「さうです。働けますかな。」

醫者は首を振つた。

「治つてからでも、さても今までのやうな勞働は出来ません。」

「それでは雇つておくことは出来ません。」

人々はその言葉をきくに動搖した。

「それは餘りだ。」こいふ聲もした。

「働くことの出來ねえものは雇ふことが出来ねえつていふのが、何が餘りだ。手前達は黙つてゐる方が好い。」

カナカ人はデロリミ人達を叫みつけた。人達はデリくミ後へすさつた。

「そんな事はいはないで、さうぞこのまゝ雇つておいて下さい。でないミ私達は明日から食ふことができなくなります。」

妻はカナカ人の前にひざまづいて頼んだが、職工頭は首を振つた。

「大體お前さんの夫さいふのは、日ごろから怠けものだつた。今日まで雇つてあつたのは、會社のお慈悲だ。お前さんが食へやうミ食へまいミ、おれ等の知つたこぢやねえ。」

「そんなことはおつしやらないで、さうぞく。」

「うるさいつ。」

いひすて、職工頭はその小屋から去りかけた。

「待てツ。」

その時、さつきからこの小屋に来てゐた次郎が、ツカくミ人々を押しわけてカナカ人の前へ立つた。

「それはあまりひびすぎるぢやないか。」

「何がひびすぎる？そんなことは貴様らの知つたこぢやねえ。」

彼は黒眼鏡のそこからギユツミ次郎を睨みつけた。

さつきから、怒りのために胸をふるはせてゐながらも、その職工長が黒眼鏡をかけてゐるばかりに、たちろいてゐる次郎は、まこにも黒眼鏡ミ對立して、更に氣が引けて來るのを覺えた。併し彼は一生懸命になつて、それを持ちこたへた。

「いゝやさうぢやない。傷ついたものを、そのまゝに解雇するなんて餘りひびい、それは人道にもこるこんだ。悪逆だ。

神の心に叶はない所業だ。」

人々の間には激昂する氣配が起つた。

「手前は俺に反抗するのか。」カナカ人は次郎に詰め寄つた。

「いゝや僕は君に反抗するのではない。君の不人情に反抗するのだ。人道に悖るこに反對するのだ。」

「人道に悖る？オイ、働かねえものは食へねえいふこだが、なんで人道に外れるのだ。」

「働かないのではない、働けないのだ。」

「同じいんだ。」

「イヤ違ふ。」

「自業自得だ。同じいんだ。」

「違ふ。違ふ。災難だ。運命だ。」

二人は次第に聲を高めて行つた。スベンサアはそれをこめた。

「病人の前で争つてはいけません。ミにかくその話は後にしたらさうです。」

次郎は黙つてうなづいた。職工頭はせ、ラ笑ひを残して去つた。

X

その夜——耕地の一隅に人々は集つた。月光を浴びて次郎が一段高いところにつゝ立つて叫んでゐる。

「我々はその人情を知らぬ職工頭を追ッばらはねばならない。あんな人間の下に使はれてゐては、我々は一刻の間も安心するこは出來ない。我々は會社に對して、あのカナカ人の追放を要求しようではないか。」

「賛成、賛成。」

「やっつけてしまへ。」

人々は両手をあげて賛意を表す。次郎は更に聲をはり上げる。

「それでは明日委員を選んで会社へ談判に行くことにしよう。」

「委員長室伏次郎君。」

そんな聲が群集の一隅に起る。人々は一齊に拍手する。

「それでは不肖ながら私が委員長に就任する。私はこの目的を遂行するために、一身を犠牲にして飽くまで努力する。人々はまた拍手する。」

「もしも、この運動のために犠牲者を出した場合には、私はここ三年間に貯めた二千弗の金を提供する。」

次郎は金の袋を高く差上げる。

「委員長萬歳！」

人々は更に熱狂する。教會の門口では牧師親子が、遠くからこの様子を眺めてゐる。

「エレナ。あの日本人の雄々しい姿を御覧。あの日本人は今日傷ついた他國人のために、戦はうごしてゐるのだ。多くのアメリカ人は餘りに日本人を排斥し過ぎた。それにあの日本人は正義のためなら、他國人のためにも、あんなに雄々しく戦はうごしてゐるのだ。」

X

その翌朝次郎は數人の委員と共に会社の重役に面會した。しかし彼等の要求は容れられなかつた。労働者等は亢奮して一齊に同盟罷業に移つた。会社の重役室では白人の重役が額を集めて協議した。

「只一人の人のためにストライキをやらせては堪らない。あのカナカ人を解雇したらさうだ。二人の重役がいつた。」

「しかし、もしあのカナカ人を解雇したら、今度はカナカ人の方が結束してストライキをするだらう。結局同じことだ。」

「それにあのカナカ人は中々会社のために役立つ人間だ。労働者仲間嫌はれるやうなものでなければ、会社のためになりませんか。あのカナカ人は解雇することはできませんまい。」また別の重役がいつた。

そこへ次郎等がまたやつてきた、最後の回答を聞きに来たのだ。

「何度でも同じことだ。会社は人の出し入れにまで君達の干渉は受けたくない。」

次郎は憤然として退場した。

X

会社は社宅の明け渡しを命じた。人々は家財をまきめて野營をした。女や小供は住みなれた小屋から離れるのを悲しんだ。

X

野營の夜。それから數日後である。人々は早くも戦ひに疲れてゐる。会社は飽くまで強硬な態度を採つて、カナカ人などの労働者を續々雇ひ入れた。同盟罷業の連中は空しくその日を過ごすばかりである。あるテントの中には餓死に迫つた妻子が夫に愚痴をならべて復職を迫つてゐた。ある獨身者のテントでは賭博が行はれてゐた。次郎はテントの間を駆けまはつて奮勵したけれど、最初のときは人々は熱狂してゐなかつた。

X

更に數日後、人々はもう堪へられなくなつて、次郎のテントの前に集つて來た。

「室伏君。もうよい加減にしてやめたらさうだ。年長の一人がいつた。

「結局我等の結末も、あまり會社に對し」は脅威を感じさせないぢやないか。」

「やめやう。復職しよう。」

人々は一齊に口を揃へていつた。

「諸君！もう少時の我慢だ。我々は渴しても盗泉の水を飲まずいふこゝを忘れてはならない。あの人非人の下に働くこゝは、泥棒の下廻りに使はれてゐるやうなものだ、いふこゝを考へてくれ。」

しかし人々は不服であつた。

「もうわれ／＼は飢死しなければならないのだ。そんな理窟はさうでも好い。」

次郎は躍起になつて説いたが、人々はたゞガヤ／＼騒ぐばかりであつた。

X

その時例の職工頭は四五人の伴を連れて、罷業者達のテントを軒別にのぞいて歩いてゐた。

「もう好い加減に我を折つたらさうだ。あんな若僧のいひつけを守つてゐるさひさひ目に逢ふぞ。おれはお前達の飯の鍵を握つてゐるのだ。おれのいふこゝを聞きさへしたら、明日からでも温かい飯が食べられるのだぞ。」

職工頭はそゝのかすやうに、一々説いてまはつた。人々は最初の時のやうに、このカナカ人を追つばらはなかつた。あのテントではお茶を汲んで出したりした。

「何分よろしくお頼みます。」と送つて出た人もあつた。

X

「我々は正義のために戦つてゐるのだ。人道のために争つてゐるのだ。その雄々しい決心を曲げてはならない、もう少時の辛棒だ。」

次郎は壇上に立つて熱心に激勵した。けれども人々は拍手一つしなかつた。嘆息さへもれた。

「何よりも先きに、我々は食はなければならぬのだ。」悲痛な叫びがあげられた。

「さうだ／＼。」

人々は口を揃へて叫んだ。次郎は足を踏み鳴らした。

「あの悲しい死様をした我等の犠牲者のこゝを思ひ出してくれ。」

「しかし彼奴は常から怠けものであつた。」

次郎はまた叫んだ。

「僕は君達のために身體も、そして三年間の汗も提供した。」

「それはたゞわれ／＼を、窮地に導いただけぢやないか。」

「諸君！」

次郎は涙ぐんだ。何かいはうしたが、胸が迫つていはれなかつた。一時の沈黙が人々の間に流れた。

「もうよい加減に我を折つたらさうだ。」

そこへ黒眼鏡の職工頭がその姿を現はした。そして人々を尻目にかけて悠々壇上の上つて來た。次郎は職工頭は壇

上で仁王の如く向ひ合つて立つた。

「おれはお前達の飯の鍵を握つてゐる。おれのいふこゝを聞き、明日から温かい飯を食はしてやる。」

「黙れ！」次郎はカナカ人の腕を掴んだ。

「われ／＼は正義／＼人道のために戦つてゐるのだ。正義／＼人道の敵を斃すまでは飽くまでも戦ふのだ。」

カナカ人は嘲笑つた。

「お前のやうな青二才に何ができる！」

「何をッ。」

次郎はムヅミ職工頭に組みついた。しかし職工頭が身體を一振するに、次郎はベタリ／＼そこへ投げ出されてしまった。

「おれ／＼喧嘩をするつもりか。」

次郎は黒眼鏡を仰ぎ見た。

「いつまでもおそれてゐるな。運命／＼戦つて見ろ！」

そんな／＼が次郎の胸を刺戟した。次郎はまた立上つて職工頭に跳りかゝつた。激しい組打ちが壇上に起つた。しかし人々は二人の激しい争ひを只傍観してゐるだけであつた。誰れ一人次郎に加勢するものもなかつた。次郎は結局組み伏せられた。

「さあ青二才。さうだ！」

次郎は傍観してゐる人々を見た。心細さが身體中を支配した。

「手前のやうな奴は何處かへ消えちまへ。」職工頭は次郎を壇上から蹴落した。誰も介抱して呉れなかつた。

次郎はす／＼／＼立去つた。その後から人々の歡呼の聲が湧き起つた。その聲は次郎を嘲笑してゐるやうに、カナカ人を謳歌してゐるやうにひびいた。次郎はハラ／＼／＼涙をこぼした。

強 盜

耕地を追はれた次郎は、その後しばらくしてホノルルの街にその姿を現はした。彼は空腹／＼疲勞／＼を忍びながら、ホノルルの繁華な街を歩いた。白人の紳士や夫人が通るに、彼はその手を突き出して救ひを求めた。しかし彼等は振りむきもせずに通ら過ぎた。

「彼等は資本家だ、俺は無産階級の手を救ひを求めやう。」

次郎は波止場へ來た。波止場人足が忙しく働いてゐる。彼はヨロヨロ／＼やつて來て恵みを求めたが、誰も相手にしない。

次郎はフト大阪で慈善協會の理事等の寄附を拒絶した／＼を思ひ出した。

「誰も俺を恵むためには働いてゐないのだ。誰も遊んで食つてはゐないのだ。」

次郎は街へ戻つて來てある雜貨店へ來た。

「どうぞ私を雇つて下さい。」

日本人の主人は次郎の姿を見てゐるが

「いままでどこにゐたのだ。」と尋ねた。次郎は答へた。

「いままで耕地にゐました。」

「耕地から來た人は御免だ。」

さういひすつ、主人は入つてしまつた。

彼は自動車屋へ來て運轉手を志願したが、断られてしまつた。

彼は料理屋へ来て、コックにならうとしたが矢張り断られた。

X

次郎はその夜公園のベンチに寢所を求めた。ベンチに腰をおろして彼はいろいろ考へた。「おれはハワイへ来てから、自分自身のために働け、まいふ信條をすて、人のために働いた。人のために三年間の汗の固まりまで提供した。それにその人々はおれを裏切つてしまつた。」

彼は悲憤の涙にくれた。しばらくしてまた考へた。彼は牧師のいつかいつた言葉を思ひ出した。

「應報を豫期して行ふこゝは偽善である！」

彼はまた考へた。

「そんなら悪いこゝをしても、應報を考へないで好いのか。」

次郎はデツミ胸組みをして考へ沈んでゐた。

その時突然次郎の鼻先へ、ピカリ光つたものをつきつけた男があつた。ギョツミ見上げる次郎は更に吃驚した。

黒眼鏡をかけてみすばらしい洋服を着た一人の白人が、ピストルをつきつけてゐるのだ。次郎はその男が耕地のカナカ人かと思つて吃驚したのだ。しかしそれは全く別人であつた。

「ホールド・アップ！」

その白人は底力のある聲で命令した。しかし次郎はかへつて平氣であつた。

「おれに金なんかあるものか！」

強盗は彼のポケットを探したが、何にもないので黙つて立ち去らうとした。次郎は突嗟の間にそのピストルを奪ひ取つ

た。

「ホールド・アップ！」

強盗は吃驚して両手をあげた。次郎は強盗のポケットを探り、銀貨を二三枚取り出したが、またもこの通りポケットへ入れた。

「たつたこれッ切りか。お前も不合せだな。」

次郎はピストルを強盗の手に渡して、又ベンチに腰をおろした。するに強盗はいきなり、次郎の手を固く握りしめた。

「オイ、友達になつてくれ！」

次郎はしばらく強盗の顔をみてゐたが、その手を握り返した。

「何か儲け口でもあるのか。」

強盗はポケットから煙草を取り出して次郎に與へた。次郎はうまさうにそれを吸つた。強盗は次郎はベンチに腰をならべてかけた。空には星がキラ／＼美しく光つてゐるが、公園の夜は眞暗であつた。

「ちよつこ耳を貸せ。」

強盗は次郎の耳に何ごこかをささやいた。

「そんならホテル・エキセルシオールに泊つてゐる、羽田ツテ富豪を襲ふこゝいふのだな。」

「さうだ。彼奴は貿易會社の社長だ、うん金を持つてゐる。もしやりそこなつたら一思ひにやつつけてしまへばよいのだ。」

「……………」



「ヤッつけるか。」

「よし！ヤッつけやう。」

「そんなら今夜十二時にホテルの裏門で逢はう。」

強盗はそのまゝ、そこを立去つた。

X

公園は深夜のやうに淋しかつたが、街の方はまだ明るかつた。空腹を抱へながら次郎はヨロ／＼と街を歩くうち、いつかホテル・エキセルシヨールの前へ来た。窓からは明るい燈がもれ、賑やかな音楽が聞えて来る。そこはいかにも天國のやうに楽しさうである。次郎は知らず／＼ホテルの門をくゞつて玄關へ来た。

玄關には着飾つた白人の男女が楽しさうに話してゐるのが見えた。そこには嘆息もない、悲嘆もない。只笑ひ聲があるばかりである。さうした明るさゝ華やかさゝは、大阪以來三年こいふもの、次郎は殆んど忘れてゐた。

次郎は何ものかに引きずられるやうに、フラ／＼と玄關を上つてしまつた。上がつてしまつてから、ハツ／＼氣がついたが、もうさうするこゝもできなかつた。ちやうど賑やかな音楽も、衣摺れの音も、そして香高い香氣のもれる突當りの舞踏室から、いま一段のダンスがすんだと見え、パチ／＼と華やかな拍手が起つて、人々の出て来る氣配がした。

次郎は逃げるやうに、その反對の方向へ姿をかくした。そして足音を忍んで階段を上つて来た。そこは兩側に部屋がならんでゐる廊下であつた。何の氣もなく次郎がフト仰向くと、そこに「八十八號室」といふ番號札がかゝつてゐるのが見えた。

「八十八號室！」

そこは強盗が話した羽田の部屋である。次郎はその札を見るに、始めて自分が何しにこゝへやつて来たか、こゝにいふことを思ひ出してブル／＼と身震した。

「俺はいま、こゝへ強盗に入つたのだつた。」

次郎はそこへ立ちすくんでしまつた。

「強盗？」

公園であの強盗に唆かされて、約束はしたものの、さすがに今更わが身が顧みられた。それは餘りにひびき變りやうであつた。

「俺にはこゝでも、そんなおそろしいこゝはできない。」

次郎は首を振つてそこから足を返へさうとした。下では食堂が開かれたと見えて、皿を運ぶボーイ達のざわめきが聞えて来た。する／＼と甘い料理の匂ひや、香りの高い酒の匂ひが、そこまで漂つて来た。その匂ひは長い間、さうしたもので遠ざかつてゐた次郎の食慾を無暗矢鱈に刺戟した。

「けれど三日おれは食はない。」

次郎は舌打らした。グウツ／＼腹が鳴つた。

「彼奴等は、餓えてゐる人間を目の前において、一本何十圓もする酒を飲み、一皿何圓といふ料理を鱈腹つめ込むのだ。」その場面を想像するに、急に氣狂じみた反感が次郎の胸に湧いた。彼は急に八十八號室の前へ戻つて来た。そしてソツ／＼と腰をかゞめて鍵穴から部屋の中をのぞいた。その時いつの間に来たのか、一人のボーイが次郎の後ろに立つてゐた。

「もし／＼羽田さんに御用なら、いま舞踏室の方に入られますか？」

次郎はギョツミして振向いた。

X

廣い舞踏室の一隅には舞臺がつしらへてあつた。食堂から歸つた人々が設けのテーブルにつくミ、輕妙な奏樂につれて、スル／＼ミカーテンがあがつた。人々は一齊に拍手した。

舞臺には二十人近くの少女達がふくよかなその肉體を、惜氣もなく半ばさらけ出して、豐滿な脚をあげ、なよやかな腕をさしのべて、そこに華やかなダンスが始められた。

テーブルにはボーイ達がコーヒーのカップやコクテルのカップを運んで來た。

「中々よく踊りますな。」

「ほんまうに愉快ですわ。」

あるテーブルでは貴夫人ミ紳士ミがコーヒーをのんでゐた。

「さうだい左から三番目の女は？ 好い女ぢやないか。」

「ふん、僕はあんな豚のやうに肥えたのはきらひだ。右から二番目の方がいゝね。」

若い男同士の客は小聲に話した。

「さう乗り出さなくてもいゝぢやありませんか。」

ある夫婦もの、テーブルでは、その妻が夫のツボンを引張つて、しかめ面をしたりした。

羽田ミその娘の綾子も、一つのテーブルによつてダンスを見てゐた。綾子の洋装だけが、無細工な日本婦人の中に際立つて、美しくあたりの若もの、眼をひいた。

「あんなダンサアよりも、あの娘さんの方が餘程美人だぜ。」先の若い紳士が耳打ちした。

「貿易會社の社長の娘だミよ。嫁入り前で、目下配偶者を物色中ださうだぜ。一つ候補者の名乗りをあげたらさうだい。」

「ミてもわれ／＼植民地は——」

二人は聲をあげて笑つた。

X

次郎はそこへ案内されて來た。明るさミ華やかさミを取り集めたこの廣間には、餘りにつり合はぬ姿であつた。

「かうぞ、ちんちん。」

ボーイは次郎を羽田のテーブル近くへ導いた。

「何かこの御方が御用ださうですが——」ボーイは羽田にいつた。

人々は突然のこのみすばらしい闖入者をデロ／＼ミ見た。そのみすばらしい男が、あの美しい娘を持つ富豪に近づきで、あるミが、一つの奇蹟のやうに考へられた。あたりのテーブルでは急に、このミについて、いろ／＼の當推量や、知つたか振りの噂が始められた。

「私が羽田ですが——」

いひかけて羽田はフトあたりの人々の視線が悉く、こゝに集つてゐるのに氣附くミ、急に立上つた。

「何か御用なら、あちらで伺ひませう。」

そして羽田親子ミ、氣拔けたやうな顔をした次郎は、人々の不審氣な眼に送られながら、舞踏室を出て、二階の八十八號室へ來た。中へ入るミ、そこは驚くばかり贅澤な調度で飾られた立派な部屋である。

「何か急な御用なさうですが。」  
 羽田は次郎にイスをすゝめながら聞いた。次郎はさつき、八十八號室の前でボーイに驚かされてから、まるで夢をみてゐるもの、やうに、ボンヤリしてしまつた。

無意識に「羽田さんに用がある。」ミボーイに答へたために、ボーイは無茶苦茶に羽田のミころへ次郎をつれて來たのだ。しかし羽田に何の用があらう。——次郎は操り人形のやうに、ボーイのいふ通り、フラ／＼歩いたり立ち上つたりしてゐるのだつた。

「一體さうしたさいふのです。」

ぢれつたさうに羽田は重ねて聞いた。傍ではこの不思議な訪問者を驚きの眼で見ながら、不安氣に綾子が立つてゐた。フト次郎はテーブルの上に乗つてゐる置時計に氣がついた。時計の針は、ちやうど今十一時二十分を示してゐた。するミ次郎の頭には、電光のやうに、公園であの強盜のいつた言葉がハッキリ蘇つて來た。

「今夜十二時に、ホテルの裏門であらう！」

次郎は夢から醒めたやうに、急にわれに返つた。そしてキョロ／＼あたりを見まはすミ、そこには、これまで一度も見たことのない、老紳士ミ令嬢ミが立つてゐる姿が見えた。

「一體おれはさうしたのだ！」

次郎はあたりがつか／＼、立つてもゐてもゐられなくなつた。

「おれは何のためにこゝへ來た？」

次郎が急にそは／＼し始めたので、羽田はますます不安を高めた。

「一體あなたの御用さいふのは、早く仰しやつて下さい。御遠慮はいりませんから。」

「私の用？」

「ボーイに聞けば、非常に重大な事件が起るから、さいふこゝでしたが——」

「案内も待たず部屋へいらしたさうで、餘程急な御用のやうに聞きましたか——」

次郎は頭を抱へた。絶體絶命であつた。その時、十一時三十分をしらせる時計のベルが一つ、「チーン！」ミすみ切つたひびきを打つた。そのひびきは次郎の頭を錐で刺すやうにひびいた。次郎は思はず口を切つた。

「今晚の十二時に——」

「今晚の十二時に。」

羽田も鸚鵡返しにいつた。そしてあなたの生命を奪はうミしてゐます。私はそれを知らせに來たの

です。」  
 次郎は囁語のやうにペラ／＼喋つた。いひ終るミ、フラ／＼ミ傍のソファに尻を落した。

「エッ！強盜か？」

羽田親子は同時に叫んだ。

ホテルは急に大騒ぎミなつた。綾子は早速警察へ電話をかけた。ホテルの電燈は少しを残して消されてしまつた。泊り客は部屋へ入つて固く錠を卸し、ピストルを手握つて、ベッドの上に洋服を着たまゝ、寝た。警官が自動車で駆けつけてホテルの裏表に身をひそめた。これだけの用意は、またたく間にミミのへられた。

ホテルの大時計は、やがて高らかに空にひびかせてチン／＼三十二時を打った。人々は息をひそめた。トタン！裏門のあたりで、つゞけさまにビストルのひびきが聞えた。

「泥棒！」

バタ／＼三人の立ち騒ぐ気配がした。人々はまた息をひそめた。

まもなくバツミホテル全体の灯がついた。

「まあよかつた。」

泊り客はゾロ／＼三部屋から顔を出して、正門の警察自動車に目をそ、いだ。次郎も羽田の部屋で、さつきから落つかぬ時を待つてゐた。氣つけに飲んだブドウ酒のために、や、意識がハッキリして來てゐるが、まだ何もなく、胸さわぎがやまなかつた。

「御覽、お父さん、泥棒が——」

羽田親子も、窓から首をのびして自動車を見た。

「見給へ！」

次郎も首を伸ばして下を見た。四五人の警官に兩側から腕を押へられて、あの強盗が、いま自動車に乗る處であつた。次郎が首をつき出すと同時に、その強盗はヒヨイヒヨいふりむいて後ろを見上げた。次郎はまきもにその黒眼鏡の顔を見た。ギロリと黒眼鏡の下の眼は、次郎の顔を睨みつけてゐるやうに見えた。

「裏切り者！資本家の犬！」

その強盗の顔は次郎を睨みつけてさう叫んだ。

「裏切り者！おれはあの友達を裏切つたのか！」

それを見るに次郎はヨロ／＼とそこへ倒れた。

歸

朝

次郎が倒れたのを見て、羽田親子は驚いてボーイを呼んだ。

「ひきく亢奮してゐるらしい。」

さういつて羽田はブドウ酒を飲ませたり、持ち合せの薬を飲ませたりした。ホテルの醫者が診察した。

「二三日食事をしてゐないところへ、こんな事件でひきく亢奮したのですね。安静にして寝かしておけば大丈夫です。」

その翌朝、次郎は驚くばかり、贅澤なベッドに眼をさました。傍には、美しい娘の綾子がイスに腰をかけて新聞を読んでゐた。窓からは明るい朝の太陽が、やかにさし込んでゐた。次郎は一旦あけた眼をまた閉ちて、きのふの出來事を回想した。

「俺は強盗を裏切つた。しかし強盗なんていふものに味方する法はない。それでよいのだ。それが當り前なのだ。」

「四五日吸はなかつた煙草、それを恵んで呉れた彼の好意、何もなく親しみのあつた彼の言葉、さうしたものが次郎にホテルへ忍ぶこゝを同意させたのだつた。いま次郎は、それを思ひ出すまいとした。

「俺はまだ法律上の罪人になるほぎ、落ちぶれてはゐない。」  
「オヤ、おめざめ？」

新聞を読んでいた綾子は、次郎の目を覺ましてゐるのに氣附いて、聲をかけた。

次郎はベッドの上に起き直つて綾子を見た。綾子はニッコリ笑つた。何の苦勞も知らぬ、純真な美しい顔であつた。

「お早やうございます。」

綾子はスリッパを揃へた。

「もうすっかり良くなりましたか？」

彼女は小首を傾けて、次郎の顔をのぞき込んだ。そのあざけのない様子が更に次郎の心を軽くした。

「エ、お蔭さまでもうすっかり恢復しました。いろ／＼御面倒をかけてすみません。」

次郎はカーテンを引いて、ベッドの上で洋服を着替へた。

「ヤア、お早う。」

羽田が部屋へ入つて來た。

「さうです、もうすっかり良くなりましたか？」

「おかげさまで。」

さうして、次郎は羽田親子と共に、朝の食卓についた。

頬も落ちさうなオートミール、ハムエキス、温かいコーヒー、熟した果物、絶えて久しい食事であつた。次郎はむさぼ

るやうに、それを食つた。

部屋へ歸つてから、羽田は改めて次郎に挨拶をした。

「昨夜はいろ／＼有難う。お禮の申上げやうもない次第です。あなたはいはゞ私達の命の恩人だ。私達はさうしてもい

の御恩返しをしなければならぬ、今朝も娘を話してゐたのです。」

次郎は頭を下げて、黙つてそれを聞いてゐた。

「それにしても、さうしてあなたは強盗の來るこゝを、前から知つてゐたのですか？」

その言葉を聞くに、次郎は思はずギクツミした。胸を打たれた。

「それが不思議だ、ホテルの人達も話し合つてゐたのです。」

「皆さういつてゐますか。」

次郎は周章で聞いた。

「大變な評判ですよ。」

「それは……………」

次郎は突嗟の間に辯解しやうとしたが、甘い言葉が見附からなかつたので、そのまゝ口をつぐんだ。

「まるで強盗を打合せして來た人のやうに、ハッキリそれを知つてゐたのが全く不思議です。」

「強盗を打合せ？」

次郎はスツクミ立上つた。羽田は吃驚した。

「誰が、誰がそんなことを……………」

次郎は息をはずませた。

「イヤ、これは失禮しました。そんな失禮なことを誰がいひませう、まあ落ちついて下さい。これはほんの戯談に過ぎないのでから、怒つて貰つては困ります。」

羽田は漸く次郎をまたソファに腰かけさせた。次郎は落ちつかぬ氣持を無理に押へて、そこにすわつた。

「それでは、さうして僕がそれを知つたかをお話しいたしませう。」

「私はこの町外れのある鍛冶屋に雇はれてゐた者です。」

次郎はポツ／＼語り始めた。それは全く口から出まかせの嘘に過ぎなかつたが、絶體絶命になつた場合、彼はさうするより仕方がなかつた。彼の頭の中では自責の念を羞恥し、そして見得る本能が、ごつちやになつて戦かつた。次郎は無暗矢鱈に喋つた。話の續きなご、頭でまきめてゐる暇もなく話したが、ひそりてにその話はつゞけられた。そしてその割に、その話は辻褄が合つてゐた。

「昨日の夕方です。私は夕食をする前に、急がれてゐる仕事を片付けてしまはうと、一心になつて、アンビルをたいてゐるうちに、フト鐵槌で指を傷つけてしまつたのです。」

次郎は指先を見た、カナカ人争つたときに何處で打つたのか、踏まれたのか、左の中指が、赤くはれ上つてゐた。

「この通りです。」

羽田親子はその指を見た。

「そしてそれから？」

「私は思はず鐵槌を投げ出して、その指を口の中へ突込んで、痛みを止めやうとしたのです。するに、いままで、鐵槌の響で聞えなかつたが、私の仕事場の窓のすぐ外で、しきりに人の争ふ氣配がするのです。しかもそれは、何もなく人をは

ばかつてゐるやうに、小聲で話されてゐたのです。私はフトその聲に氣附く、何もなく興味をひかされました。人の話を盗み聞くくらの愉快なことは、ある私の友達がいつたことがありましたが、とにかく本能的に私はその話が聞きたくまりました。そして指の痛みも忘れてソツミのび上つて窓ガラスの外を見たのです。私の店ももう町外れですから、すぐ前は廣いあき地です。そして夕方になるに、あまり人ごほりもないところですが、その上、仕事場のところは、外から見ると、まるで汚い物置小屋しか見えませんから、その争つてゐる人達も、中から人が聞いてゐるなごほりは想像もしなかつたのでせう、一生懸命に口論してゐるのが、ボンヤリ、スリ硝子をこぼして見えました。」

次郎はいつの間にか、その光景をほんとうに自分が見て来たやうにさへ感じて來るのを覺えた。

綾子は面白い探偵物語りでも聞くやうに、穴のあくほき、次郎の顔を見つめながら耳を傾けた。

羽田も葉巻をくゆらしながら、時々、「ふん」「ふん」を合槌さへ打つて聞きほれてゐた。

「始めの間は何のこゝみだか、見當が付きませんがフトそのうちに、「殺してしまへば判りつこはないぢやないか。」といふ聲が聞えました。私は思はず、ソツミして首を縮めました。」

羽田親子はその時思はず顔を見合せた。

「これはキット恐ろしい相談に違ひない、怖いもの見たさに、小さい身ぶるひさへ感じながらも、なほその話を聞いてゐるに、先の一言があまり大きすぎたので、片一方が、それを制した見えて、その後は急に小聲になつて、話は聞ききれなくなりましたが、時々エキセルシオールか、羽田ミかいふ言葉が聞えるのです。そして結局、前後の話を綜合して見るに、二人の白人が、その夜の十二時にエキセルシオールに泊つてゐる羽田ミいふ富豪を襲ふ相談をしてゐる、そして一人の方は、手荒なこゝみせず、夕方から泊り客に化けて入り込んで、更けてからソツミその部屋へ忍び込んだらよい

こいつてゐるが、他の一人は、ホテルのものに顔が知られてゐるから、怪しまれる。そんなこゝよりも手ッ取早く、裏門から忍び込んで、ビストルで脅して仕舞ふ方がよい、まかり違へば殺してしまふ、ミカんでゐる、それで二人がいひ争つてゐるのだ、こいふこゝが判りました。」

次郎はそこまで話してホッとし息ついた。羽田は大きくうなづいていつた。

「それであなたは、あんなにハッキリミ事件を知つてゐられるのですね。」

「さうです。たゞ違つてゐるのは、二人だと思つたのが、一人に減つただけです。恐らく一人の方は、友達を裏切つて

——

いひかけて次郎は周章で、いひ直した。

「イヤ何かの都合で途中から逃げ出したもたせう。」

「イヤ有難う、有難う、よく判りました。何れにしても、何ミもお禮のいひやうがない。」

羽田はまた次郎の手を握つた。

「それにしてもいひ憎い話だが。」

羽田は口調を改めて切り出した。

「お若いに似ず、あなたは何處ミなく、しつかりしてゐらつしやるやうに見受けられる。それに今お話を聞くミ、鍛冶屋の雇人のやうに承つたが、始めから、さうミは受取れない。何か事業に失敗でもしてこの土地へ來られたものミ私は推量するが、さうです？」

次郎はデツミ羽田の顔を見た。

「實は私は大阪で大きな失敗をやつて來たものです。」

そこで次郎は一ミ通りの成り行きを話した。

「容易に得た金は、また容易に失ふ。額に汗をして得た金こそ最も尊い、ミさういふ信念を得たのでまたもこの労働者からやり直さうミして、こちらへ渡つて來たのです。」

次郎は熱心に話した。それはごまかしミ違つて本當の彼の心持であつた。話しには自然に熱がこもつていつた。

「そして人のために働きました。それに人々は私を裏切りました。私はまた一つの信念の土台をくつがへされたやうな氣持がしてならないのです。」

「イヤ、御尤もです。」

羽田は本當に感心して手を打つた。その顔にはわが意を得たこいふやうな、晴やかな表情が浮かんだ。

「失禮ながら、その汚い身なりにか、はらず、私は始めから只のお方ではないミ知つてゐました、全くあなたは立派な方です。自分の信念を飽くまで貫かうミする勇士です。」

次郎はさういはれるミ、何だか自分自身でも傑いやうに思はれて來た。

「それだけでなく私は、あなたに御恩返しをしなければならぬ。さうです、さういふ御經歷の方なら、いつまでもこんなミころにゐても仕方がないでせう。いつそ日本へ歸られては、そして御差支へなければ、私の會社で働いていただけばこんな結構なこゝはないミ、思ふんですが——。」

X

次郎は晝すぎになつてから羽田のこゝを辭してホテルを出た。そしてホノルルの街へ來た。羽田から仕度金ミして、こゝ

の二三年手にした。こもない金を受け取つたので、それで洋服を新調し、その他の身仕度をミ、のへたのであつた。

「また幸福がおれのミころへ蘇へつて来たやうだな。」

次郎は氣も軽くなつて、ひきりに、ほ、ふまれて來るのであつた。

X

やがて羽田親子ミ次郎ミが日本へ向ふ日が來た。

ホテルでは、滞在中知合になつた人々が盛大な送別會を開いた。始めのほぎ輕蔑の眼で迎へた人達も、身なりが備はつてからの次郎が、一段ミ立派な紳士ミしての態度を備へてゐるのを見て、却つて尊敬するやうになつてゐた。

船の上から次郎はホノルルの街を眺めた。

「俺は三年もハワイにゐて、ハワイを好いミころだ、ミ思つたのは今日が始めてだ。」

そんな感慨がその胸に湧いた。次郎ミ並んで美くしい綾子が立つてゐた。

「何だか残り惜しい氣持ちがいたしますわね。」

二人は顔を見合せて笑つた。

「しかし早く日本へ歸りたいミも思ふでせう。」

「え、それもさうですわ。だけき、——何だか懐かしいミころのやうに思はれますのよ。」

綾子はさういつて媚のある眼で次郎の顔を見上げた。

「さうですかね。僕は苦しんでばかりゐたせいか、餘りハワイには好感は持てません。」

結 婚

間もなく次郎の姿は再び東京の町に見られた。

青雲の志を抱いて遙かに故郷から辿つて來たミきの東京ミ、今齡三十を越して、短い間ながらも、いろ／＼の世相を見て來た後に、再び辿りついた東京ミは、次郎の心持が變つてゐるミ同じやうに、その街々の一角々々すが、悉く變つてゐた。

あの恐ろしい大震災のあつたのは、次郎がハワイへ行つてから間もなく後の出來事であつた。次郎は横濱へ着いて始めて、その變りやうを見て、あまりに激しいのに驚かされた。東京へ來てからはますます驚いた。

「これがあの時の東京か！」

次郎は汽車の窓から東京の街を眺めて、呆然とした。こもであつた。

X

羽田貿易株式會社は復興に忙しい東京の銀座近くにあつた。バラック建ての銀座通りを、次郎は毎日會社へ通つた。

X

大阪の北濱で鍛へた腕は、間もなく次郎を支配人の地位に昇進させた。三十そこ／＼の若手が、この大會社の支配人になつたこもは、同業者仲間での評判ミなつた。それほぎ羽田は次郎を信頼してゐた。次郎は支配人室にをさまり返つて、毎日忙しい事務を見た。北濱時代の得意さが彼のミころへ蘇へつて來た。

「今度は投機ではない。」



次郎は着實に金を儲けた。そして馬鹿な遊びをするやうなこどももなく、おみなしく朝夕を送った。しかし、次郎は何もはなしに物足らなかつた。

「金か、地位か。」

さうでないことはすぐ判つた。

「何故だらう？」

次郎は少し暇になるに、さうした心の空虚を感じないではゐられなかつた。

X

或日次郎が外出から歸つて来るに、支配人室に立派な花束が飾られてゐた。次郎は不思議に思つて、事務員を呼んだ。

「この花束は誰が持つて來たのだい？」

「これ？支配人が御注文なすつたんぢやないのですか。」

「僕が？い、や知らない。」

「さうですか。私はさうだまばかり思つてゐましたんですが。」

「一體誰が——」

「銀座の花屋からださうです。こちらの支配人へおまげしてくれ、さいつて持つて來たのです。誰が注文したと聞きま  
すに、支配人がよく知つてゐらつしやる、さいつ返事だつたので——」

「僕が？可笑しいな、まあよろしい。」

次郎は花束を手にとつて見たけれど、誰からも、贈り主の名前は見當らなかつた。あれか、これか考へて見たが、

このごろの次郎には花束を送つて來るやうな心當りはなかつた。

「そのうちにわかるだらう。」

さう思つて次郎は花束をテーブルのそばに飾つた。事務室にはふさはしくないほぎ、美事な花であつた。事務を見ながら、次郎は時々花束に氣を取られた。そして何にもなしに、心のさきめきを感じた。

「俺の心が空虚なのは、やつぱりこのごろ、花やかな方面から遠ざかりすぎてゐるせいかも知れない、あまり周囲が殺風景すぎるかも知れない。」

次郎はフトそんなことを考へた。そこへまたさつきの事務員が入つて來た。

「社長のお嬢さんがおいでになりました。」

「お嬢さんが？」

「支配人にお目にかゝりたいさいつてゐらつしやいます。」

「僕にあひたい？社長室にゐらつしやるのかい。」

「はあ今は社長室です、しかしこちらへおいでになるさうです。」

「こちらへ？いや僕が行かう。」

次郎はイスから立上つた。その時綾子がドアを開けて入つて來た。

「お忙しい中お伺ひして、お邪魔ではないでせうか。」

「い、えさうぞ、決して。」次郎はイスをすゝめた。

「お茶を。」

事務員は部屋を出ていった。

「ほんまうにい、んですか。」

「え、さうぞ、さうせいま遊んでるんですから。」

二人は圓テーブルを挟んで腰を卸した。

「このごろは少し忙しいものですからツイ御無沙汰して、お宅へ伺はないでます、さうぞあしからず。」

「い、えさういたしました。」

東京へ歸つてから、何度も逢つて心安い仲ではあつたけれど、會社へ綾子が次郎を尋ねて來たのは始めてであつた。場所が違つてゐるので、二人とも何もなく落つかぬ氣持で自然に座が白けた。

「まあきれいな花ですこし。」

綾子はフト花束に氣附いて、さつきから杜絶えてゐた話の糸口を見つけた。

「あなたの贈りもの？」

綾子はニコニコ笑つてさぐるやうに次郎の顔を見た。次郎はさきまぎして答へた。

「誰だか判らないのですよ。いまも事務員と話してゐたのです、銀座の花屋から買って來たんださうですが、贈り主が判らないで妙ださいつてゐたさうです。」

「贈り主が判らないんですつて？あなたもするぶんな方ね。」

「それでも丸つ切り見當がつかないんですもの。」

「花束を送つて來るんだつたら、きつミ御婦人の方でせう？」

「さあ、それがサツパリ——。」

「少しも御心當りがないんですつて？」

「ほんまうですよ、お嬢さん。」

「まあ……ホ、ホ、」

綾子は袂で口を被つて笑つた。

「決して隠してゐるんぢやないんですから。」

そんなこゝから二人の氣持は急にルーズになつて行つた。

「あなたは判らなくつても、妾、誰が贈つたかよく存じてをりますわ。」

「エッ！あなたが知つてゐる？そんなこゝがあるもんですか。」

「い、え知つてゐます。妾よくよく知つてゐます。しかも、それは妾一人しきや知らないある御婦人からの贈りものなんですよ。」

「あなた、けが知つてゐる婦人？婦人？」

次郎は首を傾けて考へたがわからなかつた。

「わかりません、一體それは誰なんです。」

次郎は眞面目な顔をして聞いた。

「それはねえ。」

いひかけて綾子はフツミ笑ふのをやめた。何きはなしに羞しさうに羞しうつむいた。

「冗談でせう。あなただつて知らないんでせう。」

「い、え知つてゐます。」

綾子は媚のある眼を次郎の顔にそ、ぎながら小聲で答へた。

「その花を贈つたのは、實は妾なんですの。」

「え、あなたが——。」

綾子は急に赭くなつて、袂で顔をかくした。次郎も思はず頬を染めた。

「失禮だと思ひましたけれど、今日こちらへ伺ふ途中、餘りきれいだだから、買つて来たのです。そしてあなたを吃驚させてあげたのよ。」

綾子はさういつてニツコリ笑つた。

「さうですか、それは有難う。」

次郎も笑顔でそれに答へたが、それつ切り、後の言葉はつゞかなかつた。しばらく二人は無言であつた。

「それから父が申してゐましたが——。」

しばらくつて綾子がやうやく口を切つた。

「次ぎの日曜日に、宅の方へお遊びに來てはいたゞけないでせうか。」

X

次ぎの日曜日。次郎は新調の洋服を着て羽田の邸へ行つた。羽田は機嫌よく次郎を迎へた。わけて綾子は著るしく着飾つて、いつもより更に美しいか、やかな顔をして出迎へた。

「別に用ツてないんだが、晝めしても一しよにやらうと思つて。」

羽田と次郎は應接間で、仕度の出來るまで話し合つた。

「ミ、ころでけふは一つ改まつて君に頼みがあるんだが——」

四方山の話しの末、羽田は急に言葉を改めた。

「實は私の娘も、もう年頃でな。誰か相當の配偶者を迎へなければならぬ。こゝになつてゐるんだが、誰れ彼れといふより、氣心のよく解つた方が好いと思つてな。さうだらう。嫌ひでなければ、君一つ綾子を妻に持つてはくれないだらうか。」

「お嬢さんを私に——」

次郎は吃驚して目をみはつた。

「さうだ。まだお轉婆だけれど、あれでなか／＼しつかりしてゐる。ミ、まあ親の慾目かも知れんが、わたしはさう見てゐるのだ。」

「身にあまつた幸福だと思ひますけれど——」

次郎は思ひがけないこゝだつたので、ちよつと返答に困つた。

「あまり突然ですから——」

突然でも好いちやないか。君さへ承知なら、僕の方は萬事仕度が出來てゐるのだから。さうだ。娘は嫌ひかね。」

「お嬢さんをさういひましたして——」

「でなければ貰つてくれ給へ。」

「しかし餘り——」

「好き、好き。君だつて素からの使用人ぢやなし、以前は一流の商人にして、大阪では相當羽振りを利かしてゐた人ぢやないか。」

「しかし——」

「まあ、好い。僕にまかせてくれ給へ。決して不足のあるやうなことは、しやしないから。」

羽田は一人きみにきめて、

まあこの話はこれでよい。もう晝だから——」

さういつてボン／＼と手を叩いた。女中が出て来た。

「用意は？」

「はい、ミニのつてをります。」

「それでは。」

そして次郎と羽田と綾子の三人は、一つの食卓をかこんで晝食を共にした。綾子はもう、その話を知つてゐるを見えて、何きはなしに、そわ／＼してゐた。その様子はすぐに次郎にそれを知れた。次郎も何もなく、氣おくれを感じて、いつものやうに、氣輕に羽田の話につき合ふことができなかった。

食事の間次郎はいろいろと考へた。自分は今は立派な社員にして、相當の待遇を受けてゐる。もつと以前は大阪の株式店にして、數萬の富を自由にしたことがある。綾子の夫にして、決して見劣りのするものではない。

しかし——。次郎はまた考へた。自分はハワイでは、砂糖會社の一職工に過ぎなかつた。そして羽田と知り合ひになつた動機は？

「強盗！」次郎はそこへ想到するに、身ふるひした。

「俺は強盗を裏切つて、今日の地位を得たのだつた。」

俺はあの時、強盗の仕事を手傳ひに行つたのだつた、しかも無意識のうちにその友達に裏切りしたのだつた。そして知らぬ間に自分は羽田の恩人となつてゐた。羽田は何にも知らない。そしてその最愛の娘を、そのおそろしい強盗の片割れに與へやうしてゐるのだ。俺は友達を欺き、羽田を欺き、そしていままた、何にも知らぬ純眞無垢の女を欺かうしてゐる。

「何といふおそろしい人間だ！」

そこへ想到するに、次郎は立つてもゐられなかつた。食事がすんだら、早速、羽田に斷らうと決心した。食事がすんだ。

「さつきの話ですが。」

次郎は待ちかねて話しかけたが、羽田は手を振つて

「まあその話は後でまた……ぜひ二時までに行かねばならないところがあるから。ちよつと僕は失敬する。夕方まで綾子とゆつくり話しながら、待つてゐて呉れ給へ。」

さういひすて、そゝくささ出て行つてしまつた。

X

「お庭へいらつしやいな。」

次郎は綾子に誘はれて庭へ出た。廣い庭園には小さな池があつた。池には石橋がか、つてゐた。二人は橋の上に並んで

立つた。綾子は橋の上に踞つて、水面に手を伸した。

「そんなこみをなさるこ、落ちますよ。」

「落ちたつて好いわ。」

「危いぢやありませんか。」

「妾なんか池へでも陥こつて死んぢまつた方がいいんですもの。」

「何故そんなこみを仰しやるんです。」

「だつて——」綾子は次郎を見上げた。

「妾、さびしいんですもの。」

「あなたが淋しい？何故です。あなたは何不自由なく暮してゐながら、そして限りないお父さんの愛を獨占してゐながらそれでもまだ淋しいといふんですか。」

「お父さんは妾を愛して呉れます。そして妾は何の不自由もありません。それでも妾、何もなく物足りないんですもの。」

「親の愛だけでは満足できないのですか。」

「だつて——」

綾子は眼を落した。睫毛には涙の露が宿つた。

「あなた、お父さんから何か聞かなかつて？」

「僕ですか。——聞きました。お嬢さんミ結婚しろ、ミ仰しやるのです。」

綾子は赭くなつた。

「それであなたは——」

彼女はかすかに聲をふるはせながら聞いた。

「僕はお断りしやうと思つてゐるのです。」

「エツ。断る？」

綾子は立ちあがつた。そしてヂツミ次郎を見つめた。涙が眼に一パイになつてゐた。

「お嬢さん、わるく思はないで下さい。僕は決して外に何の理由もないのです。たゞ僕は、餘りに、勿體な過ぎるこ考へたからなんです。」

綾子は袂を口にくはへながら歩き出した。次郎もその後へつゝいた。

「僕はお父さんの御厚意に餘り甘へてはなりません。」

二人は美しい花の咲いてゐる温室の前へ來た。

「勿體ないつて、あなたもするぶん舊式なこみを仰しやるのね。そんな薄弱な理由で、結婚を断るつていふ法はないと思ふわ。」

「しかし——。」

「次郎さん。妾がおいやでなかつたら、さうぞもつこ考へて下さい。この話は妾から父に願つたんですから。」

「あなたから？」

綾子は差しうつむいた。美しい襟足が次郎の眼の下に見えた。

「さうですか。」

次郎は、断らうとした決心がだん／＼鈍つて来るのを覺えた。  
 温室の花が一鉢、そこへ出されてあつた。綾子はその花をつみ取つて次郎の胸にさした。  
 「この花、あなた覺えてゐる？」

次郎は花を見たが、思ひ出せなかつた。

「知りません。大體かうしたものは趣味がないんですから。」

「趣味がなくなつたつて——。これはハワイに年中咲いてゐる花なんです。」

「ハワイに？」

「私、あなたと始めてお會ひしたところだと思ふに、何もなくハワイが懐かされますわ。」

「あのハワイが？」

「私、あなたの雄々しいお話をうかゞつた時、本當に心からあなたを尊敬しましたわ。」

「私の雄々しい話？でそんな話をしました。」

「まあ！あなた忘れてゐらつしやるの。エキセルシヨールの八十八號室で——。」

「八十八號室！」

次郎はまた嫌な記憶を呼び起した。

「耕地の人達のために戦はれたあの話を伺つた時から、妾、しみじみあなたを尊敬してゐましたの。」

「お嬢さんお願ひですから、ハワイの話はもうよして下さい。」

次郎はさういつて制した。綾子は呆れて、その顔を見つめた。

「私の楽しい思出になつてゐるハワイが、何故あなたは嫌ひなんでせう——。」

綾子は低い聲で獨語した。

「その譯はやがて判る時が来ませう。とにかく今日はもう失禮します、少し頭痛がしてきましたから。」

次郎は綾子の止めるのを振り切つてそのまゝ、羽田の邸を辭した。

×

羽田の邸は原宿の外れにあつたので、電車までは少し歩かなければならなかつた。歩きながら次郎は先のつゞきをいろいろ考へた。

「おれはたまへ一時でも、心を許してくれた友達を裏切つて、そのために不自由のない生活にありつた。その友達はいま牢獄で死ぬるやうな苦役を強ひられてゐるのだ。その反對に、おれはいま盗まうと目指した人から恩人崇められて、そしてその最愛の娘をさへ許されてゐる。おれは羽田から金を盗まうとした。いまはその心を盗み、娘を盗まうとしてゐる。おれは悪人だ！」

考へながら歩いてゐるうちに、次郎はいつか電車道のちやうど四角の交番所に、一パイ人だかりがしてゐるところへ出て来た。

何の氣もなしにふみガラス越しにのぞく、みすばらしい男が、巡査の前でペコ／＼頭を下げてゐる姿が見えた。そばにはまだ若い女が、息をはづませながら、何かく／＼巡査に訴へてゐた。

「スリですよ。あの女の懐ろを狙つてやり損ねたのでさあ。」

始めから見てるたらしい男が傍の人にさういつた。

「スリー」

次郎はあはて、そこを立退いた。

「あの男がおれの姿だ。おれの姿はあの男と同じだ！」

X

次郎は電車にも乗らず、両手をオーバのポケットにつ、込んで歩いた。するに向ふの方から一人の男が編笠を被つて、巡査に繩を引かれながら来るのに出合した。次郎はまたあはて、道を外れた。

「あれがおれの本當の姿なのだ！」

次郎はもう歩くのが恐ろしくなつて自動車を雇つて乗つた。空が急に曇つて間もなくポロ／＼と降り出した。自動車は電車を疾走してゐるが、こある高架線のガード下で、バンクして止つてしまつた。

「すみませんが、暫らくお待ち下さい。」

さういつて運轉手は修繕にミリか、つた。傍を見るに、ガード下のじめ／＼した土の上に、惨らしい乞食の老婆が、子供をあやしなから座つてゐるのに眼がついた。その老婆は子供を眠らせやうと、子守唄を歌つてゐた。

「坊やは好い子だねんねしな。」

坊やの子守はきこへいた。

あの山越えて、里越えて——

次郎はその歌を聞くにもなしに聞いてゐるうちに、フツ／＼となつた母親のこゝろを思ひ出した。みるにその老婆はななしに母親に似てゐるやうだ。

「お、おつかさん！」

次郎は思はず涙ぐんで、ドアを開けその乞食のそばへ下りて行つた。そしてポケットから札を掴み出して、そこへ投げ出した。

「その子供はお前さんの子か。」

「い、え旦那様、これは孫ですよ。私には息子が一人ありますが、嫁をわしを放り離して、何處かへ行つてしまひました。嫁のお千代はいま病氣で——」

「え、お千代！」

次郎はその言葉を聞くに、ハツ／＼してまたその老婆を見つめた。

「お千代、こゝろはお前の娘か。」

「い、え、憚の嫁でさあ、孝行者でなアあなた。もう何年も戻つて来ぬ憚の代りに、わしを大切に呉れます。別嬪で、ほかからも、貰ひに来ますが、憚の歸りを待つこゝろいつて、ちつとも耳を傾けません。」

「お、千代ちゃん！」

次郎はその話を聞いてゐるうちに、たまらなくなつて頭を抱へた。涙が止め度もなく頬を流れた。

「おれは忘れてゐた。長い間、おれは千代ちゃんを忘れてゐた。すまない！すまない！」

次郎は絶えて久しぶりに、お千代のこゝろを思ひ出した。

「おれは自分の身體が落ちぶれる度に千代ちゃんを思ひ出した。身體が樂になるに、すぐにほかへ氣を取られた。すまない、すまない。」

「さうもお待たせしました。」

その時自動車が出た。自動車にゆられながら、次郎は、さうしても綾子さんの結婚を断つて、國へ歸らう、そしてお千代に逢はうと決心した。

×

その翌日、次郎は羽田の出勤するのを待ちかねて社長室に入った。

「結婚の話についてですが——」ミ次郎がいひかける。

「あ、あの話か、もう萬事手筈がミ、のつて、いよく明日日比谷の大神宮で式を挙げることにしておいたよ。」ミ羽田は軽くいつてのけた。

「エッ！明日。それは困ります。實は——」

「いいさ。いいさ。萬事私にまかせておきなさい。」

「いいえ、それはいけません。」次郎は一生懸命になつて、断らうとしかけたが、羽田は一言も耳に入れなかつた。

「ミにかく君は餘り内氣でいかん。もうよい。もうよい。心得た。心得た。ミにかく今日は一寸忙しいから、すぐ出なけりやならん。まあ明日の式さへすんだら、後でゆつくり話して聞かせる。」

いひさして、次郎の返事を待たず室を出てしまつた。次郎はあはて、その後を追つたが、もうその姿は、その近所になかつた。

×

「さうして、あなたはそんなに私が嫌ひなの？」

そこへ綾子が尋ねて來た。綾子の顔を見るミ、次郎は明らかにそれはいひ兼ねた。

「ほんさうにあなたは眞面目な方ね。」

何にも知らぬ綾子は「勿體ない。」といつた次郎の言葉ばかりを信じてゐた。

「わたし、これから美粧俱樂部へ行つて、明日の髪に結つて貰ふのよ。」

さういつて晴れやかに笑ふ綾子の顔を見るミ、綾子が何にも知らぬだけに、一そうその心根が思ひやられ、折角の決心がまたもや鈍り始めた。

「え、いゝなるやうにしかならないのだ！」

そしてさうさう次郎はその決心を投げ出してしまつた。

「萬事は偶然だ。もしもあの鍵穴から、八十八號室をのぞいてゐる時にボーイが來なかつたら、おれは部屋へ忍び込んでゐる。そしてああの強盗より、一足先へ牢獄へ行かなければならなかつたのだ。それが偶然から救はれたのだ。すべては偶然だ。なるやうにしか、ならないのだ！」

次郎はドツカミスに腰をおろして、今度は綾子と結婚する決心をきめてしまつた。

×

その翌日、日比谷大神宮では羽田綾子と室伏次郎との盛大な結婚の式が舉行された。

羽田社長は心から嬉しさうな顔をしながら、朝から子供のやうにはしゃいで、何くれもなく娘の世話を焼いた。

「お父さんのやうに喧しくいはれるミ堪まらないわ。」

綾子が抗議を持ち込んだりした。綾子も一生に一番嬉しいときの表情をして父親を更に有頂天にさせた。



「これは何といふ素的な花嫁だ！」

それに引かへて次郎の方は朝から浮かぬ顔をしてゐた。

「ここが身體の具合がわるいんぢやないんですか。」

ミ附添ひのものが案じたほきであつた、次郎は綱で引張られるやうにして、半ば無意識の裡に式場へ来た。

崇嚴な神宣の裡に、花嫁、花婿は御神酒を汲み交して、千代の契りを、永久に替へじミ、神前に誓はせられた。

「おれは神の前に出られる身か。」

そんな時にすら上の空で次郎はそんなこゝを考へた。

天 と 地

流轉を極めてきた、次郎の叙べてゆく生々の繪卷は、いまや色もあやな一點にはツ矢ミばかり凝固した——その夜次郎ミ綾子ミの結婚の披露の宴が開かれたのである。場景は開卷にさかのぼる、東京帝國ホテル——

ホテルの玄關は蟻の集が蟻を吸ふやうに喜びに集る自動車を吸ふ。羽田ミ媒酌人ミは玄關の奥に立つて賓客たちに挨拶した。

「やあ、おめでたう。おめでたう！」

人々は「おめでたう」の雨を降りかぶせた。羽田は有頂天になつて、一々それに答へた。

「いや御苦勞さま、御苦勞様。」

次郎は休憩室で腑ぬけのやうにボンヤリしてゐた。ボンヤリミ廊下を歩いて行く人々の足をみつめてゐるミ、清秀楚楚とした白足袋やバテント・レザーの靴の群がちらつく。あの靴はよく光つてゐるなアミ次郎は思ふ、あの足袋は恰好がよいなミブーツミ思つてゐる。

ミ、急に綾子が側から身をすりよせて彼の身體に觸つてきた、顔をあげて見るミ、禿茶瓶ミ靴クチャ婆さんの夫婦がにこやかに前に立つてゐる。

「おめでたう！」

綾子がクツミ笑を噛んだ、婆さんが、何か綾子に冗談でもいつたのらしい、次郎はだまつてお辭儀をした。

——これは、いつたいさうしたのだらう——次郎は彼をこりまいてゐる世界を忘れてゐた。地球をぬけ出して、空から地球の有爲轉變を眺めてゐるやうな氣でゐた。こんなやうな、光る靴や白足袋を子供のミき夢でみたやうであるが……。

ミ途端、ド、ンミ廣間で音楽が始まつた。

ローヘンダリンの婚禮進行曲。

給仕が羽田の前にやつて来て頭を下げた。

「皆さまおそろいになりました。」

廣間は面を伏せた花嫁花婿を中心にして各種の顔が展開した。媒酌人の鹿爪らしい顔、當夜隨一の貴賓である男爵の實業家の白髯、花嫁の父親羽田貿易會社の社長、等々々。

卓にあふれた盛花、か、やく銀のナイフミフオウク、グラスにみちみちてゐる琥珀色の泡だつもの。  
勇ましきもの、美しきもの、幸あるこの一對よ……。

婚禮マーチのゆたかなさ、めき、これに足拍子を合はせて皿を運ぶ給仕達、人々は心嬉しくなつてこの榮ある新郎新婦を心から祝福した氣になつた。

×

媒酌人の挨拶がいかにも諄々しく次郎には思へた。彼は俯むいてテーブル・クロスの綾模様の敷をかぞへた。挨拶がをはるこしきり拍手が鳴つた。するも男爵がやをら立上つて、場なれた常套の祝辭を始めた。

「……この才氣迸つて清直なる花婿、花も恥らふ美はしい花嫁……た、お二人が幾千代かけて圓滿な家庭をいみなまれんことを切に祈ります。」

つゞいて乾盃！乾盃！誰かいつた。媒酌人に促がされて花嫁花婿は立ち上らうとした。ミ何者か力をこめて次郎の身體を地の中へ引きこんでゆくやうな氣がした。イスが引つか、つたのである。

その様子を見て、さつきからヂツミ花嫁花婿を見つめてゐたすぐ後ろの給仕頭が、つミ次郎のそばへすり寄つてイスを後ろへ引いた。

「これではならぬ。」

ミ次郎が足に力を入れて立ち上がるのミ同時であつた。二人は危く鉢合はせをしやうとしてハツミ顔を見合せた。給仕頭は黒眼鏡をかけてゐる。

「アツ！黒眼鏡！」

次郎は給仕頭の顔を見上げた。黒眼鏡の底に光る眼！

「あ、黒眼鏡！東京驛！小野田！大崎！人夫頭！強盗！あ、六番目の黒眼鏡！」

次郎は眼をつぶつた。つぶつても蕭々として暗やみに迫る黒眼鏡一つ、二つ六、十、百、千、萬……。

次郎はひきこまれまいとするすべての抵抗の力を放棄してしまつた。地球にボカンミ穴があいてその穴へ次郎は陥つた、全速力で地球の中心に落ちてゆく、風を切つて暗闇の底へ……次郎はバツタリミ卒倒した。

×

並みゐる人々は吃驚して腰を浮かせた。

「おい、さうしたのだ。」

すぐそばの羽田が次郎を抱き起して、グツミブドウ酒を飲ませた。

「しつかりしなくちやいかん。」

次郎はボンヤリミ眼を開けた。彼はまだそばに黒眼鏡が立つてゐる姿を見た。給仕頭は彼の腕を抱いて立つてゐた。

「裏切り者、お前は假面を被つて、この純無垢の少女を盗まうとするのか！」

その黒眼鏡は物凄い顔をして次郎に迫るやうに見えた。彼はバツミ給仕頭の手を振り放した。給仕頭は吃驚した。

「強盗！」

次郎は人々を見た。羽田も綾子も、男爵も、誰も彼も、みんな黒眼鏡をかけて、ヂツミ次郎を睨みつけてゐるやうに見えた。

「お、ツ！、黒眼鏡！おれはもう駄目だ。」

綾子が不安な顔をして、彼の腕にすがりついた。  
「あなた、しつかりして下さい。」

次郎は綾子を見た。もう黒眼鏡をかけてはゐなかつた。綾子の可憐な顔を見て次郎は涙ぐんだ。

「綾子さん。すまない。すまない。許して下さい。僕は、僕はあなたを盗まうとした。誘拐しやうとした。」

「エッ！」

人々は不安氣に次郎を見つめた。次郎はすつくミ立ち上つた。

「諸君！、私はごんげします。私は、私はミてもこの席上にあるミはできないものです。私は泥棒です。私は純真な少女を盗まうとした泥棒です！」

「何をいふのだ。」

羽田は驚いて止めやうとした。しかし次郎はなほも言葉を續けた。

「私は、何を隠さう、ハワイの強盗です。私はホテルに忍び込んでこの羽田親子を殺さうミしてゐたのです。それが、それに、私は友達を裏切りました。そしていまはその殺さうミした娘さんの花婿にをさまり返らうミしてゐるので。私は今日まで諸君を欺して來ました。私は今すべてをさんげいたします。私はハワイで捕へられたあの強盗の片われなんです。」

×

華やかだつた宴會は忽ち大混亂に陥いつた。花嫁の綾子は、次郎の言葉を聞いて、バツタリミその場に卒倒してしまつた。羽田は餘りのこに呆れかへつて、その場に棒立ちになつてしまつた。舌がこはばつて、何の言葉も出なかつた。

綾子を助け起さんミ、駆け寄る人々、次郎を逃がすまいミ、ひしめく人々。醫者を命ずる人々、右往左往にさわめくボイ達、宴會は滅茶苦茶になつてしまつた。

次郎はいふだけのこをいつてしまふミ、氣拔けのやうになつてフラ／＼ミその席場から抜け出した、五六人その後を追つて來たけれど、狂人のやうに眼を据ゑた次郎が、振りむくミ、そのまゝ、たち／＼ミ後退りして立ち去つてしまつた。

次郎はホテルを出て街に出た。無暗矢鱈に行き先きもきめず、フラ／＼ミ歩きまはつた。

×

歩きまはつてゐるうちに、次郎は何ミなく心の軽くなるのを覺えた。何だか重荷を卸したやうな心持を覺えた。

「おれは長い間羽田親子を欺して來た。それは俺が東京で、もう一旗擧げて、立派な人間にならうミいふ野心があつたらだ。立派な人間！、俺は漠然ミそんなこを考へた。立派な人間ミいふのは一體どんな人間をいふのだ。富か地位か、名か——」

「俺は野心を遂げるために、今日までみんなに良心の苛責に堪へて來たこだ。おれはいろ／＼ミ良心に辯解して來た。そして自分獨り極めの逃げ口上をこしらへて、けふまで強ひて安心して來た。」

「見ろ！、ミ／＼その安心が本當の安心でないこがわかる日が來たではないか。俺の運命を暗示するあの黒眼鏡が、けふこいふけふに現れ出たではないか！」

×

こをさう通つたのか、こから汽車に乗つてこへ下車したのか、次郎はミある山道を上つて、ミぼ／＼ミ歩いてゐた。

結婚式の時に着て出た禮服を着たなり、彼はヒロヒロミ上つて行つた。何度も何度も次郎は足をすべらせては山道に倒れた。ある時は草叢に倒れたまゝ、小一時間もそのまゝそこに横たはつて、大空を眺めてゐたりした。彼は痴呆症のやうになつて、こりこめもないこみを口ずさんだり、考へたりして歩きまはつた。

どこでも好い、みんなどこでも好い、この悶を苦しむ心の悩みを安めて落つかせてくれるところはないか？彼は焦燥と不安と鬱鬱と、あらゆる人間の煩悶を、一時に感じながら、身のおきまゝに窮した。そして無茶苦茶に、無鐵砲に、無二無三に歩いた。彼はこのまゝ、世界の果までも歩くやうな、足ざりて歩きまはつた。

いつしか彼は田舎道を歩いてゐた。それはどこかの村か解らなかつたが、彼にはそこがどこであらうと構はなかつた。跣跟ミ歩いて行く彼の姿を見て、村の人は不審の眉をひそめた。

「あれは狂人か。」

次郎はその人々に向つて叫んだ。

「おれは狂人ではない。おれは孤兒だ。誰一人頼る人もない孤兒だ、誰かおれをしつかミ抱いてくれるものはないか？」

「やつぱりあれは狂人だ。」

小石を拾つて投げつける子供すらあつた。

歩いてゐるうちに彼はミある學校の傍をミほりかけた。彼はぼんやりミ校舎の窓をのぞき込んだ。教室では一人の女教師が、黒板に「天ミ地」ミ白墨で書いて、その間にまた「人」ミいふ字を書いてゐた。

「天ミ地の間に人がゐるのです。天ミ地を分けるものが人間です。」

次郎はその女教師が説明してゐるのを見て叫んだ。

「そして天ミ地から打たれるんだ。それが人間なんだ！人間は天ミ地の受難者だ！」

生徒達は吃驚して彼を見た。彼はあはて、その窓を離れた。生徒達は窓から首をつき伸ばして、彼の後姿を見た。

「やあい狂人！」

腕白さうな生徒が叫んだ。

「皆さん、静かになさい。あんな人に相手になつてはいけません。あの人は酔つばらひです。」

女教師はさういつて、窓の硝子を閉じた。

「おれは狂人か、わしは酔つばらひか！ちがふ。ちがふ。俺は當り前の人間だ。人間だ。おれはすべての人間が苦しんでゐるミ同じ苦しみをしてゐる人間だ、その苦しみをハッキリミ知つてゐる人間だ。」

それから幾日後、次郎はまたどこからか汽車に乗つて、どこかへ下車した。そこもやつぱり田舎であつた。彼は相かはらず、フラ／＼ミ歩いてゐた。いつまでたつても彼の煩悶は癒えなかつた。落つけなかつた。

フト氣がつくミ、彼はいつの間にか、淋しい墓地に入り込んでゐた。澤山の石塔が、つめたい石が、蒼白い月光にさらされて、しよんぼりミ立ちならんでゐた。その石塔も、その石塔も、淋しさうであつた。この世の中から取り残されたやうに、除けものにされたやうに、淋しさうであつた。

「これがおれの姿ではないか！」